
黒き騎士王 - Alternative Edge -

賽子 青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒き騎士王 - Alternative Edge -

【Nコード】

N9556V

【作者名】

賽子 青

【あらすじ】

第四次聖杯戦争、カーテンコール。燃え盛る冬木市民会館を舞台に、本来有るべき歴史が揺らいだ。ほんの僅か、たったひとつの偶然が世界を変えた。全てを呑みこみ焼きつくす泥は、英雄王だけでなく騎士王すらも飲み込んだ。黒く黒く黒く染まった独裁と狂乱の黒き騎士王は、現代の裏社会でどのように戦い、どのように生きるのか。

Over . . . Prologue

Over . . . Prologue

歴史は、ほんの僅かな出来事に左右される。

第四次聖杯戦争の最終局面。

聖杯の泥があふれ出した阿鼻叫喚の地獄にて、二人の英雄が殺意を漲らせた視線を交える。

その舞台にて踊るひとり目の賓客は、アーチャーこと『英雄王』
ギルガメッシュ。

2

此度の戦争でかの魔法使いゼルレツチの系譜に連なる遠坂家頭首、遠坂時臣を勝利させるべく召ばれた人類最古に叙事詩に記されし英雄である。

だが戦争には付きものである紆余曲折の果て、彼は聖堂教会の代行者、言峰綺礼を新たなマスターとしていた。

王の身を飾るのは、猛る炎のように逆立てられた美しい金の髪。
その全身を覆う、滑らかで頑強な黄金の鎧。

傍若無人な態度に、確固たる王の威厳を内包する金色の英雄。

世界中の財を集めてもなお足りぬであろう財宝を惜しげもなく投入する彼は、鮮血よりもさらに赤い紅玉の瞳で眼前の敵を睨みつける。

そしてもうひとりの賓客はセイバーこと『騎士王』アルトリア・ペンドラゴン。

此度の戦争で魔法使いを輩出した名門アインツベルンのマスター、衛宮切嗣を勝利させるべく召還された、かの名高き聖剣の主である。だがやはり紆余曲折の果て、彼女はマスターのおらぬ独立したサーヴァントと成っていた。

さらに彼女自身にも明確な変化が見られる。

今の彼女はかつてのように『聖剣の王』と名乗ることを赦されまい。

白銀の筈のドレスメイルは漆黒に染まり、翡翠の眼は殺意によって煌々と輝く黄金へと変った。

彼女は空から降り注いだ黒い泥に吞まれ、今までとは別のナニカに変化し、そこに在るのだ。

アーチャーとセイバー。

戦場にて最も多くの死者を出す武器の担い手と、聖杯戦争において最も優秀とされる剣の英霊。

歴史の分岐点。

Fate（運命）が用意した最後の演目は、黒き剣と黄金の弓によって色どられる。

だが、この儀式の名を借りた戦争にて、勝者に与えられるべき聖杯は既に亡い。

ならば何故、彼らは争うのか？

それはいたって明快な理由である。

彼女らは、戦うためだけに過去から召還されたサーヴァント。己が存在を賭け、戦う理由はそれで充分なのだ。

歴史が変わる刻

どうすれば……ッ！

火災の炎に包まれる冬木市民会館。

その中心的施設であるコンサートホールの舞台上に、黄金の聖杯が浮いていた。

燃え盛る炎に照らされ、眩い赤金の光を放つ聖杯を目の前にして、ひとりの少女が床に這い蹲っている。

彼女こそ、第四回聖杯戦争に『セイバー』として参加した騎士。

一族より第三の魔法使いを輩出した名門、アインツベルンに召還された伝説に謳われるブリテンの王、アルトリア・ペンドラゴンその人である。

聖杯を前に、騎士王は極限の選択を迫られる。

その原因は、彼女の目の前で胸を張る黄金の甲冑を纏う青年。

同じく此度の戦争で、アインツベルンと同じ御三家に名を連ねる遠坂に勝利をもたらす為にアーチャーとして参加する、いまだ真名の知れぬサーヴァントである。

「……妄執に堕ち、地を這ってなおお前という女は美しい。

奇跡を叶える聖杯など、そんな胡乱なモノに執着する理由など見当たらぬ。

セイバーよ、お前という女の在り方そのものが、既に奇なる奇跡ではないか」

「貴様は…何を……」

「剣を棄て、我が妻となれ」

この者はあるう事か、敵である彼女に自らの圧倒的な暴力を見せつけた上で、彼女に婚姻を迫っていた。

そして振り翳された圧倒的な暴力こそ、彼女をこれでもかとはかりに囲み狙う、無数の武器。

このサーヴァントは英雄にとって『一』なる宝具を大量に持ち、湯水のごとく使い潰す魔弾の射手。現在、その全てが彼女を狙っている。

しかもさらに悪いことに、彼女は先程まで戦っていたバーサーカーによって肉体と精神の双方に傷を刻み込まれた。

その曇りひとつ無かった白銀の鎧と白磁の肌は黒い強化の煤で汚され抜き、血の気の失せた肢体は白蠟のように青ざめている。

まさに満身創痍の状態だった。

だがそれでも、彼女は聖杯を求める事を止めなかった。
なぜならもはやそれだけが、彼女が戦う理由なのだ。

男の向こうで着々と降臨の進む聖杯。

そこに誰の手も……器の護り手であり、自らが騎士の誓いを立てたアイリスフィールの姿も無いという事実が、彼女に全てを悟らせた。

『あの聖杯は、アイリスフィールの命と引き換えに降臨している』

なればこそ、あの聖杯をこの手に収めない訳にはいかない。
護ると剣に誓ったのに、果せなかった。

かつての祖国や、盟友を救えなかった様に。

だからせめて彼女との約束だけは、彼女の願いだけは、貫くため
に。

アルトリアは、黄金の聖杯に手を伸ばす。

幸いにして、目の前にいるこの男は油断しきっている。

まさかこの私が宝具をもって反撃に転じようとは夢にも思ってい
まい。

しかしそうすれば、宝具の斬光はアーチャーとともにその線上に
ある聖杯も飲み込み、消滅させるだろう。

それだけは避けなければならなかった。

狂おしいまでの執念で黄鉛色に染まった瞳は、動かない身体の中
で唯一、活路を探り巡っていた。

「……！」

そして、見つけた。

二階席の位置に当る壁面から、テラス状に張り出したボックス席。
そこに亡霊の様に佇むロングコートの人影を。自身の正規のマス
ターである、衛宮切嗣の姿を見つけ出した。

絶望的だった状況に、一縷の光明が指す。

彼の腕に未だ残る令呪。

自らのサーヴァントとの同意と共に絶対の権限を以って告げられた命令は、時に魔法に等しき奇跡さえ引き起こす。

セイバーは思う。

あの位置からならばこのホール全体が見渡せ、彼が真に聖杯を望むなら、その取り得る手段はひとつだ。

その為のどんな奇抜で奇妙な戦術であろうとも、今だけは応えてみせる覚悟を決めた。

はたして切嗣は令呪の宿った右手を掲げ、いままさに令を告げるところだった。

歴史が変わる刻

ここで正史には無い、ほんの僅かな偶然が起こる。

だがそれは、後の歴史を決定的に変革する最初の一手だった。

平行世界を定義する理論において、大きな改変事項は必要ない。

否、そんな大きな改変事項は突然には起こらない。

大事は常に小事によって誘引され、その小事をさらなる微細な事象が誘発する。

此度、歴史を分岐させる要因となったモノは、ほんの僅かな火の欠片だった。

燃え盛る炎に髑られた天井の装飾の一部が焼け落ち、セイバーの首筋を焦がしたのだ。

「ぐっ!？」

柔肌を焦がすその熱に、セイバーは思わず苦悶の声を漏らす。

その声にアーチャーが反応し、彼女の顔に視線を送ったことが、後の歴史を決定的に変える事になった。

彼はセイバーの眼が自分ではなく、全く別の一点を注視している事に気付き、振り返る。

そこには令呪を掲げ、いまにも奇跡を行使しようとする魔術師の姿があった。

「おのれ、我が求婚の儀を邪魔立てをするかッ、雑種めが！」

初めて切嗣の存在に気付いたアーチャーは、セイバーを囲む宝具を一齐に反転させて打ち出す。

宝具の軍勢は、彼のいるボックス席を粉微塵となるまで徹底的に塵殺した。

だが、

「固有時制御 (Time altwr) ・ 四倍速 (square accel)」

彼は、己が秘術を以って、己の時間だけを倍速する。衛宮切嗣は背中に宿る魔術刻印を以って時を操る魔術師であった。

だがその代償としては大きい。

術を解いたとき、加減速でずれた時間を修正しようとする世界に

よつて齎される『揺り戻し』は恐るべき牙で彼を引き裂く、鋭すぎる両刃の剣。

そのために、彼が使えるものの封じていた禁呪に三倍速がある、いや、あつた。

此度はさらにその先にあるものを行使する。

体内に秘めた現存する宝具。気高きエクスカリバーの鞘、遠き理^ア想郷^{ヴァロン}の力を借りて発動させたのは、破滅の呪。

狂気の沙汰である、四倍速。

先程、彼は聖杯から溢れた泥を全身に被り、死の病に冒された。

だが、未だ体内の『鞘』は起動状態にあり、呪いと時間の揺り戻しに蝕まれる身体をその端から治す。

その治癒は己の術の揺り戻しによる自傷にも有効である。

常人の四倍の時間という人ならざる速度を手に入れた彼は、沸騰する脳髓と精神を切り離し、壁を疾駆して聖杯の下へと着地した。

衛宮切嗣の名の許に、令呪を以って我が傀儡たるセイバーに命ず

同時に発動される令呪の絶対権限。

命ずる声は、耳ではなく魂の根幹に働きかけ、聞き間違つことの無き声がマスターの命令を告げる。

此処に馳せ参じ、そして宝具を以って

勝った、とセイバーは確信した。

切嗣の居る位置は聖杯の真下。

その位置からなら聖剣の光は聖杯を損なうことなく、アーチャーを撃滅するだろう。

聖杯を、破壊せよ

だが宣告された勅命は、彼女の予想からかけ離れたものだった。

「えっ？」

どう理解すればいいのか、理解し様も無い言霊にセイバーの思考は空白と化す。

だがそれでも、サーヴァントである彼女の肉体は瞬時に霊子へと分解され光の速度で移動。

聖杯の袂、切嗣の隣で再構成される頃には、その黄金の剣を下段に構えて聖杯を破壊せんと振り上げる状態にあった。

「な、何故!?!」

セイバーの疑問に答えるならば、衛宮切嗣は聖杯を得るためにアーチャーを滅すつもりなど露ほども無かったと答えよう。

彼が令呪を以ってセイバーを聖杯の真下に呼んだのは、邪魔をさせない為。

彼女に執着する黄金のサーヴァント。

今もなお十全の戦力を誇る彼の魔弾を目の当たりにし、僅かだが聖剣の発動を阻害される可能性を考慮した為である。

その点、聖杯からの距離が2メートル弱という舞台の上からならば、例えば彼が何をしようとも彼女の斬撃を阻むことは出来ないと踏んだのだ。

「な、馬鹿な、何のつもりだ!?!」

僅か数秒、眼を離れた隙に自分の前から姿を消したセイバー。

アーチャーは首を巡らせ、再びその紅い眼に捕らえた瞬間、その行動に驚愕する。

同時に、周囲に宝具を装填し、駆け出す。

だが遅い。

この状況下において、彼の立つ通路から舞台までの距離は、彼が不死の妙薬を求めて歩んだ道のりよりもなお遠かった。

いよいよセイバーの握る黄金の剣は、唸りを上げて同じ色を纏った杯を滅却せんとその身を輝かす。

「ふざ……けるな………」

だが黄金の光を湛えた聖剣は、舞台の床を削り、あとは振り上げるだけという体勢で、空間に縫い付けられたかの様に凝固する。

伝説の騎士王として、最優のサーヴァントとして現界した彼女に備わった特級の対魔力は、令呪の強制を寸前のところで食い止めていた。

しかも今回の令呪で命じられた事柄は実質的に二つ。

よってその強権の拘束力も半減し、ほんの僅かだが動くことすら可能だった。

「……切、嗣。アー、チャ………」

身体に先んじて首が廻り、傍らに佇む自身のマスターと走り寄ってくるアーチャーの位置を確認する。

令呪の拘束と、それに抗する抑止。

鬨ぎ合う二つの力はセイバーの小さな身体を蹂躪し、引き裂かればかりに荒れ狂う。

遂には魔力が可視出来るほど濃密な朱色の電雷となって彼女に命令の遵守を強要する。

その激痛の中、明確な殺意を宿して見開かれた黄鉛色の瞳は、最高級の魔眼である“黄金”を宿したかの様に輝いた。

「衛宮、切嗣。」

貴方、は……最後の、最後、で。アイリスフィー……ルすら、裏切つ、た。

故に、貴、方は……こ、こで、アー、チャーと共に……消え、去れええ
「！」

騎士の矜持が、魂が、吼えた。

怨嗟と憤怒、絶望と憎悪に満ちた精神は魂を奮い立たせ、ギリギリと聖剣の角度を修正していく。

その負の感情が臨界に達した瞬間、あまりに歪な奇跡が起こる。

先の戦いで、彼女の全身に刻み込まれた狂戦士の煤。

それが彼女の感情……溜まり昂ぶり溢れ出した負の念に呼应し、魔力となつて彼女の鎧を漆黒に染めながら、補強した。

「アアア a a a

！！

「！！」

黄金の瞳から赤い狂光を発し、セイバーが狂戦士の如く絶叫する。それは窮地に陥った主への、忠義の士であったランスロットから

の贈り物か。

はたまた怨憎の化身となって立ち塞がったバーサーカーが、彼女を嘲笑うための呪いだっただのか。

セイバーの余りの変化に思考を止めた二人を置き去りに、彼女の両足は確たる力をもって舞台の床を踏みしめる。

朱雷に包まれる彼女の腕は、聖剣は大きく震えながらもその角度を床と水平とした。

「~~~~ツ!!」

ジクジクと彼女の精神を犯す狂戦士の魔性は、やがて彼女の最も深き場所に伏す竜の因子にたどり着き、その逆鱗に触れた。

不意に身体の最奥から溢れ出す魔力に、セイバーの口は狂いながらも握り締めた宝具の真名を告げんと動き始める。

「(エクス)……」

両の足が地面を踏みしめ、身体がギシギシと歪みながら捻転する。彼女の黒い魔力を増幅、変換した聖剣の光は斑に黒く染まり始め、輝く黄金の瞳は燦然と光を放つ。

「くっ!!」

いよいよこれは拙いと判断したアーチャーが、その射角から外れるべく離脱を開始した。

一方、彼女の隣で最も強い憎悪を向けられている切嗣は、固有時制御を二倍速に落ち着かせて瞑想し精神を研ぎ澄ませている。

だが既に彼女の魔力は枯渇に近かったために、裡に溜まっていた魔力もほんの僅か。

魔に狂った竜は、さらなる魔力の素を求めその顎を開く。

はたして竜の因子が魔力の素として喰らったのもまた、アルトリアの魂を犯す狂戦士の煤だった。

「……………」

魂を、激痛が突き抜ける。彼女のモノとは相反する黒い魔力が、身体を内より蹂躪する。

限界を易々と踏み越える猛痛に、彼女は喉が潰れんばかりに絶叫した。

竜の因子によって増幅された闇は、あたかも放射能によって細胞が変性するかのように彼女の身体を隅々まで蝕み、穢し抜く。

「アアアアアア……………」

その魔力が彼女の精神を侵食した時、狂熱に茹っていた筈の脳髓が急激に冷える。

その根底に狂気を孕み、彼女の理性は覚醒した。

そして再誕した彼女の思考は、即座に現在の状況を判断する。

切嗣とアーチャーの位置、共に射程圏内。

このまま横に振り抜けば聖杯を損することなく、邪魔な二人を消滅させる事が出来る、と。

「約束された勝（エクスカ）」

B a n g : ! !

その瞬間を、銃声が貫いた。

セイバー口から聖剣の真名が七割がた発せられるこの瞬間を、切嗣は待っていた。

そして終に、右手に握られたトンプソンコンテNDERが火を噴く。

銃器という、他者の動きを読む技術とタイミングを合わせる技術を要求される物を主武器とする彼が、その刹那を逃す筈はない。

魔術によって強化された30・06スプリングフィールド弾は、彼の狙い通りセイバーの後ろ足が乗った床を吹き飛ばす。

そして不意に足場を失ったセイバーの身体の傾きが、聖杯の角度と一致した瞬間。

第三の令呪を以って重ねて命ず。セイバー、即座に聖杯を破壊しろ！

「　　ッ！！」

足場の消失に気を取られ、彼女は魂に直接告げられた命令に対して、反応が遅れた。

ありのままを移す彼女の瞳は、黄金の聖杯を真正面に捕らえている。

『しまった。』

ここは聖杯の真下、決して外す事はない』

次いで起動した頭が事実だけを、自身の失態を知る。

切嗣が『聖杯を破壊せよ』という主題に付加した冠詞は『即座に』そして、目の前に浮かぶ聖杯を最も早く破壊する方法は

『聖杯が、私の求めていたモノがそこにあるというのに。』

貴様は　　私の最後の願いすらも貴様は奪い去るのか、切嗣ッ！！』

心が最後の抵抗を叫ぶ。

だが令呪は彼女の両腕を縛る強権を内容に沿うカタチで改変し、サーヴァントである彼女の身体は、残る真名を確実に繋いだ。

「勝利の剣（カリバー）」

やめるおおおおおーッッ！！！！

セイバーの悲痛な叫びとともに放たれた黒と金の斑な光は、聖杯を切り裂き消滅させた。

令呪の縛りから開放された彼女の身体が、どうと舞台に投げ出される。束ねていた白金の髪が解けて床に広がる。

「く、何故だ。確かに此処に、聖杯が此処にあったのだ。

ようやく、ようやく手に入ると、そう思ったのに、何故……!？」

世界と契約してまで求めた聖杯を、自らの手で壊したという事実
にセイバーが慟哭する。

そんな彼女の頭上から、瓦礫が降り注ぐ。

聖杯を斬り裂いた聖剣の光は更なる獲物を捕らえ、市民会館の屋根を吹き飛ばした。

その衝撃に延焼の進んだ会館は耐えられず、建物の上階がホールの中に雪崩れ込むように崩落を始めたのだ。

同時に、もはや変性し切った黒い身体が、魔力の枯渇で次第に消え逝く。

たとえ狂呪に穢れきったモノとはいえ、セイバーは竜の因子によって追加の魔力を得ていた。

その為に、彼女は、令呪による宝具の強制発動をなんとか耐え切る。

だが、それもここまで。

瓦礫がすり抜けるほど希薄になった彼女は、割れた天井の隙間から空をぼんやりと見上ながら消滅の時を待つ。

そして見上げた空に、彼女は確かに見た。

禍々しく自己を主張する、どす黒い太陽を。
柳洞寺の地下大空洞に設置された大聖杯と、此処とを繋ぐ孔を。
そこから垂れる、怨嗟と呪詛に満ちる暗黒の雫を。

詰まる所、アインツベルンの『器』とは、それ自体では聖杯足りえないのだ。

その役割は円蔵山の空洞に設置された大聖杯と、降臨の場所を繋ぐ孔を穿つものであり、それを制御するための『鍵』ではない。
大聖杯が根源へと至る為に六十年に渡って地脈から貪り、そこへさらに五人の英霊の魂を加えて精製した膨大な魔力。

本来ならば根源への道を架けるはずのソレは、先の聖杯戦争によって黒く濁りきっている。

その泥が、孔から一気に降り注いだ。

確かに『器』の制御を失ったことで孔は閉じつつある。
しかし孔が閉じるまでの間に溢れ出る黒く染まった悪泥あくいを押し止めることは、もうどうやっても不可能だった。

「あ !?」

その泥を眼にして驚愕するセイバー。

だが彼女が声を上げるよりも刹那早く、泥は彼女を飲み込み、霊的存在である彼女を瞬時に溶解/吸収した。

生誕の詩

第三次聖杯戦争において、ひとりの青年がサーヴァントとしてアインツベルンに招かれた。

“彼”のクラスは、通常在り得ざる八番目の席、アヴェンジャー。そこに座る青年の真名はアンリマユ。

拜火教の悪神の名を冠す青年は、その名に恥じぬ、最も悪性の存在だった。

だが、所詮は小さな閉じた世界を救った反英雄。

その力は他の英霊と比べるまでも無いほどに弱く、彼は早々に戦争から脱落する。

だが、その彼が聖杯に至った時、奇跡が起こった。

彼は悪性という意味では、正しく英霊に相応しい存在密度を持っていたのだ。

無色な魔力の塊である聖杯は、無色であるが故にたった一滴の悪によって見事に染め上げられる。

『この世、すべての悪であれ』

そう願われ、誕生した英雄によって染まった聖杯ははじめて志向性を得る。

英霊の情報が還る刹那を捕らえ、根源への道を通すはずの魔力は、全てを焼く破壊と焦熱の澱みと成った。

この世、すべての悪^{アンリマユ}

それが、聖杯に溜まる悪性の真名。
それが、孔より零れる呪泥の真名。

滴った泥は孔の真下でセイバーを捕らえ、魔力枯渇によって消滅寸前であった彼女を一瞬にして吸収する。

同じ霊的存在である彼女に、泥に抵抗する術はない。

瓦礫の下。崩れ行く高層ビルの屋上。

それら僅かな例外を除いて、泥の波は街の悉くを呪い、灼く。

二つの霊的存在を飲み込んだ泥は、すぐに近隣の民家に達し、阿鼻叫喚の大火災を引き起こしたのだ。

第一話

生誕の詩

渦を巻く。

罪が、この世の悪性が、逆流し増幅し連鎖し変換し渦を巻く。

暴食色欲強欲憂鬱憤怒怠惰虚飾傲慢嫉妬が巡り廻り犯し侵し冒して渦を巻く。

反乱罪牙保罪恐喝罪淫姦罪毀棄罪強要罪脅迫罪窃盜罪逃亡罪誣告罪放火罪侮辱罪不敬罪

そんな下らぬ議論は他所で行え。

“ !? ”

呪いの声は問う。

他所？

ならば、この悪は何処へ行くべきなのだ？

誰の下に？

何処の集団に？

あらゆる場所に存在する故にどこにも居ないこの悪の生き場は何処か？

そんな、闇の審問に、覇気を漲らせた声が答える。

私を知るか、自分で考える。

その問い自体が無為であると気付け。

私が貴様に教えられることは唯ひとつ。

私を阻むな。

阻むならば、私は剣を以って貴様を滅す。

“ !? ”

泥は問う。

己の中にありながら、己を抑すなど言ってお前は何者かと。

そして問うてしまってから矛盾に気付く。

『個』の存続など決して許さぬこの場所で、泥はまたも自らの中

に他者を認めてしまった。

さらにもうひとつ、在り得ざる筈の異物を抱えてしまった。

それは魔剣の主、即ち魔を纏う剣王。星の創りし神造兵器を闇に浸した背神の凶戦士。

彼女の名は

『黒き騎士王』アルトリア・ペンドラゴン

/
/
/

「だから黙れと言っている。

不快だ。貴様のような汚濁が私に関わるな」

黒い泥の海で、私の周囲から逃げるように泥が退いた。

泥は、自らの怨嗟の半分を以ってしても、終に異分子（私）を消化しきれなかった。

故に泥は、次善の策として、私という絶対的な我心じんかくを吐き戻す。

泥が、私に屈したのだ。

「くっ……」

そして燃え盛る大地に膝を付き、裸身の私は静かに眼を開ける。

熱風に揺れる白金の髪、煌く黄金の瞳。

魔力が枯渴し白蛾の様だった肢体は、泥より魔力を強奪し白磁の

輝きを取り戻している。

彼女の肉体はもはやサーヴァントとしての霊体ではなく、現世の肉より成る真正銘の実体であった。

「く、ふふ、ふ。悪くない……」

一時でも同化した今なら解る。あれは、かつてアインツベルンが辿り着いた第三の片鱗なのだ。

あらゆる生命を否定する泥が、自らの内に紛れ込んだ不純物を結晶化させて破棄した結果。

私は黒く反転したままに、遂に受肉を果たして現世に帰還したのだ。

「だが、台無しだ。」

これでは新しい肉の感触を愉しむこともままならない」

その肉の身体に感じるのは、肌を撫でる　　というには少々熱を持ちすぎた風。

焼けた大地の熱さ。身体を焼く炎の痛み。

「風王結界（インビジブル・エア）」

私は即座に風の宝具を起動させ炎を吹き飛ばす。

受肉しても滞りなく発動する宝具の力に満足し、同時に熱から身体を護る為にまず服と具足を出現させた。

「こんなところか。それにしても、あんなものが聖杯とは……馬鹿げている。」

あんな塵芥にも劣る愚劣なモノを巡って、我らは争っていたのか」

私は落胆した。

あんなモノが、冬木の聖杯。

あんなモノをかつての私は求め、あんなモノのために幾多の英雄が命を散らしたのか。

伏せた視線を上げれば、そこは炎の草原。燃え盛る炎と、灼け爛れる瘡の群れ。

黒い孔から流れ出た汚泥が、大地の全てを呪っていた。

「この規模……」

死者の数は三百を下るまい」

きつとこの場を、より鮮明な霊視が出来るものが見れば、宙を漂う無数の靈魂が見えるだろう。

それがあの泥の悪性によって犯され、近い将来ここは怨嗟の声で満たされる。

向こう数十年。この地に命が芽生えることは決して叶わないと、私は確信した。

「残っているものは、おらぬか。」

私に忠誠を尽くすと誓うならば、慈悲をやるというのに」

服の裾を翻し、絶望を冠す聖剣　　否、魔剣を手に、焼け野

原を闊歩する。

高熱にさらされたコンクリートは具足で踏むだけで簡単に砕け、酷く足場が悪い。

煙と埃は風の護りが弾き飛ばすが、うっかりすればそれが逆に埃を巻き上げ、視界を遮ってしまう。

「　　うん？」

ふと、足下に黒い塊があるのを見つける。
既に完全に炭化しており、足先でコツンと蹴っただけでボロボロと崩れるほどに脆い。

よく見ると、それは赤子の頭部のようだ。

ならば、それを抱えるように伸びるこの黒い二本の棒は、母親が父親の腕だろう。

その先は瓦礫の中に埋もれ、未だ黒い煙を上げている。
肉の焼ける匂いが、辺りに充満している。

「人の業とは、かくも醜き物か。」

此れならば、真黒の絶望のほうはまだ美しい。真紅の悲嘆のほうはまだ芳しい」

ひと思いに、それらを聖剣で纏めて薙ぎ払った。

周囲の瓦礫ごと、親子の亡骸が塵となる。せめて、その一部でもこの呪いの外に流されればよいのか。

「ほう」

そんな姿になったというのに、ずいぶんと優しいのだな」

不意にそんな、不遜な声が聞こえた。

「優しい？」

馬鹿め、どうやら貴様の眼には未だあの泥がへばり付いていると見える。

民の死を悼むのは王として当然のこと。それが解らぬなら、王を名乗るな」

「八、莫迦は貴様の方だ。
万民の命は既に、王である我に捧げられた財貨である。
我がその財を失って後悔こそすれ、貴様がそれを悼むのは筋違い
であろう」

背中ごしに感じる声。

その声の主など考えるまでもなく、私は身に纏う衣を鎧で包み込
む。

「見誤るな、虚け。民とは自由なき自由を与え、管理するものだ。
そして王の生業とは、それに対する絶対的な統治だというのに、
その民を財とみなすとは。

やはりどうあっても、貴様とは解り合えぬようだな、アーチャー」

「雑念に堕ちた貴様に価値などない。

疾く、消えよ、セイバー。この王の手を煩わせるな」

私が振り返ると、ひときわ高く積み上がった瓦礫の頂上に、黄金
の弓兵が立っている。

奴は戦支度を整え、確たる肉の身体を持ってそこに在った。

どうやらあの不遜な王もまた、私同様にあの泥に打ち勝ったとい
う事のようにだ。

「笑わせる、王を名乗るものが覗きとは。

その鎧といい、悪趣味が過ぎるぞ金色。程度が知れるというもの
だ」

「ハ、覗きだと？

莫迦め、私の行いがそんな物に該当するものか。

覚えて置け。王の行為は、下々の者の尺度では定義できぬものだ」

がしゃり、と瓦礫を踏み砕きながら、アーチャーが地面へと降りる。

口ではああ言ったが、こうして見ればこの者もやはり王だ。

周囲の妄念どもが、奴と私を避け、周りはそこだけがぽっかりと空白になったように感じる。

それは、さながら用意された戦場のよう。

「それにしても、雑念だと？」

……ああ、なるほど。確かによく染まっている」

私は己の纏う鎧を見て、頷いた。

そこにあつたものは嘗ての白銀の鎧でも、狂呪の煤に犯され濁った煤黒い鎧でもない、艶やかな漆黒。

三原色をどう用いても作れぬ、絶対の、黒。

それは先程までとは決定的に違う、美しく、かつ禍々しい鎧だった。

そして、英霊である私の武装が劇的に変化したというならば、当然、私自身も変化しているのが道理。

白銀の聖鋼が狂呪を吸った不完全な“わたし”の身体は、暗黒の泥によって溶解／再造された。

故に此処にある私は、ただ反転したのではなく

「だが、堕ちた、とは筋違いだな。

あの泥は、人々の『全ての悪であれ』という願いから生まれたモノ。

その願いを享受し、絶望を現実とするのもまた英雄の勤めである
うっ？」

「その願いの名こそ、雑念というのだ。
享受？ ふん、下らん。全ての悪など、とうに背負っている。
それに易々と染まった貴様こそが未熟であり、英雄として不足な
のだ」

「違うな。真に英雄であるからこそ、あの願いの受け手に相応しい。
英雄とは、その実、人々が『悪』とする殺戮を最も上手く行えた
大量殺戮者を指すのだからな」

悉く、私の意見と奴の意見は衝突する。

これは、表裏ではない。そもそも、奴と私では己を画す定義が違
うのだ。

故に、議論は永遠に平行線を辿るは必定。

「はっ、相変わらずお喋りな男だな、金色」

「ふん、お前は堕ちていくぶん饒舌になったようだな」

だが、問題はない。

会話が遂にかみ合わず、議論が決裂をもって終局した時の為の対
応策を人類はちゃんと持っている。

有史より以前から変らぬひとつの法。

人の営みとは即ち、神世より続く争い（殺し合い）の歴史である。

「そうだな……やはり結論は既に出ていた。

いくら言葉を重ねても、貴様と意見は永遠に合わぬ。

故に私は、貴様の意見を駆逐することで、我が言を正当なるもの
としよう」

「ほう、面白い。」

殺意が、爆ぜる。

こはやこの場に、炎も怨嗟も介入することは赦されない。

冬木に集った七人の英雄。

その蠱毒を生き抜いた最後の二騎が、ここで雌雄を決するのだ。

「さあ」「では」

「「決着をつけよう」」

黒剣の主

私は黒いバイザーで視線を隠し、抜き身の切っ先をアーチャーに向ける。

アーチャーは自らの宝物庫を開くべく、鍵剣を高く掲げる。

「さあ

「では

私とアーチャーの声が唱和し、高らかに開戦を謳いあげる。

「「決着をつけよう」

ここに燃え盛る煉獄の炎を観客とし、第四次聖杯戦争、最後の演目が始まった。

第二話

黒剣の主

「さて、ゆくぞ雑念。

死に目に我が財、見届けよ！」

開戦の声に次いでアーチャーが鍵剣を振り下ろすと、彼の後ろ空間が開き、そこに無数の武具が並んだ。

王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）

未だ真名の知れぬこの弓兵の持つ遠距離武装。

此度、そこに番えられた殺意の数は約五十といったところか。

剣、槌、槍、矛、戟、鎌、、、古今東西、ありとあらゆる種類の武具がアーチャーの背に並んだ。

その全てが掛け値なしの宝具。

アーチャーに従う埒外の弓兵隊が、一斉に弓を引く。

「見事だ……」

本心からの賞賛が口から漏れた。

同時に私は黒い魔剣へと変じたエクスカリバーを握りなおし、ぐ、と足先に力を込める。

受肉の影響か、はたまた変性した影響か、身体がひどく重い。

これではあの掃射を躲し切れないうら。

「掃討せよ！」

アーチャーの掛け声と共に放たれる、綺羅星ごとき刃群。圧倒的な存在感を撒き散らして迫り来るそれらの真正面に、身を晒す。

己には躲し切れないと悟りながら、それでも私の心は僅かも揺るがない。

躲せないのなら、叩き落すのみ

そう、それらの武器は須らく“飛んで”来るのだ。ならば全力で対抗する必要はなどない。

即座に空気を切り裂く武具の内から、彼女は己を傷つけ得るもの
右に九、左に七。

「竜炉、開城（ヴォルティゲルン）」

手を抜いて勝てる相手ではないことなど、百も承知。即座に身中の魔力高炉を開放し、身体から発露した魔力

が黒い霧となつて身体を包む。

これで、対等。

魔竜の力を以つて宝刃の群れを迎え撃ち、その狙い私から外していく。

「この程度か、アーチャー」

私の裡に在る黒竜が、『足りぬ』と低く吼えた。

昂ぶる身体

昂ぶる魔力

覚醒した竜の因子によつて生み出される膨大な魔力が私の中で暴れまわり、背中を蹴飛ばしている。

それに呼応し、黒い霧に紅の雷が奔る。

見たこともない現象であるのに、私は此れを知っていた。

「ほう……。」

では追加だ、簡単にくたばつてくれるなよ」

余計な一言とともに、アーチャーが第二射を打ち出す。

途端に出来上がる弾幕。だが

「愚かな。」

その程度で止められると思うな」

足裏を叩きつけ、焼ける地面を打ち鳴らす。

同土に魔剣を左逆手に持ち直し、その刃に黒い霧を巻き付ける。

「散れ」

此れは、三態を持つ魔剣の鞘。
此れは、妖しき魔女からの進物。

下段より、救い上げるように剣を振った。
生み出されるのは、極光により断層を生み出すエクスカ
リバーとは術理の異なる黒の魔刃。

「
ヴォーテイガー
卑王鉄槌
」

加工していない黒い魔力そのもので形成される刃。
それ故にその刃は魔術などによるキャンセルを一切受け
継げず、単純な暴力となって宝具の群れと衝突した。

「クッ！」

その剣の一部が、狙い通り奴の方に打ち返る。
臣下の思わぬ反逆に、眼を剥くアーチャー。貌に張り付
いていた愉悦の表情を歪め、奴は即座に両腕の黄金の籠手で顔を庇
う。

そこに生まれる、大きな隙。

「やるではないか、今は少々
」

そこで、アーチャーの言葉が途切れた。

当然だ。

奴の視線の先に私はおらず、奴は無人の野にその間抜け面を晒しているのだから。

「ここだ、間抜け」

剣を打ち返した後、即座に進発。膨大な魔力をもってブーストされた加速によって右斜め四十五度に転進する。

そのまま、腰を落としてアーチャーに肉薄。

一息に弓兵の懐に飛び込んだ私は、己を一本の槍に見立て剥き出しの頸動脈目掛けて突き出した。

「ちいいいっ!!」

だが、アーチャーとて英雄。

片手突きがその首を捉えるよりも僅かに早く、地面を蹴って横に飛ぶ。

「そこか……」

それを追い、私もまた軌道を曲げるも追いきれない。結果、渾身の突きはアーチャーの左肩に突き立った。

「ぐっ!!」

肉を抉る痛みから逃れるように、奴は地面を蹴って後ろに跳躍し、同時に私の眼前に十数本の刃を出現させた。

刃の軍勢が逃亡する主を守り、私の追撃を阻みむ。

だが、逃がさん。ここを勝機とみて、私はさらに追い脚を加える。

眼前に迫る皆朱の槍を剣で打ち落とし、額を狙う雷の錘を紙一重で避ける。

赤黒い剣を返しの刃で払い除け、迫る蒼い剣を

「ッ!!」

大気が、凍った。

虚空より取り出された剣は氷。その冷気が空気中の水分を、空間そのものを凍らせる。

私は凍結が己の身を捉えるよりも刹那早く、咄嗟に身体を捻ってそれを回避。

その剣の影から狙い打たれる第五射を、左腕を冷気に晒しながらもやり過ごす。

矢継ぎ早に放たれた第六、第七射を身体を捻って躲し、射第八射目の赤い槍を左腕にこびり付いた氷を逆に利用して受け止めた……答だった。

「な……！」

だが赤い槍は私の予測を裏切り、氷ごと籠手を貫通。氷と鎧、二重の護りをまるで無いかのように徹り、ごく自然な動きで薔薇色の槍が腕に突き立った。

予想外の事態に追撃を諦め、アーチャーとの間合を切る。そして腕に刺さった槍を抜こうと目をやり、

「これ……は」

驚愕に、眼を見開いた。

腕に刺さっている槍に見覚えがあったためだ。

「ゲイ・ジャルグだと？」

ついこの間、聖剣を覆っていた風の鞘をズタズタに切り裂いた、あの誇り高き槍の騎士の宝具。

宝具殺し、赤い薔薇。

「バカな……」

腕から引き抜き、信じられぬままに眺めるが事實は動かない。

ほんの僅かな差異こそあれ、まさにあの朱槍だった。

「……答えるアーチャー。なぜ貴様がこの槍を持っている。この朱槍を持つ騎士は、此度のランサー。ディルムッド・

オディナ以外に在り得ない」

黒い心中から、紅蓮が噴き出す。

私の目の前で壮絶な死を遂げたランサー。

マスターの姦計に罹り、命を散らした忠節の騎士の誇りが再び汚された。

「貴様、よもや騎士の墓を暴いたのか？

その死を辱めたか！？」

答え次第ではただでは死なさんぞ！！」

激怒をもって、いまだ正体不明の黄金の弓兵を睨む。
だが、

「ふん。在り得ぬとは随分早計だな、セイバー。

何、答えはいたって簡単なことなのだ。

英霊は生前に持っていた武器を宝具とする。

その槍も、我が生前に集めた物だということだけのこと」

無然とした態度で、アーチャーは傷を塞いだ左肩に付いた血を払いながら言葉を紡ぐ。

そんなくだらぬ問答にかける意識など無いとでも言いたげな振る舞いだ。

「私を舐めているのか？

どんな者も、他の英雄のシンボルである宝具を所持出来る訳が無い」

「馬鹿め、ひとつ見落としているぞ？

まだ世界がひとつだった時代の話だ。

その国は大いに栄え、王はあらゆる財宝を収集し完璧な宝物庫を持つに至った。

要は、それだけの話なのだ。

集めた財宝には数多の武器も含まれ、それらは有能であった故に後の時代で英雄たちに重宝され活躍し、宝具となった。

もう解るだろう？

貴様らの宝具は、元を辿ればその王の持ち物だったのだ。そら、いつかの酒宴の際も、そう語って聞かせたはずだが？

「戯言を。」

そんな英雄など存在しな

存在しない、と言いかけて思い至る。

私が生きた時代よりもさらに昔。古代メソポタミアに君臨した暴虐の絶対王。

「まさか、貴様の真名は古代ウルクの王、ギルガメッシュか！」

「如何にも。やっと気付いたか、まことに鈍き勘よな。」

察しの通り、この身は貴様など足もとにも及ばぬ最強の英霊よ！」

私の放つ驚愕が心地よいとでもいうのか、真名を看破されたアーチャーは顔を綻ばせた。

再び奴の貌に張り付く愉悦が、私の琴線を掻き巻く。

「……なるほど。」

これで貴様の不遜な態度にもこれで得心がいった。だが

「むき出しの黒い魔剣を、一分の隙も無く構える。」

「ほう、我の名を知ってなおも抗うか。」

「今度こそ敵わぬと理解できたはずだが？」

「ふん。何を以ってそう言う？」

「貴様と私は、今まで出会った事が無い。」

「そんな二人の優劣など、刃を交えずしてなぜ解る？」

「魔剣を、脇構えから逆胴の準備位置へ。」

「そこに殺意を流し込む。」

「私は初めに、“決着”と告げたはず。」

「来い。貴様の全てを、この剣で打ち砕く。」

「おもしろい。」

「音に聞こえし聖剣の光刃が、黒く錆びてなおその威に翳りがないか、我自らが検分してやるう。」

「アーチャーの手首から先が空間の歪みに消える。」

「となれば、こちらも相応のモノを出さねばな。」

「引き出されたのは円筒が三つ並んだ様な奇妙な武器。」

「だがその剣が放つ威圧感、私のエクスカリバーさえ超えている。」

「それが貴様の真なる宝具か。なるほど、いい武器だ。」

嫌味ではなく、私は本心からそう評した。

嘘や否定は己を騙すモノ。私は私を偽らない。

絶対の自我のみが、騎士道を踏み外した私の、唯一にして絶対のモノであるが故に。

「で、あろうな。

我が先程まで使っていた剣は宝具とはいえ全て無名の原典だ。我しか持たぬ武器という訳ではない」

ゆっくりと時間を使いながら、三つの円筒が互い違いに回転を始める。

「だがこれは違う。正真正銘、我しか持たぬ剣だ。銘などないのでな、我は『エア』と呼んでいる」

石臼のごとき剣が周囲の魔力を轢き潰し、租借し、吸収する。

「ほう。

弓兵ごときが、この私に剣で挑むか」

私とギルガメッシュの距離は、せいぜい10メートル。エクスカリバーの間合いを考えれば、まさに必殺の間合い。

「そうだ。なに、遠慮はいらぬぞ？

最強と聞くその剣とこのエア、どちらが真に最強か興味があるのぞな」

くつくつと奴の口内で鳴る、押し殺した笑いが心のささくれを撫で回す。

「よかるつ。」

いざ………」

竜炉より増幅された魔力に、黒い霧を形成する魔力を上乗せしてエクスカリバーへと注ぎ込む。

黒い刀身に刻まれた赤の文様が輝き、魔力が加速し昇華され、黒い光が溢れ出す。

「出番だ。」

起きるがいい、エア」

円筒が回転数を跳ね上げる。

急速に刻まれ、消化される周囲のオド。奴の剣を中心に、全て巻き込むように暴風が渦を巻く。

「約束された(エクス) ……」

「天地乖離す(エヌマ) ……」

規格外の魔剣が巻き起こす天災の如き魔力が迸り、炎に
劈られ崩れ行く街を蹂躪する。

敵は弓兵。私のように剣の扱いに長けていないのは明らか。

ならば先に撃ち出す必要ななく、放つのは奴と同時で充分。故に私は、己の出来うる限界まで、剣に魔力を注ぎ込む。

「勝利の剣！」
カリバー

「開闢の星」
エリシユ

乾坤一擲。

炎の赤に染まった空の下、黒い極光と赤い破渦が激突した。

降幕を告げる声

乾坤一擲。炎の赤に染まった空の下、黒い極光と白い破光が激突した。

互いに殺し合い、削りあった魔力が行き場を失い、竜巻のごとき衝撃破と成って瓦礫を空高く巻き上げる。

「ぐっ!!」

重い。

手に伝わるのは、かつて無い圧倒的な質量。

エヌマエリシユとはバビロニアの創造神話。始まりの叙事詩そのもの。

天と地を乖離させたという逸話に、一切の誇張なし、か……

「ぐううあああああ—————!!」

碎けるほどにかみ締めた奥歯。

壊れよとばかり注ぎ込んだ魔力。

余りの圧力にバイザーが弾け飛び、両足が地面に食い込む。

飛ばされまいと私は丹田のさらに奥、魂から搾り出す、それでも私の身体は浮かび

……………

「く、あっ……」

押し、負けた。

第三話

降幕を告げる声

敗北の衝撃で私の身体は中空に弧を描き、相殺し切れなかった閃光が身体を切り刻む。

飛散した鮮血は、未だ紅い軌跡を宙に残し、地面へと落下した。

「がつ………!!」

地面に叩きつけられた瞬間、ショックで飛びかかっていた意識を激痛が叩き起こす。

挟られるような鋭い痛みが、背中に奔った。

その痛み思わず身体を捻り、左の肩甲骨の辺りを貫いた鋭い何かを見る。

黒い霧による守りは既がない。

全てをつぎ込んでなお、神の造りし魔剣は世界を切り分けた剣に敗れたのだ。

「」

ガシャリ、と鎧が擦れる音を立てて、アーチャーが近づいて来た。

「く、少々驚いたぞ。」

海魔を焼き払った時よりも、明らかに威力が上ではないか」

それから逃れようにも四肢に力は入らず、牽制するための喉すら痙攣して役に立たない。

「だが、それでもエアには及ばなかったか。
人類最強の剣とやらもたいした事はないなあ！」

くはは、と高らかに笑いながら、奴は倒れる私を見下す位置に立つ。

勝利を確信した患者の、敗者を嘲る声。それを浴びせられる屈辱を噛み潰す。

「しかし味気ない。

完全にこちらの圧勝ではないか、相殺も出来ぬとは拍子抜けだぞ。これならば手加減しても良かったというもの。何せ、相手は非力な女であったのだった」

ズタズタになった鎧の隙間を持たれ、身体が引き起された。

左腕の感覚は既になく、両足も上手く動かない私にその腕を振り払うすべはない。

「さて、これで解つただろう。

拒絶など無意味だと。

さっさとその汚れた肉体を投げ捨て、魂を我に捧げよ、セイバー」

「……………」

だがそれでも、私は痺れの残る唇を懸命に動かす。

「うん、何だ、聞こえぬなあ。

我に宝物を捧げるのは最高の誉れ。その口上くらい、聞いてやるのも吝かではない。

そら、我に聞こえる様ちゃんと言つのだぞ」

そう言いながら、アーチャーが耳を近づいた。

「ひと…つ、質問だ。」

貴様…は、何本、剣を…放ったか、憶えてい…るか？」

眼をカッと見開き、同時に右手を握り直す。

肘と手首の外側で魔力が爆発し、肩を基点に半円を描いてアーチャーの顔を狙う。

「何かと思えば。」

無礼も大概にせぬと

ツ！？」

受けようとした奴の左の掌を、不可視の刃が刺し貫いた。

「ハアアアアアー…ッ！」

僅かに回復した魔力。その全てを使い切る。

軋む身体の悲鳴を無視し、魔力を暴走させてさらに押す。

過剰な魔力が腕の組織を削るが、その警告の一切を無視する。

「貴様あ、何時の間に我の剣をおお…！！！」

その慢心が、貴様を殺すのだ。

忘れたのか、アーチャー。私の宝具は魔剣と黒い魔霧だけではない。

いま右手にあるのは、落下の折に私の背中を抉った凶刃。
アーチャーの蔵により吐き出された無銘の剣。
それに我が宝具である風王結界を巻き付けて不可視にし、右手に
引っ掛けていたのだ。

「舐めるなあー」

死に体の獲物からの思わぬ反撃に激昂したアーチャーが、怒号と
ともに剣を押し返す。

あと僅かで首に届く剣は、しかしその僅かを押し切れない。全身
は悲鳴をあげ、傷からは赤い血が噴き出す。

「ぎっ
」

負けぬ。心に響くはその一念。

砕けた歯を食い縛り、口内では血が溢れる。

全身から脳に届く危険信号を全て切り捨てて、右腕に命令を下す。

切先を

奴の

首に

向けよ、と

「避けられるか、アーチャー！ この、距離で！」

「もはや、要らぬ！
その宝を胸に抱き、共に碎け散れ。その肉、その魂、一片たりとも残さぬ！！」

だがその絶対的な死の軍勢を前にしても、私は僅かも震えない、否、震えている暇などない。
足を大地に、意識を前に。
勝機は、常に正面にしかないのだ。

そして見つけた、唯一の突破口

「く。最後の最後で、またも誤ったぞアーチャー……いや、英雄王！」

剣先を地面から放し、己を剣の台座に見立てて脇腹深く固定する。

「お互い満身創痍。ならば相手を滅するのに、そんな“数”は必要ない」

「消滅せよ、アルトリアー……！！」

アーチャーが塵殺の軍団に勅命を下すと同時に、私の背中で魔力が猛る。

僅かに残った鎧を消して得た、真正正銘、最後の魔力。
それを燃やして描き出すは、天空を駆ける飛竜の翼。
もはや剣を握り締めることも叶わないなら、その身体の全てをもつて敵へと当たる。

ああ、確かに私の握る剣は無銘だ。
だがしかし、私が死力を以って用いるならば、
私と一体となり、敵を討ち貫くならば、
たとえ無銘であったとしても、最高の名剣と成らぬ訳が無い！

「！！」

消えよ、英雄王

「あああああああ——！！！！」

貴様の持つ最強の座は、私が奪い取る！！

.....

「いっしょ……」

喉から血が溢れた。

その息苦しさを堪えながら、私は左肩に突き刺さった三叉の槍を抜く。

眼前に、あの黄金の王はもういない。

数多の宝具矢は私の外周を次々と決りながらも、終にその中心を捕らえることは無かった。

その中で唯一、深く突き刺さったのがこの幅広の三叉槍。

それを地面に放ると、槍は一度だけバウンドし、世界に押し流されて消え去った。

「ふう……」

戦の直後に湧き上がる、空虚な感情に息をつく。

アーチャーの失策は、破壊力を重視する余り多すぎる武器を展開してしまった事。

元よりあの宝具は精密なコントロールの利かぬ宝具のようだった。そうでなければもっと別のやり方もあっただろう。

故に、あの局面での最高の一手は、剣群を二つに分けての十字砲火。

なのに奴はそれを、周囲に並べてしまった。

その為に空いた、唯一の穴は天球の“中”で号令を掛ける、奴自身。

そこへ私は渾身の魔力放出を以って突貫し、寸分の狂いもなくその心臓をひと突きにした。

さらに亡き主の敵とばかりに迫り来る武具の群れ。

それを、串刺しになったアーチャーの軀を盾とすることで、私は

辛うじて死滅の槍衾からの脱出に成功したのだ。

「う……く」

魔力が全く足りていない。

治まらぬ痛みにも穴の空いた左肩を押さえ、背中を地面に預ける。

そして眼を閉じて、意識を身体に埋没させた。

ドクン

赤いポンプが血を全身に送る音。

受肉前に持っていた再生能力は今も顕在で、復元呪詛じみた再生力を以って全身の傷を塞いでいく。

ドクン

ドクン

左胸の命が拍動し、本当にゆっくりと傷がふさがり始める。

ドクン

ドクン

ドクン

奇妙だ。

沈静化する筈の鼓動が、心なしか いや、確かに早くなっている。

「これ、は……」

そして気付く。

自身の心臓が、回復とは関係なしに、高らかに唸って事に。

ドクン

ドクン

ドクン！

ドクン！！

その理由は、歓喜

「そうか……」

やっと私は思い至った。決着の刹那、無意識に何を望んだのかを。考えてみれば、此度の聖杯戦争でこれが初めての『勝利』なのだ。劣悪な魔術士を滅したのは『掃討』であり、狂戦士を殺したのは『不意打ち』でしかない。

ディルムッド

イスカンドル

ランスロット

ギルガメッシュ

そして私

アサシンとキャスターを除く、実に五人もの強者が集ったこの戦争において、私はその全てと対峙した。

だがランサーは自らの心臓を貫き憤死し、宝具を撃ち合ったライダーとは白黒をつけぬままに別れた。

バーサーカーに至っては、彼の自滅も同然の終局だった。

だが唯一。

ギルガメッシュとだけは、魔力の最後の一滴までもちいて戦い抜き、そして勝利した。

「おお…… おおおおおー！ーッ！ー！」

思わず私はあおむけに寝転がったまま、空に拳を突き上げ天高く勝ち鬨を上げた。

初めからこの結果を望み、挑んだ戦争ではない。

だが図らずも証明した『最強の英霊』の称号は、剣士の魂を確かに奮わせる。

同時に、その脳裏に妙案が浮かんだ

最強は証明した。ならば次はこの最強を守る番ではないのか、と。それが受肉を果たし、この世界に留まる自分の役目ではないだろうか。

いずれ起こる第五次聖杯戦争で新たに集う七体の英霊を相手取り、己の持つ最強の座を賭けて果し合うべきではないのか。

そしてその全てに勝利し、亡き主、アイリスフィールに聖杯を捧げる。

悪しき汚濁の器となった聖杯を、彼女は望むまい。

だから私は、ことう願うのだ。

“自害せよ”と

全てを呪い殺すあの泥に、自らを殺させる。

それが、こんな姿に成り果てながらもこの時代に残ることを赦された、自分の使命ではないのか。

幸いにして、ブリテンの王であった“わたし”の時間は止まっている。

ならば此れよりは一己の英霊として、あの禍々しき聖杯を破壊する。

あの聖杯への未練など既に無い。

むしろ、あの劣悪の塊を放置したまま還る事は我が矜持が赦さない。

騎士道という誇りを失った私だが、やはり私はどうしようもなく騎士であり王なのだ。

「よし」

この時代を生きる目的は定まった。

ならば次までの余暇を、この時代の人間として過ごしてみるのも

一興。

まだ見ぬこの時代の強者と、剣を交えるのもまた良しだ。

「ほう、アーチャーに勝ったか。いや流石だな、アーサー王」

そうして“生きる決意”を固めた私は、不意にをかけられた声に振り向く。

瞬時に思考の海から抜け出し声の方を見ると、そこにはカソックに身を包んだ大柄な神父。言峰綺礼が立っていた。

「貴様、確か言峰。」

アインツベルンと遠坂の間で交わされた契約に従い、国外退去した筈の貴様が何故ここに居る？」

「これは妙な事を。あの時とは事情が変わったのだよ。」

我が父、言峰瑠正が何者かに殺害され、この聖杯戦争の監督役が居なくなった。

よって代わりの者が到着する間、私とその任務に就いたのだ。

そして何より、父は銃で背中から撃たれていた。

中立である父にそんな非道を行うのは、たったひとりだと存ずるが、いかがかな？」

そう言われ、私は聖杯戦争の最中に、そんな行為に及ぶ者の名を唯一人しか思い描けなかった。

逆に、あの男ならばその必要ありと判断すれば迷い無くそれを実行するだろう。

無論、証拠はない。

だがその手口が、犯人が己の元マスター、衛宮切嗣であると言っている。

仕方、あるまい。

「……いいだろう、貴様が契約を破ったことは不問とする。それで、その監督役が何の用だ？」

「ふむ。その前にセイバーよ、君のマスターが近くに居ないようだが、仲互いでもしたのかね？」

「ふん、その通りだ。奴は私を裏切った」

抑揚のない口調。

もつとづくに解っていないながら訊いているのではないかと思わせる様な態度で言峰は私を見下ろし、問いかける。

「そうか。それで君はこれからどうするのだ？」

「なんだそんな事か。貴様ならあるいは察しているかもしれないが、私は受肉した。」

よつてその運命に従い、この時代に留まるだけだ」

「解った。では聖杯戦争において生き残った者を保護するという約定に従い、聖堂教会が君の面倒をみよう。」

教会へ来るかね、セイバー？」

その予想外の言葉に、私の唇が釣りあがる。

渡りに船とはこのこと。

この男の真意はようとして知れないが、まあいい。何とでもなる。

「よからう。聖杯戦争の約定に従い、アルトリア・ペンドラゴンは聖堂教会に、厄災をしのぐ場所の提供を求める」と、これでよ

いか？」

「充分だ。監督役の責務に則って、言峰綺礼が貴女の身の安全を保障する」

「ふん。仰々しすぎるぞ、言峰」

厳かな面持ちで言葉を紡ぐ言峰の、余りのまわりくどさにうんざりした。

儀礼を軽視する気はないが、これはやりすぎだろう。

「よし。ならば早速、案内して貰おうか」

と、そうだ言峰。私はもうサーヴァントではない故にセイバーと呼ばれる筋合いはない。

だが『アルトリア』はともかく『ペンドラゴン』は少々拙いか……」

そう告げ、私は己の正体を隠しつつ、しかしきちんと意味を成す名を思考する。

その結論は

「よし、これからは私の事を『アルトリア・セイバー』と呼べ」

我が真名に通じる、というよりほぼそのままの名を改め、言峰に案内を促した。

だが歴史的にはアーサー王は男性。故にその名は『アルトリウス』とされるので問題はない。

「ああ、そうだ。それともうひとつ……」

そして背を向けた言峰綺礼を睨み、言い忘れていた一言を告げる。

「言峰。貴様が何を企んでいようと、一向に構わぬが、それが私の意に沿わぬものなら、剣を以って撃ち砕くのみだ」

凜として

これは冬木で密かに巻き起こった戦争から、半年

後の物語。

「 I know that Redeemer live
s,」

葬送は生暖かい雨が静かに降る中、しめやかに行われる。

喪主を務めるのは、まだ年端も行かぬ少女。

彼女は父の葬儀においても決して悲しみを表に出すことなく、表情を引き締めて課せられた務めを果たす。

だがその気丈さを健気に思いこそすれ、不憫に思う者はいない。

もとより、そのような一族の葬儀なのだ。

そのような考えを是とする先代によって、そのように育てられた後継者。

弔いの席に招かれたのは、それを承知する者達ばかりだった。

少女の名は、遠坂 凜。

齢七歳という若すぎる両肩に魔道の業を背負う、遠坂家の次期頭首であった。

第四話
凜として

「 I , a n d n o t a n o t h e r . H o w m y
h e a r t y e a r n s w i t h i n m e A m e n 」

祈りの言葉の締めくくりをもって、大切な人を収めた棺が大地に贈られる。

葬儀は滞りなく行われ、終えた。

静かな雨がふる丘から、参列者はひとり、またひとりと去り始める。

「
」

わたしはそんな中で、ダークスーツを着た人影が教会の中に消えるまで、横目でずっと睨み続けていた。

わたしは、その人物が大嫌いだった。

そんなの淑女にはあるまじき事だっけ解ってるけど、でも、どうしても気に入らないのだ。

さっきだって、その服装のことを注意した。

何故、お父様の葬儀に相応しい格好をしていないのか、と。

別に、普段着で来たとかじゃない。

「気品ある黒のスーツに、輝くような純白のシャツと漆黒のネクタイ。」

むしろ、服そのものは文句なし。

見る限り、何処にも死者に敬意を払い弔う上での不備は見当たらない。

問題は、それを着ているのが“女性”だったこと！

『この服は、今は亡き主から直々に戴いたもの。』

よって、これが私にとつて最上の礼装だ。

共に凌ぎを削った遠坂の頭首を送るのには、これ以外の服は考えられぬ』

アイツはそう言つて、わたしの抗議をあっさりと切つて捨てた。

その常識を踏み違えて憚らぬ横柄な態度に、いよいよ激昂して怒鳴る。

だがわたしを彼女は軽くあしらひ、結局はそのままの服装で葬儀に参列したのだ。

「なんなのよ、アイツ……」

一応その女性について、一度だけ言峰に何者かと問うた事がある。その問いに返ってきたのは『アルトリア・セイバー』という名前と、その経歴。

聖杯戦争に参加したアインツベルンの魔術師、アイリスフィール・

フォン・アインツベルンに騎士の誓いを立てた騎士であるという答え。

そして、結局は主を護りきれず、主を逝かせてしまった彼女は行く当てを失い、聖杯戦争の約定を頼ってこの教会に身を寄せたのだという状況説明。

その説明を聞き、わたしはなるほどと思った。

あの女の纏う気品は、名門のアインツベルンの眼鏡にも十分に適うものだろう。

さらに実を言えば、わたしは一度だけ彼女の鍛錬を見た事がある。

彼女の、魔力を持って振るわれる剣技は豪壮にして鋭敏。

“アルトリア”というかのかの騎士王に肖った名も、剣を指す“セイバー”という姓も、あれほどの技量を持つならばと納得した。

また主を護る責を負いながら、それを成せなかった彼女をアインツベルンは赦さず、その制裁から逃れる為には教会を頼らざるを得ないだろうという事も。

「ご苦労だった。」

新たな頭首の初舞台として、まずは十分な働きだ。

お父上もさぞや鼻が高いことだろう」

思考の海に埋没していたわたしの脳裏に、嫌な奴の声が滑り込んできた。

振り返れば、わたしの後見人でもあるこの教会の神父、言峰綺礼が立っている。

何時の間にか、雨の中に居たのは喪主であるわたしと、式事を行った綺礼だけだった。

彼は墓地から一切の人影が失せたのを見計らって、教会の裏門に待たせてあるハイヤーを見る。

「では、そろそろお母上を連れてきてはどうかね？」

「……ええ、そうする」

わたしはぶっきらぼうにそう答え、彼に背を向けてハイヤーに歩み寄る。

そして車椅子を使って中に待たせてあったお母様を、父の棺の前に導いた。

「ほら、お母さん。」

お父さんに最後のお別れを言ってあげて」

わたしに促されて、お母様の朧な視線がはたと地上に焦点を結ぶ。自身の周りに広がる墓碑の列を認識し、お母様は何だろうと首を傾げた。

「あ　　、ええと、凜。今日は誰かのお葬式なの？」

「そうよ、お父様が死んだのよ」

発せられたのは、予想通りの言葉。まるで初めて墓地に居る事に気付いたかのような奇妙な問い。

別に何かを期待してた訳じゃないけれど、突きつけられた現実に少しだけ落胆した。

「まあ大変、早く時臣さんの喪服を出さなくちゃ。

ねえ凜、桜の着替えを手伝ってあげて。

ああどうしましょう。私も支度しなくちゃいけないのに……」

固い表情で隣に佇むわたしをそのままに、お母様はどこまでも残酷な言葉を発する。

その言葉の意味するところはひとつだけ。

お母様は、全くもってお父様の死を理解していない。

いや、現実を正しく認識するという能力そのものを、決定的に欠いてしまっているんだ。

「……………」

その姿を見る度に、とつくに慣らした筈の部分がまたズキリと傷む。

あの日、お母様は何者かの呼び出しに血相を変えて禅城の屋敷を飛び出した。

その時のお母様の狼狽ぶりは、今でも克明に覚えている。

その呼び出しが誰からのどんな内容のもので、飛び出したお母様の身に何があったかを、わたしは知らない。

確かなのは、この隣にいる綺礼に救出されて再び出会ったお母様は、既に彼女の知るお母様では無かったという事。

「あ……………」

不意に、お母様はプツンと糸が切れたように眼を俯き、再び顔を上げた。

そして、誰も居ない虚空に微笑みかけながら指を伸ばす。

「ほらあなた、ネクタイが曲がっていますよ。あと背中にも糸屑がうっふふ、すっかりなさって下さい。あなたは、凜と桜の自慢のお父様なんですよ……………」

何もない虚空で指を遊ばせるお母様。

もしそこに何か見えていたら、どんなに楽だっただろう。

お母様の目に映る“何か”を、わたしは見る事が出来ない。
だからわたしは、じっと耐えながら見守るしかない。

聖杯戦争に捲き込まれ、正気を失ったお母様。

その目に映るのはまだ桜がわたしの妹で、まだ父が生きておられた時間で止まったままの遠坂家なんだろう。

「お母様……」

小さく、小さく呟いた。

こつなつたお母様には、もう呼びかけても無駄なのはとうに理解している。

ズキン、と、今度は現実に左腕が痛んだ。

その痛みの元は遠坂家が代々伝え続け、わたしがお父様から受け継いだ魔術刻印。

「お父様……」

わたしの左腕には、お父様の遺骸から摘出された刻印の内、まずは一割ほどが移植されている。

未だ身体に馴染まないそれは絶えず疼き、わたしの神経を蹴るのだ。

「わたしは、遠坂の名に恥じない頭首となります」

お父様の墓と、お母様の抜け殻を前にして、静かに誓った。

お母様の見せる醜態。

わたしはこれを目の当たりにして、人間の儂さ、脆さを知ることが出来た。

お父様の遺した刻印と。

遠坂に受け継がれる魔道書である其れは、魔術師を志すわたしにとって何にも変えがたい宝だ。

ならば、この苦痛がどれほどの事があるだろう。

全てを己の運命として認め、受け入れ、そして立ち向かう。

わたしには、その義務があるのだ。そしていつか、必ず高みへとたどり着いてみせる。

「だから、どうか安心して下さい。きっとわたしが、遠坂を

静かに降り続ける冷たい雨が、わたしの感情を隠してくれた。
最後のお別れを終え、わたしはお父様のお墓に背を向ける。

「別れは、済んだかね？」

「勘違いしないで、別れなんかとっくに済ましてあるわ。

今のは宣言よ。

わたしが遠坂を引き継ぐと、先代であるお父様に伝えたの」

さあ、これで覚悟は決まった。わたしはこれより、魔道に入る。

そして、遥か彼方に見える“根源”を目指す。

うつん、必ず辿り着く。着いてみせる。その義務が、わたしにはあるんだ。

「そうか、それは失礼をした。」

ところで、私はまたしばらく日本を留守にするが、今後について何か不安はあるかね？」

「無いわよ、あんたに頼ることなんて、何も」

現在、お父様の右腕に在った遠坂の魔術刻印は綺礼が管理している。

この件について、この男は几帳面とも思えるほどに手筈を整え、万全をもって当たっていた。

綺礼に言わせれば全てはお父様が整えたことで、自分はそれを踏襲しているだけだと言う。

けれど、お父様の計画と綺礼の実務。

そのどちらか欠けても物事はちゃんと進まないんじゃないだろうか、わたしはいつも思うのだ。

そこだけは、この男を認めてやってもいい。

「凜。先程の宣言の通り、これよりお前は名実ともに遠坂の頭首となる。」

そこで、今日この日のために、私から門出の品を贈りたい」

魔術刻印に関する事を伝え終え、綺礼が不意に姿勢を正した。

彼はわたしを改めて見据えると、仰々しい言葉とともにその懐から鞘に収められた短剣を取り出す。

「それ は？」

言葉こそ疑問を放っているが、その造りを見た瞬間、わたしはそ

れが何かを理解した。

「かつて私が、魔術の成果を時臣師に認められた折、戴いた品だ。以後、これはお前が持つといい」

アゾット剣。

魔術の師が、見習いの過程を追えた弟子に送る、一人前の証。それは師の手ずからの品であり、その例に漏れず、その剣の柄は遠坂家の宝石細工で飾られていた。

「これが、お父様の……」

わたしはそれを両手で受け取り、そつと抜く。

ワインレッドに染められた革張りの柄。

己の顔が移り込む曇りの無い刃。

そして、刀身に施された魔法文字をじっと見つめ、そこに恭しく触れた。

いつかお父様に貰える時を夢見ていた短剣。

直接ではなく、お父様が贈った相手もわたしではないけれど、今確かにそれがここに在る。

「、」

不意に、熱いものが込み上げてくる。

だが、この男にだけは弱音を見せるわけにはいかない。

それをわたしは必死に噛み堪えると、短剣を大切に仕舞い込んだ。

「貰っておくわ。」

返せと言われても、絶対に返さないからね」

綺礼にそう告げ背を向ける。

奇劇を演じ続けるお母様の車椅子を押して、わたしは墓地から立ち去った。

- - - - -

「じゃあ、帰りましょう。お母様」

わたしは待たせてあったハイヤーに、お母様を乗り込ませた。

ふと違和感を感じて唇に手をやると、指が赤く染まる。

どうやら、歯を強く食い縛りすぎて少し血がでてしまったらしい。

でも こうして血を流してでも、あの男の前でだけは泣くわけには行かなかったのだ。

わたしは、誰よりもあの言峰綺礼の前でだけは泣かないと心に誓っている。

わたしにとって、綺礼は初めから気に食わない存在だった。

お父様は彼を厚遇し、遺言状でわたしの後見人に指名する程の信

頼を寄せていた。

けれど、わたしはどうもあの男が好きになれない。何と云うか、信用出来ないのだ。

そしてそれは、あの女の出現によって決定的なものになった。

アルトリア・セイバー。

聖杯戦争の約定に則って聖堂教会の庇護下に入り、現在は言峰教会に間借りしている女。

父を護り抜く責務を負っていた筈の彼が、父の代わりに保護した人物。

うん。頭ではちゃんと解っている。

その責務を負っていたのは『魔術の弟子』である言峰綺礼で、彼女を保護したのは『戦争の監督役』である言峰綺礼だという事くらい。

だけど、でも。

初めて知らされたとき、わたしの眼にはそれが耐え難い裏切りだと映った。

「う、く」

スカートのポケットに手をやり、そこに収まっている固い感触を指先に感じると、また涙が零れそうになる。

けど、泣いちゃだめだ。

泣いたら、今度こそ歯止めがきかなくなる。

そう自分に言い聞かせ、眼を瞑り、嗚咽を飲み下す。

そんなわたしの目の前に、下腹を震わせる重低音を撒き散らしな

がら一台の大型バイクが停まった。

それは、暗黒色のボディに紅を一筋刻まれた、現代機械工学によって生み出された鋼鉄の騎馬。

確か、V・MAXという名前だった筈だ。

しきりに「スゴイ！」と叫びながら、クラスの男子が目を輝かせていたのを覚えている。

「凜、帰るなら送ろう、乗れ」

噂をすれば……とは、こういう時に使う言葉かもしれない。

そのシートに跨り、有無を言わせぬ口調で命ずる女性はアルトリア・セイバーその人だった。

「遠慮するわ。」

だってお母様を家まで連れて帰らなければならないもの」

未だスーツ姿のままの彼女から視線を切り、わたしは申し出を断ってハイヤーに乗り込もうとする。

だがそれよりも早く、アルトリアの腕がわたしの両脇に差し入れられた。

「そう言うな。」

葵を家に送り届けるだけならば、その運転手でも問題はない。

おい、どうせ言峰の手の者なのだろう？」

わたしを背中からだき抱えたまま、彼女は運転席に座る男に言葉をむける。

すると男は、肯定の苦笑いを浮かべて軽く会釈をした。

「そういうことだ。まあ、いいから乗れ」

「ちよっ、」

パタパタと脚をばたつかせるわたしの抵抗をまるで無視して、彼女はわたしをタンクの手前にすとんと降ろした。

そのまま、彼女もシートに飛び乗り、

「わっぷー！」

いきなり、わたしの頭にフルフェイスのヘルメット被せた。

そういえば後部座席のあたりに、白と黒のヘルメットが二個並んでいた気がする。

「止めてよ！」

髪が乱れるじゃない!!！」

顔全体を覆うヘルメットを無理矢理被せられたことで、頭のツインテールが押しつぶされるのを感じる。

だが彼女はそれを意に介さず、わたしのヘルメットの顎紐を確りと固定すると、その上に両の掌と顎を重ねた。

「さて、これは独り言なのだが……」

バイクという乗り物は車と違ってエンジンがむき出しになっており、かなり煩い。

そのうえ風を切って進むから、乗っている者には余計な音が全く聞こえない乗り物なのだ」

「え？」

わたしがその“独り言”の意味を理解する前に、アルトリアは右手を絞り上げる。

「~~~~ツ！」

先程までのアイドリング音とはまるで違う轟音が足下から駆け上がり、下腹を突き抜ける。

わたしも歩道からなら、このV・MAXが響かせるとんでもない音を聞いたことはある。

けど、その音をシートで直に聞いたのは初めてだ。

雨音も、隣のハイヤーの音も掻き消してしまう怪物の嘶きを肌で感じ、その余りの音量に啞然とした。

「いくぞ。」

振り落とされるな」

ガツンという衝撃と共に、アルトリアの左足がレバーを踏む。すると、それまでピクリともしなかつた車体がゆるゆると動き始め、わたしは慌ててタンクにある突起を掴んだ。

その途端、襲い来る身体全体が後ろに吹っ飛ぶような感覚。軽自動車の約二倍。

大容量のエンジンが生み出す加速は、小学二年生の体重で対抗できるものでは到底無い。

「ぎゃあー！」

身体が、吹き飛ぶ……

ちっぽけな予想を吹っ飛ばす衝撃。

思わず声を上げたわたしの背中を押さえるように、何かが背中に覆いかぶさった。

「あ、」

それは考えるまでもなく、アルトリアの身体。

彼女は両膝でわたしの下半身を確りと固定すると、上半身を倒して凜が吹き飛ばないように柔らかく支える。

いつの間にか増加した重力から開放されたわたしの身体は、その肌で夏の風を感じていた。

程なくわたしたちの乗ったバイクが片側二車線の国道に出る。

普段なら風のように車の間をすり抜けるアルトリアが、この日はバイクを左斜線の流れに沿わせて悠然と走っている。

その行動の意味に、気付かないほどわたしは愚鈍じゃない。

「
ありがとう」

眩くような、絞り出したような微かな声。

ダミータンクにしがみ付き、前を見ずに俯くわたしのヘルメットは、内側に降る雫を受け止めていた。

それぞれの思惑

西洋風の家屋が並ぶ閑静な住宅街に、V・MAXが撒き散らす轟音が木霊する。

路面に溜まった雨水を飛散させ、凧とアルトリアの乗ったバイクが遠坂家の表門に到着した。

「ついたぞ、凧。どうやら葵のハイヤーよりも、私のほうが速かったようだな」

「ええ、そうみたいね」

アルトリアはクラッチを握っていた手を放し、凧に降りるように促すが……

「……ちょっと、降りしてよ」

凧は、完全に宙に浮いている両足で取っ掛かりになるような足場を探すが、見つからない。

小学生の凧に、V・MAXのシートから地面までは少々遠すぎた。

「くっ ははははは」

なあ、先程までの怖いくらい無表情な少女は何処へ行ったんだ！

「？」

「煩いっ！

アンタにだけは無表情って言われたくないわ！」

むう、と膨れてアルトリアを憎らしい目で見ると、思わず彼女は噴出してしまった。

ひとしきり笑い、腹に痛くも無い肘打ちを喰らってやっと、彼女は地面に立ち、ぎゃあぎゃああと騒ぐ凜を抱え上げて地面に降ろす。

「だいたいしょうがないじゃない。」

元はといえば、貴女が無理矢理乗せたんでしょ！

いいわよ、すぐに貴女なんかより大きくなってみせるわ」

「くくく……」

そうか、なら楽しみにしておく事にしよう」

やっと地面に降りた凜は、なおもクツクツと笑うアルトリアを怒鳴りつけ、ふん、とそっぽを向く。

そうこうしているうちに、坂の下に葵を乗せたハイヤーが姿を現した。

第五話

それぞれの思惑

「 凜 」

昇ってきたハイヤーの所へ行こうとするわたしの背中に、さっきまでとは全く語調の違う声がかかる。

それに驚いて振り返ると、彼女は今迄になく真剣な表情で、わたしを見据えていた。

「 問おう 。

これからお前が歩く魔道には、並の魔術師が享受する数倍の苦難が待っているだろう。

それを踏み越え、極限へと至る覚悟。それが、お前には在るか？ 」

アルトリアの黄金の瞳が、真つ直ぐ魂を射抜く。

剣の極限へと至るべく研鑽を積む先達からの問い。

わたしに、今ここで選べというのか。

それとも、今ならばまだ戻れると？

「 ええ、もちろんよ。

たとえ一人でも、わたしはこの道を走破してみせる。

魔法にだって、きつと辿り着いてみせるわ 」

その問いに、手を腰に置いた不適な笑みで答える。

愚問だ。

わたしは遠坂に生まれ、遠坂で育った。

魔道を歩むために友達を作らず、妹を、桜を捨てた。

だからわたしは、是が非でもたどり着く。

それが、わたしの歩む道だと決めただから！

「随分とませた答えだ……」

だが、言ったからにはその台詞、忘れるな。

お前ならば、あるいは本当に辿り着けるかもかもしれない」

そんなわたしの答えに、アルトリアは満足気に頷く。

「ならばそんなお前に、私から言葉を贈ろう。」

凜、何一つ切り捨てるな。

もし取り零したのなら、例えどんなに無様でも拾い上げよ。

人の道を踏み外した魔術師に成るなど私が赦さない。

感情も、魔術も、友情も愛情も、全てを抱えて歩み尽せ。

誰よりも喜び、誰よりも悲しみ、誰よりも人間を知る魔術師に成れ。

そうすれば、お前は高みへと至るれるだろう」

「ちよっ、」

朗々と、しかし力強くアルトリアの口から紡がれる言霊。

その、教わってきた魔術師の教示とは反する助言にわたしは抗議しようとして

「何だ？ 出来ぬとは言わせん。」

魔法にまで辿り着くと言った以上、この程度の事は当然だろう」

止めた。

それが無駄だと思ったんじゃない。

『自分にとって最上の礼装』

そう言い切るダークスーツを纏い、そう告げる彼女の顔が何処ま

でも真剣そのものだった為だ。

「、」

わたしは無言でアルトリアを睨みつけ、こくんと一度だけ頷いた。

そしてバイクのすぐ後ろに停まったハイヤーの運転手から、お母様の車椅子を受け取る。

一方のアルトリアも、用は済んだと踵を返しバイクのステアリングを握った。

その細腕で巨大なバイクを軽々とスピターンさせ、発進しようと左のヘダルを踏んだ瞬間、ふとこちらを向く。

「ああ、凜。これからはたまに暇を潰しに来る。

とりあえず、美味しい飯が作れるようになっておけ」

そう、ずいぶんと身勝手な事を言った。

そして返答など聞く気はないと、前輪が浮き上がるほどの急加速で彼女は坂を下っていった。

「つつ、はあ……」

遠ざかっていく鋼の咆哮を聞きながら、ため息をついた。

もう一度言うけど、わたしはアルトリアが大嫌いだ。

彼女を前にした時だけ、わたしは絶えず自分に言い聞かせてきた訓示が崩れ去ってしまう。

『遠坂たるもの、いついかなるときも余裕をもって優雅たれ』

常にそう在る筈なのに、彼女を相手にしたときは、何故か自分はあるのままの感情を吐露してしまう。

だからわたしは、アルトリアが大嫌いなのだ。

/
/
/

周囲の景色が吹き飛んでゆく。

私の跨るV-MAXは時速140kmに達し、若干狭くなった視界が目の前に迫る車の群れを映す。

雨で濡れたアスファルトをまるで滑るようにその鉄の群れ。

そこに突っ込み、何にも触れることなく置き去りにする。

高速の世界を滑る私の顔は、恐らく奇悦に歪んでいることだろう。

「……ふ、ふふ。」

何処までお節介なのだ、私は」

私が、凜に過剰とも思えるほどの気をかける理由。それは彼女が、珠玉の原石だからに他ならない。

誰かは彼女を、まだ研磨されていない大粒のルビーと称したが、私に言わせればそれは間違いだ。

彼女を評すなら、不世出のアレキサンドライトか、未だ見えぬオリハルコンこそ相応しい。

それは片や光によって色を変える万華鏡であり、片や不老不死を練成する原材料、神の石。

凜の才能には、この位でないと見合わない。

それを人でありながら人の道を踏み外した、ただの魔術師にするにはあまりにもつたいない。

宝石を輝かすために必要なものは、精密な研磨と匠の技。

神の石を練成するために必要なものは、最適な炉温と技術。

凜が身を置く過酷な環境が彼女を鍛え上げ、歴代の遠坂が蓄えた知識が、彼女を魔術師として大成させるだろう。

ならば自分は、その形が歪んでしまわぬよう彼女を見守り言葉を与えてゆこう。

私は、そう心に誓っていた。

「凜の才能は素晴らしい。

だが、わざわざ敵となる者が大成するのを援けるとは、私も酔狂だな」

次に起こる第五次聖杯戦争は、これまでの暦に従うなら六十年後。

その争いには、稀代の魔術師となった凜が
いやあるいは『世界』が許せば、魔法使いにまで至った凜が、サ
ーヴァントと共に私の前に立つ可能性は十分にある。

「酔狂か……そうだな。」

私は受肉したあの時から、ずっと狂っているのだ。
ならば己の感情が赴くままに。

凜。世界に名を轟かす魔術師と成り、私の前に立て！」

更にアクセルを絞り上げ、加速する世界の中で、私はまだ見ぬ強
敵に胸を躍らせた。

この時代の空を覆う雨雲の向こうには、いったいどれほどの空間
が広がっているのだろうか。

/
/
/

コツ、コツ、コツ。

硬い石の地下倉庫に、大柄な男の靴の音が響く。

ㄣ

ㄣ

ㄣ

ㄣ

『
』

『
』

その地下室には、音無き怨嗟の音が渦巻いている。

『イタイイタイイタイ……』

『ヤメテヤメテヤメテ……』

『ナオシテナオシテナオシテ……』

『カエシテカエシテカエシテ……』

常人ならば即座に正気を失うであろうその渦の中を、さも心地よいと言いたげな表情で男は進む。

言峰綺礼。

冬木市にある言峰教会を預かる神父であり、半年前の聖杯戦争のマスターであり、同時にその戦争の監督役であった者。

だが、その身に宿る己の感性に開眼した奴は、
聖杯戦争に捲き込まれた犠牲者を保護するという名目で引き取っ
た身寄りの無い子供たちを生贄として、
己の畸欲を満たすべく行動している。

子供たちは棺状の装置に繋がれ、絶えず苦痛を与えられ、その悲
嘆から生成される魔力を抜きだされ続けている。

魔術によって意識の大半を奪われ、生きるでもなく死ぬでもない
彼らは、地獄で飼われている家畜に等しい。

だが、奇妙なのはこの地下室の存在。

ここは以前子供たちを安置していた、聖堂に併設された地下室で
はない。

場所こそ教会の敷地内ではあるが、奥の林の中ににわざわざ新し
く造られた地下倉庫である。

意識無く、一歩たりとも動けぬ身でも、それくらいは理解できた。

「ふむ

」

言峰は子供たちの悲鳴に少しだけ唇を吊り上げると、部屋の奥に
設けられた大型の水槽の正面に立つ。

周囲には多数の魔術的、または科学的な観測機器がところ狭しと
並べられている。

言峰はそれらの機器が放出し続ける感熱紙をしげしげと眺め、異
常がないことを確認しているらしい。

そして一度頷くと、視線を水槽に向けた。

水槽の中は淡い翠の液体に満たされている。

その翠の中に浮かぶのは、我の身体。

両腕は無く、左腕に至っては肩からごっそりと抉られている。

全身の至る所にチューブが繋がれ、絶えず栄養と薬品、そして子供たちから抽出された魔力が送られていた。

我はあの時、痛恨のミスを犯した。

それをあの女が胸を剣が貫く寸前に察知した我は、己と蔵にあったデコイを身代わりにして窮地を脱した。

切り裂かれたデコイも、入れ変わるために用いた空間転移に用いた指輪も、共に我が蔵の宝具。

恐らく、あの女は気付いてもいまい。

だが、

「経過は順調のようだ」

それは、紛れも無い敗北の記憶。

少し離れた場所に転移した我は、動くことも出来ず、言峰に発見されるまで蟲のように地面を這うのみだった。

その屈辱は、到底王である我に与えられるべきものではない。

「さて、具合はどうかね、ギルガメッシュ？」

『最悪だ。見て解らぬか』

胸中が、憎悪で燃え上がる。

待っておれアルトリア。

必ず貴様を、死よりもおぞましき地獄へと叩き落してやる。

それぞれの思惑（後書き）

序章：第四次聖杯戦争終結 完

暗い牧場

魔力とは生命の大小を問わず、すべての生命がもつ生命力とも言
うべきエネルギーの別のカタチ。

神秘を起こすための燃料であり、命そのものであるとも言える。

その中で、自然界に満ちる星の息吹たる魔力を大源と呼び、人間
非人間を問わず、魔術師の体内で生成される魔力を小源と呼ぶ。

私はその魔力を体内に持つ竜の因子　魔術炉心をもって増幅
することにより、膨大な魔力を持つに至っていた。

故に私のもつ技法は、その殆どがその膨大な魔力を前提にしてい
る。

だが、問題が起こる。

宝具の使用時などの例外を除き、死者であるサーヴァントは自力
での魔力の補給が出来ない。

それは、受肉した私でも例外ではなかった。

いくら竜炉を持っていたとしても、増幅する素となる魔力が不足
しては、十全に能力を発揮することなど出来はしない。

「言峰。

貴様まさか、このように下劣なものを私に喰えとでも言うのか？」

聖杯戦争中ならば、切嗣を通しての聖杯のバックアップがあった
ために問題はなかったが、今はそれもない。

よって私は、現在の保護者である言峰に代替案を要求したのだが、
結果は散々たるものだった。

「ふむ、一体何が気に入らないというのだね。

魔力を補うならこれで十分だろう？」

私の怒気をまともに浴びながらも、言峰の貌は崩れない。

ヤツは唾いを貼り付けたまま、言峰は改めて用意した『食料』を見た。

怪しげな器具と、それが繋がった棺状の箱に詰め込まれた人間の
子供。

彼らは薬と魔術によって前後不覚にされ、暗い匣の中で呻いている。

「受肉したとはいえ、君は元々サーヴァントだ。

よって第二要素（魂）ないし第三要素（精神）は、君にとって格好の餌だろう？」

「たわけ、それ以前の問題だ。

こんな不味い魔力など喰えるものか」

挑発とも取れるような言峰の言葉が、私を苛立たせる。

こんなやりとりが一ヶ月も続けば、最初に告げられた事も

こいつがああ金色のマスターであったことも納得できるというもの。

「いいか言峰。貴様の趣味をとやかく言うつもりは無い。

だが私は貴様に『魔力を用意しろ』と言った。それはつまり、私が食すに足るモノを出せということだ。

こんな故郷の食事にも劣るようなモノを、私が食すわけがなからうが！」

たまらず、ドカ、と怒りに任せて近くの器具を向かいの壁まで蹴り飛ばした。

中に入った子供ごと、器具がけたたましい音を立てて潰れる。

まだ意識があったのか、潰れる瞬間に甲高い断末魔が響き、地下

室を満たした。

第六話

暗い牧場

「ふむ。では、君はどういった魔力が好みなのかね？」

私に大した魔力が無いのは知っての通り。父から受け継いだ左腕の令呪の数にも限りがある」

そう言って、言峰は呆れたような眼で私を見る。

奴の言う『令呪』とは、聖杯戦争においてサーヴァントへの絶対の命令権を宿した聖痕のこと。

聖杯戦争の監督役は、この令呪の余りを参加者から回収する義務を負っているらしい。

その例に漏れず、この言峰も先代から監督役を引き継いだ際に複数個の令呪も同様に継いでいた。

聖杯が休止した今ではその強権は発動しないが、同時にそれは高

い魔力を宿した擬似的な魔術刻印と言える代物。

それを既に一画、私は喰らっている。

あれは急場を凌ぐには最適なものだが、安定した魔力の供給からは程遠い。

「わかっている。別に魂を喰うことに異議がある訳ではない。

要は、このような雑草のごとき魂など喰うことが出来ぬと言っているのだ」

確かに安定的という意味ではここで呻いている子供から奪うのも良い。

だが食事とは栄養補給以上に“何を喰うか”が重要なのだという事を、私はこの時代に来て痛感した。

かつての物資の無い時代ならばまだしも、知ってしまった今では昔の食料などとても喰う気にはなれない。

今回の件も同じだ。

そこから拾ってきたようなモノの魔力など、食すに値しない。

私は壁に背を預け、なにか妙案はないものかと腕を組んで考え始めた。

その間、地下室には子供の呻き声だけが響く。

どうやら言峰も、私が“邪魔”を極端に嫌うことを学習したらしい。これはいい傾向だ。

「そうだ。言峰、貴様は確か“代行者”だったな。

ならば吸血鬼には詳しいだろう。

吸血鬼　特にヴァンパイアと呼ばれる者は、人間とは比べ物にならぬ魂の密度を持つと聞く。相違ないか？」

「む……ふむ、概ねそれで間違いは無い。吸血鬼と成った魂は、一段上にシフトするというのが通説だ。

ましてその第三段階ともなれば、魂の密度と内包する魔力は人間とは根本から違うといえる」

若干の驚きを孕んだ声。そんなに意外だったか？

予想外に心地よいヤツの反応に満足した私は、もはや決定事項として言葉を繋ぐ。

「よし、ならば魔力補給にはそれを喰うこととする。言峰、さっそく手配せよ」

今度こそ、言峰は驚いたらしい。

やはりこの男は、私が用意した子供達の魂を喰らわないことまでは予測していたな。

だが他に方法は無いのだからしぶしぶ妥協するだろうと考え、期待していたのだろう。

「聞こえなかったか？　言峰。返答をせよ」

言峰の異常な趣向はすでに大まかにだが把握している。

それは私をもってしても反吐が出るようなものだが、故に覆したときの爽快感は大きい。

私はくつくつと笑いながら、戸惑う言峰を眺めた。

「アルトリア、ひとつ訊きたいのだが

それとここに居る子供達の魂を喰らうのと、どう違うというのだ？」

「八 馬鹿め、大いに違う。

考えてみるがいい、勇猛な獅子がそこらの雑草を食べるか？ 食べぬだろう。

獅子が喰らうのは、草原を駆けるヌーヤシマウマ。雑草を食べる獣を狩り、喰らうのだ。

獲物を狩り、喰らってこそ獅子。地面に転がる腐肉など、獅子は喰わぬ」

ここに捕らわれた子供たちは皆、ただの一般人。つまり民だ。

民草は喰らうものではなく、自由なき自由を与え管理するものと私は考える。

そこから出る利益は吸い上げるが、それそのものを喰うことはない。

またその利益を脅かす害獣を食料とするならば、一石二鳥というものだ。

「心配するな。狩りも獅子の仕事。別に貴様が吸血鬼を狩る必要はない。

貴様は獲物の居場所を私に告げればいいのだ」

なんとも複雑な表情する言峰に正式な命令を下し、私は地下室を後にする。

「ふむ。また何とも妙な事になったものだ」

その背中で、言峰は少し疲れた声を聞いた。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

とーん。雫が鳴った。
天井から落ちた水滴が、静寂を乱す。
その音に呼応するかのように、部屋に並べた棺から呻き声が漏れ
始めた。

冬木市、言峰教会の地下にもうけられた 牧 場 (カタコンペ)
。ここで、私の食すもうひとつの“食料”は創られる。

「ふ、ふふ……」

思わず口元から笑みが漏れた。
右手に持ったグラスに注いだ琥珀色の中身を一度廻せば、カラリ
と氷が囁く。

静謐な地下聖堂に響く、滴る水と転がる氷の音。
唯一の雑音が、目の前の小さな棺より聞こえる呻き声だが、それ

も仕方がない。

まだその棺は空いているのだから。

「無様だな……」

そこに収まっているのは、先日捉えた魔術師上がりの死徒。

両腕を肩から失い、両脚も太腿の中ほどから先が無い。

腕の代わりに、肩関節にはジョイントが埋められ、大腿骨にも正面からボルトが通っている。

顔には既に眼球が無く、顎は砕かれ、馬鹿になった口には栄養剤のチューブが喉まで差し込まれていた。

そして、その胸には鈍い金属の輝き。魔術具が、彼の心臓を包み込むように覆っているのだ。

子供くらいしか入りそうにない棺と、そこに接続された魔術具に、彼は繋がれている。

「静かにしている。貴様の声は、不快だ」

一旦グラスを腰掛けていた棺に置き、確認のために空けた目の前の棺の蓋を閉じる。

口も喉も潰された声は、分厚い棺の壁など越えられない。

静かになった聖堂は、再び水の音だけになる。

「は、ふう……」

熱い息をゆつくりと吐く。

僅かにしか動いていないのに、元の棺に戻った私の脳がぐらりと揺れた。

祝いの酒、というのは問答無用に美味しいものだ。

それが友誼の証として貰った、極上のブランデーならばあの神酒にも匹敵する。

「ク…クク……」

押し殺せぬ歓喜が、再び口角を吊り上げる。

何体もの吸血鬼を喰い潰し、幾人もの魔術師を枯らした。

方針を決定したあの日から、もう六年が過ぎていた。

だが地下聖堂に並べた二十の棺は、決して埋まることは無かったのだ。

それが今夜、覆った。

先程確認した棺の蓋を閉めた瞬間、中に高い魔力源を内包する棺は二十と成った。

ついに、揃ったのだ。

「これで、万全だ」

もう、魔力を気にしながら戦う必要は無い。

棺で呻く二十の死徒は、その全てがヴァンパイアか魔術師上がり。身に宿す魔力は、私が多少貪ったくらいでは枯渴しない。

闘争に必要なものは、武具と兵糧と情報。

武具は既に有り、兵糧の供給もこれで整った。あとは

「情報、か。ある程度はそちらも整ってきた……うん？」

ふと見ると、服のポケットから光が漏れている。

「どうやら、知らぬ間に着信があったらしい。」

「ほう、いいタイミングだ」

地下室から出て、ポケットの携帯電話を取り出す。

始めは、携帯電話を使うことには獅子が空を飛ぶくらい違和感があった。

だがその通信速度は狼煙や伝書鳩よりも遥かに早く、魔術師同士のラインを介した通信速度にすら匹敵する。

「どうしたエンツォ。また何か掴んだのか？」

かけ直された電話の向こうにいるのは、アメリカのアンダーグラウンドを縄張りとする小太りな情報屋。

奴とは、私が主に北中米を中心に活動していた頃に知り合った。酒瓶片手に、よれよれのコートで娼館に入っていくような駄目人間だが、あれで情報屋としての腕は一流なのだから侮れない。

また北米は欧州に比べて歴史が浅く、中米は政治的に不安定な国も多い。

死徒が協会や教会に追われて逃げ込むには格好の場所。私にとっては絶好の狩り場だった。

奴の持つてくる情報はガセも多いが、反面、教会や協会を出し抜けるような情報をもたらすこともある。

『いいか、落ち着いて聞いてくれ。』

実は、とんでもない事が起こるみてえなんだ』

電波に乗って聞こえてきたのは、少しばかり興奮したエンツォの声。

しかしこの情報屋は常時酔っ払っているような奴だし、無意味に大げさな言葉遣いをする男だ。

『真面目に聞いてくれ、アルトリア。今回はマジでとんでもねえんだよ！』

こいつを教えたら、アンタは喜々としてすっ飛んで行きそうだからホントは教えたくないんだが

「だったら電話などしてくるな。私は今、休暇中だ」

『　　ッ。けど教えなかったら、もっとおっかねえじゃねえか。』

それにアンタは一番の上客だ。

腕っ節はアイツと同じ位だが、金払いなら断然アンタだ。そうだろ？』

その一言にふん、と鼻を鳴らした。

流石は情報屋といったところか。

休暇中の無粋な電話だが、話くらいは聞いてやろうと続きを促す。そして奴が次に告げた名で、エンツォが慌てて電話をかけてきた意味を理解した。

『　　いいか、さっきも言ったが、落ち着いて聞いてくれ。』

まだウラの取れてねえ情報だが、真祖の姫君が……アルクエイド・ブリュンスタッドが日本に入った』

暗い牧場（後書き）

モブキャラ説明

エンツォ

性別：男性

ゲーム、Devil May Cryの 説明書 に登場する情報
屋。

主人公であるダンテに様々な依頼をもってくるそうだが、ゲーム内
で姿が描かれたことはない。

漫画版や小説では度々登場する。

本作においても完全なモブキャラ扱い。

ぶっっちゃけ忘れても問題はない。

月砂庭園 / ガーデン

乾く

頭に浮かぶのは、それだけだった。

倫理？

道徳？

そんなの関係ない。

私は、ただ衝動に突き動かされるまま、獲物を狩って血を貪った。

じゅる……

粘つくものを嚼む音が、静かな路地裏に響く。

いくら繁華街といえども、深夜ともなれば人通りは途絶えた。

町に残るのは終電を逃した間抜けなサラリーマンか、家に帰る気のない夜遊び好きたちだけ。

誰も、助けになんか来ない。

「ひ

た、助けてくれ……」

狩りはすごく簡単だった。
なぜって？

だって彼らは誰の目にも留まらないコンクリートの檻に、自分から足を踏み入れたんだもん。

私はただ、誰かがそばを通るの待ち構え、タイミングよく声を出すだけ。

獲物が男なら「きゃっ！」と可愛らしく、女なら「キヤアアー！」と悲壮に。

たったそれだけで、獲物は狩場に脚を踏み入れた。

「い…いせ。」

やめて、赦して……」

恐怖に痙攣する顔面の筋肉。

どの悲鳴も鮮明で、今でも耳に残っている。

でも、ごめんなさい。

もう私はちくりとしか感じないんだ。

いくらヒトを殺しても、変性してしまったこの心は、針の先ほどの痛みしか感じないんだ。

「あ…う……」

こくこくと喉を鳴らして、獲物の首から滴る血液を飲み下す。

そういえば、何で私はこんなところにいるんだっけ……
あはは、なんだか酔っ払ってるみたいで、なんにも思い出せない
や。

かつ、

不意に、罨の入り口でまた音がした。

私の犬歯が既に息絶えた女の人の首から離れ、思わず口角がにやりと釣り上がる。

また、獲物が来た。

何かを探して、明るい家を飛び出して訪れた夜の町。
昼とは雰囲気の違いで私は右往左往し、ついに迷ってしまった。

そしてふと顔を上げた先にあつた甘美な罨。

暗い路地の向こう側、見覚えのある黄色いアルファベット。

『ああ、あの店なら知っている。』

まっただから。

でも、しょうがないよね。

私は吸血鬼で、そうしないと死んじゃうんだし。

だからヒトを殺して、血を吸った。

悲鳴も、絶望も。ほんの一日まえに、“わたし”も漏らしたそれらごと、私は命を飲み下すんだ。

ふふ……

じゃあ、ごめんね

いただきます

紅に沈む

『真祖の姫君』アルクエイド・ブリュンスタッド
現在では唯一といわれる純血の真祖。魔王と成った真祖
を狩るために生み出された最凶の兵器。

一説によれば、かのゼルレッチによって打ち倒された『
赤い月』の器であるとされるが、真偽のほどは定かではない。

ただ、その姫君が『アカシャの蛇』と呼ばれる死徒に力
を奪われ、その眷属を執拗につけ狙っているというのは有名な話。

真祖の姫に関する情報が、一気に脳内で弾ける。

これ以上ない大物。この星における、最強の一人。それ
が、この国に居る。

「ッ、ハ

」

眼前に現れた木材を、転倒寸前のアクセルワークで躲す。
真紅と漆黒のツートンに塗り分けられた車体が、障害物
の数センチ右を擦り抜け、東名高速を東へ駆け上る。

夜の闇よりも濃い黒のライダースーツ。

白金の髪を同色のヘルメットに隠し、アスファルトの路
面を蹴り飛ばし疾駆する。

今回は時間との戦い。

『極東』と揶揄されるほどに欧州から大きく離れた立地
条件と、この国の特殊な文化。

それを考えるれば、いくら教会といえども一線級の代行
者を派遣するには数日かかるだろう。それは魔術師教会とて同じ。

ならばと私が選んだ乗馬は、先の戦争より愛用するV・MAXではなく、最新機種であるGSX1300R HAYABUSAの改造機。

回避のために緩めたアクセルを捻りなおすと、ゴウウと、リッターオーバーのエンジンが唸った。

脳が置いていかれる。

そんな凶悪な加速Gに酔いながら、タイヤを路面に押し付けてグリップを保つ。

絞り上げたアクセルによつて時速は200km/hを軽々と超え、300km/hに迫る。

そのために路面の僅かな起伏によつて跳ねる紅の車体を魔力放出で押さえ込み、もう何台目かわからない大型トラックを風の速さで抜き去った。

第七話

紅に沈む

「チェックインだ。荷物を頼む」

言つて、GSXの後部座席に縛り付けた荷物を指差す。すでに22時を回っている。

フロントで固まっている若い男からチェックインシートを奪つと、名前を書きこんでバシリと万札を机に置いた。

「早くしろ、私は忙しい」

「え…っと、お待ち下さい」

突然来訪した、リッターバイクの少女。

それを眼にする一般人どもの反応はいつも同じで、うんざりする。奥から出てきた壮年のホテルマンを眼で脅し、チェックインを済ませる。

そして荷物を部屋まで運ばせると、ライダースーツを脱いで別の服をバッグから引っ張り出した。

いつ姫君と遭遇しても良い様を持つてきた衣服で、ここぞという時にしか着ない私のもつておき。

フリルをふんだんにあしらった黒のワンピースと、同色の編み上げブーツ。

売り払った数々の魔術品によって得た利益を使って、一流の縫製技師に作らせたこの服は驚くほど強い。

もちろん魔術的な保護もかけてあるので、少々暴れたところで問題はないだろう。

「お気をつけて行ってらっしゃいませ、セイバー様」

それを着用、肩に狩りの道具が詰まったギターケースを
かけて街へと繰り出した。

さて、では獲物を探しにいくとしよう。

-
-
-
-
-
-
-

「目障りだ、消え去れ」

程なくして、私は吸血鬼を発見する。

ただしそれは死徒ではなく死者。死徒に使役される意思
を持たない死体人形だった。

「雑だな」

周囲を取り囲む汚濁の群れ。

町外れの廃工場の中は地獄と相違なく、ぞろぞろと現れる
死者はすでに十体を超えた。

確か四体目となる中年の頭を唐竹に割り、返し様にOLの胸を真一文字に薙ぎ払う。

斬るのではなく壊す。
殺すのではなく潰す。

扱う剣は黒く染まったエクスカリバーではなく、鉛色にくすんだバスタードソード。

『フォースエッジ』と呼ばれるこの剣に鞘はなく、野晒しにされた刀身は鋭さとは縁遠い。

だが反面、鉛色の刀身は肉厚で恐ろしく頑強。ひと目で『叩き潰す』ことを優先したと見て取れる剣。

この剣の切れ味はなまくら同然だが、故に私はこの剣を重宝している。

エクスカリバーでは内包した神秘が大きすぎるために、生け捕るはずの死徒を簡単に殺してしまうのだ。

「しかも遅い！」

左手が、死角をついたつもりで腕を振り上げる若い女の首を掴み、そのまま握り潰す。

同時に一足で間合いを詰め、最後に残った大柄で筋肉質な男の胸を片手突きで貫いた。

「おおおお……」

死徒の濁った断末魔が響く。

首と四肢の切断。再生など赦さない、完膚なき破壊。

既に死んでいるために、色々と手間のかかる死者の討伐だが、戦闘続行不可能にするにはこの方法が一番楽だ。

そしてこの方法が有効でない死徒が、私の獲物となる。

「ふん、悪くない」

数時間の運転で固まった身体を解すにはいい運動だった。手に伝わる手応えもまずまず。

魔力を誘蛾灯の光のように発散させ、誘い出した死者の数はこれで三十。

状況から考えて『アカシヤの蛇』の眷属に間違いないだろう。

「だが、今宵はこれで打ち止めか？」

ヴァンパイアを狩り出す際の定石である死者の殲滅は今のところ順調。

だが、追われる立場である以上、そう派手に吸血に勤んでいる訳でもあるまい。

あと一度。そう方針をたてて剣の汚れを拭い、隅に投げたケースから魔術礼装を取り出す。

効果は一定範囲内の音の吸収。

礼装に流す魔力を遮断して礼装を停止させ、剣とともに戻した。

その際、他の道具がジッパーの奥から覗く。

どれもかつての狩りで手に入れた礼装や魔術具。変り種では閃光弾や祝福儀礼済みの拳銃なども入っている。

集団ではなくひとりで狩りをする場合、このような小道
具が有効だった。

「さて……」

ギターケースを再び肩に下げ、繁華街の外れに戻る。
すでに人影は殆どないがそれも当然で、すでに時刻は0
時を過ぎてている。

吸血鬼の活動は猟奇殺人という形で世に伝えられている
ため、表を出歩くものが少ないのだ。

「うん？」

そこでふと、右のほうからある“香り”が漂ってきた。
視線を向けると、そこはビルの谷間に走る薄暗い小道が
ある。

途中で折れ曲がっていたために奥は見えないが……

「ふん、誘っているのか」

その香りに、私の貌が喜悦に歪む。

すこしツンとくる鉄の香り。耳を澄ませば、何かをすす
る様なくぐもった音まで聞こえる。

そして、路地の奥から湧き出るように溢れ、垂れ流され
る魔力。気配。

「いい度胸だ。」

褒美に刃をくれてやる」

カツン、とブーツの底を鳴らし、ためらうことなく私は

身体をその小道に滑り込ませた。

一歩ごとに濃くなる血の匂いと魔力の残滓は、そこに大物が居ることを確信させる。

逸る気持ちを抑えながら、全身を包むワンピースを漆黒の鎧で包み込む。

バイザーが眼球を保護し、足音が金属の擦れる音に変わった直後、私は道を抜けて少し広くなった場所に出た。

路地の奥深く。

正方形に切り取られた空から月光が注ぐ、四方を古い雑居ビルに囲まれた都会の死角。

そこは闘技場にも、檻にも、

「貴様が、この街で起こる事件の首謀者か？」

目の前の吸血鬼の餌箱にも見えた。

「あなた……だれ？」

そこかしこに食べ散らかされた死体が転がり、どす黒い血の海に立っていたのはひとりの少女。

彼女は少し乱れた茶色の髪を頭の両側でくくり、ツーサイドトップと言われる髪形をしている。

「私の名はアルトリア・セイバー」

年齢は 見た限りでは16、7に見える。

というのも、そいつはどこかの高校の制服と思われる黄色いブレザーと紺のスカートを着ていたからだ。

それも白地のシャツに青いリボン、足下は地味な革靴という徹底ぶり。

だが両腕を鮮血で染め上げ、唇に血のルージュを引いた様はどう見ても迷い込んだ一般人に見えない。

「貴様ら、吸血鬼を喰らう者だ」

目の前に居る彼女に、否、獲物に向かって宣告する。

「祈れ、少しは楽になるだろう」

さあ、狩りを始めよう。

蜘蛛の糸

「祈れ、少しは楽になるだろう」

出会わないはずの二人が出会った。

片や、第四次聖杯戦争にて召喚され、黒く変性し受肉した最強のサーヴァント、アルトリア・ペンドラゴン。

片や、数日前に『アカシャの蛇』たる遠野四季に襲われ、吸血鬼へと堕ちた半人前の死徒、弓塚さつき。

サーヴァントであるアルトリアは、本来なら終結とともに消えるべき存在である。

正史においてはこの時より四年後に彼女は再びこの時代を訪れるが、その時には既に弓塚さつきは代行者によって討伐されこの世にいない。

だがその理を覆し、ふたりは出会った。

剣を掲げ、威風堂々と運命を宣告するアルトリアに対し、「そう……」とだけ応えるさつき。

彼女は本能のままに、死徒の瞬発力を武器として、猛獣のように身を沈めた。

それに対し、アルトリアは無形の位を崩し、左足を前に

して迎撃姿勢をとる。

「なんで……」

不意にさつきの瞳から、脅えが消えた。

夜に栄える整えられた白金の髪と、輝くように白い肌。

控えめな胸を覆う胸当てと籠手。スカート状の垂れと具足に、その下に着込む丈夫そうな布の服。

全てを黒で染め上げ、漆黒と墨黒の二色で身を飾る騎士の右手には鈍い鉛色の長剣。

「なんで……」

アルトリアの威容は正しく英雄のそれである、が、それを感じ取るには、あまりのにもさつきは未熟だった。

黄金の瞳を覆い隠す異形のバイザーも、さつきの怒りを恐怖で絡め取るには足りない。

さつきに解るのは、眼に見えるものだけ。

故に彼女は、自分自身を赦せなかった。目の前のアルトリアが赦せなかった。

自分よりも背も低く、吸血鬼でもない少女に、なぜ自分が恐怖を感じなければならなかったのか。

それが不可解で、腹立たしい。

「こんな女の子に……!!」

かくしてさつきは、筋肉を躍動させてアルトリアに襲い掛かる。

それがどれほど無謀で、どれほど危険なことを、理解しないままに。

第八話

蜘蛛の糸

音を立てて、少女の拳が空気を裂く。その速度は、彼女の細腕からは想像も出来ない剛速。

死徒の身体能力は、人間とは一線を画す。

この一見か弱そうな女子でも、ヒトの身体を簡単に破壊するだけの膂力を持つ。

唸りを伴って私の胸元に襲い掛かる少女の拳が剣に当たり、甲高い音を立てる。

それを受け止めた左腕に、僅かに痺れを感じた。

「ほう、なかなか……」

少し、驚いた。

祖を除き、これまでに立ち会ったどの吸血鬼よりも重い

一撃。

「いい闘志だ、胸が躍る」

「~~~~っ!」

予測を裏切ってくれた少女に感心し、認識を餌から敵へと改める。

それでいい。

それでこそ、我が獲物に相応しい。

「このおお~~~~!!」

少女の拳の速度が、怒りが、さらに増した。

だが所詮は、獣の連撃。膂力に任せた稚拙な攻撃では私を捉えることなど出来はしない。

剣を使うまでもないと、間合いを切ることもなく少女の拳を全て左右の籠手で受け止め、あるいは後方に逸らす。

数度、その中に反撃の気配を混ぜるが、反応はない。

ぞうやら、本当に膂力だけが頼りで、戦闘はずぶの素人らしい。

「その程度か？」

「やあーッ!」

私の安い挑発にも律儀に反応した少女は腕を振りかぶり、さらに力任せな大振りを私の顔面に向ける。

躲すのも流すのも容易い稚拙な打

「くっ」

一瞬、危険を感じた私は、それを剣の腹で受け止める。

少女の貌で煌々と輝く緋の双眸。

際限なく加速する衝動を如実に示すそれが私への怒りで

一際燃え上がり、彼女の腕が一掃の猛りを見せる。

魔力が、腕に纏わった。

「重い。なるほど、膂力だけならばトップクラスか」

魔力による強化が常であるにもかかわらず、これまでの少女は何の魔力も付加してはいなかった。

だが今の一撃は、僅かに魔力を帯びた。

ただそれだけで、これ程までに破壊力が向上するとは。

高い膂力と、この魔力の通りの良さ。単純な暴力ならば、あるいは祖にも届くかもしれない。

「死、ん、じゃ、えー！ーっ！！」

少女の衝動がさらに加速する。

あの一打を境に、すべての打撃に魔力が乗り出した。

一撃で石壁を打ち抜く暴力の群れは、さながら鉄槌の壁。数十の戦鎚が、一切の容赦なく私を狙う。

「やあああーっ！」

その弾幕の下方から、救い上げるようなアッパーが迫る。近接格闘の経験の浅い私では、おそらく守りを弾かれ、その腕ごと救い上げられる。

しかし、だ。

「惜しかったな、ドラキユリーナ」

あの弾幕に私が僅かでも怯んでいれば、これは有効打になっただろう。

精度も先程の粗さから比べれば格段に高くなっている。

「その勢いは買うが……調子にのるな。」

いくら力があっても、ここまで単調なら読むのは容易い」

戦槌程度の圧力で、英霊である私が怯むなど有り得ない。金色の放った宝具による弾幕の圧力と比べれば、そんなもの竹光と大差は無い。

必殺を避けられ、呆気にとられた少女の胸骨を左の掌底で強かに打ち、間合いを作る。

さらに息と警戒の途切れた瞬間を狙い、一足踏み込む。

「耐えてみせよ」

狙いは左の脇腹。

膝を地面すれすれまで落とした体勢から右足を大きく踏み込み、五割ほどの力で放つ逆胴。

斬り上げるような格好になったそれで、奴の身体が僅かに浮かぶ。

「あ、ぐ……ッ！」

さらに踏み出している右足を起点に脚を入れ替え、左足が地面を捉えると同時に振った左拳が少女の顎を真横に薙ぐ。

次いで反転させた剣の柄頭を鳩尾へと突き入れ、呼吸を遮断し間合いを離れた。

虚ろな眼と、間抜けに開いた口。

少女は完全に動きを止められ、くの字に折れた身体が前へと倒れ込む。

「散れ」

「う、わあああ………」

指で遊ぶように剣を順手に持ち直し、左手を添える。

野球のスイングのように振りかぶった私の姿をその定まらぬ視界にとらえ、少女の口が絶望を紡いだ。

/
/
/

「やああーっ！」

わたしは思い切り右手を突き上げる。相手をガードごと破壊する渾身のアッパーカット。

まちがいに今夜最高の、最強の一打。

背中から斜め上方向へと力の流れが突き抜ける感覚に、総身が震えた。

拳は唸りをあげ、目の前の黒い女騎士の顔面に迫る。

『勝った！』

その瞬間、確信した。

この腕は、あとコンマ数秒で目の前の首を飛ばし、冷たいビルの外壁にへばり付かせるだろう。

やっぱり強いのはわたしだ。

わたしはもう、人間なんかに負けない存在に成ったんだ！

「惜しかったな、ドラキリーナ」

その最強が、相手をすり抜けた。

「その勢いは買うが……調子にのるな」

確実に返ってくるはずの反動、脳髄まで痺れさせる肉を
砕く手応え。

それが、無い。

「いくら力があっても、ここまで単調なら読むのは容易い」

振り切った腕の内側に、不気味なバイザーで眼を覆った
騎士の顔がある。

それを視認した直後に、胸を圧痛が襲った。騎士の左の
掌がわたしの胸骨を強かに打ったのだ。

「っ、！？」

痛みに、一瞬だが気をとられた。その刹那で、わたしの
視界から騎士の姿が消える。

果たして彼女は、

「耐えてみせよ」

わたしの、すぐ斜め下に、いた。

「あ、ぐ……ッ！」

深く腰を沈めた姿勢から大きく踏み込み、刃が左の肺を
目掛けて跳ねあがる。

私はどうする事も出来ず、それを受けた。

ぼきりという肋骨の折れる音と、内臓を轢き潰す様な激
痛。

だが同時に襲いかかる呼吸困難が、意識を失う事を許さ
ない。

「あ……」

声が出ない。目の前が歪む。さらに顎を殴られて目の前が真っ白になった。

畳み掛けるように棒の先のようなものが鳩尾に食い込み
圧痛が胃を突き抜ける。

痛い。苦しい。視界は真っ白でぐつちやぐちや。

騎士がどこにいるのなんて解らない。

もう身体の何処にもわたしはいない。

知らず、わたしの身体はくの字に折れていく。

歪む意識。重い身体。

何も、考えられない。

身体が前のめりに倒れる最中、ぼやけた視界は、剣を振りかぶる騎士の姿を捉えた。

「う、わああ……」

ぞわり。恐怖がわたしを蝕む。

ゴウと確固たる威力を示す音が大気を震わせ、鉄塊を思わせる剣先が解き放たれる。

死ぬ？

嫌だ。だってわたしにはやりたい事が沢山あるし、遠野

くんとだつてもつと一緒にいたい。

この想いを伝えられなくても、一緒にいるだけでわたしは満足なんだから。

私は、まだ、生きてたい！

「散れ
」

無慈悲な言葉が、わたしの希望を寸断した。

カッ、とお腹が熱くなる。とてつもない衝撃が内臓を突き抜けて背骨を歪める。

呼吸と意識と痛みと感情。全部、とんだ。

目の前に広がるのは、何か、悪い冗談のような光景。

跳ぶ

トぶ

飛ぶ

路地裏が目の前を高速で吹き飛んでいく。

混濁する意識が知覚する時間は歪み、刹那が一秒にまで引き延ばされるかと思えば、一秒が刹那に還る。

「きゃあ ツ……ツツ！！」

その時間地獄から抜け出したのは、全身に轟音と衝撃を感じた瞬間。

そこでやっと、吹き飛んでいたのは視界ではなく、自身であることを知覚する。

たった一発の逆胴によって起こされた、およそ現実味のない出来事。

わたしの身体は10メートル近い距離を吹っ飛び、分厚いコンクリートをぶち破ってここに在る。

衝撃で粉々になった壁が、煙になって目の前を覆っていた。

「はっ、く……」

何も解らない、何も感じない。灰色に濁った世界で、もうとっくに死んでいる自分を幻視した。

だが刹那後に襲いかかってきた身体中を万力で締め付けるような痛みが、現実から逃げ出した精神を引き戻す。

「なるほど。」

さっきからおかしいとは思っていたが、そういう事か」

死神の声に顔を上げると、黒い女騎士は籠手を左手の籠手を外し、白磁のような自分の手を見つめている。

困惑と期待がマーブル模様のように入り混じった、黒い

騎士の顔。

「そんなに　　わたしを殺すのが愉しいの？」

そんな言葉が、口をついた。
どうしようもない状況を悟り、心を悲観が覆い潰す。
精神を支配していた狂気はダメージによって霧散し、思
春期のどこにでも居る女の子が顔を出す。

「うう…なんで、なんで私ばかり
やだよ、遠野くん、助けて。私は、まだ死にたくない…」

望んで手に入れた力ではなかった。
けれど、もう人間でなくなってしまうたわたしにとって、
この力が唯一の頼りだった。

この力をちよつと振るえば、簡単に命を奪えた。
この力が、わたしを奪われる側から奪う側へと変えた。
その、はずだった。

ひとりぼっちになった世界で、唯一の頼りであったその
力は、目の前の黒い女騎士には全く通じなかった。

「問おう。」

貴様が“そう成った”のは何時だ？」

それは全く意味の解らない質問だった。

どうせ殺すクセに、なぜこの騎士はそんなどうでもいい様な事を聞くのだろう。

「そんなの……そんなの、わかんないよ。」

私は遠野くんを探して……そうだ、わたしは遠野くんを探してたんだ。

それでいつもは来ない夜に街を歩いていたら、急に路地

裏で

「

半ばヤケになって言葉を繋ぐ。

その途端、硬く密閉したはずの記憶の蓋が開いた。

わたしは黄色いアルファベットを見ながら路地の中ごろまで進んで、

足下の空き瓶に躓いて転んで、

顔を上げたらそこに長い髪の毛

あ……

悪魔の姿が、網膜に蘇る。

白い髪と紅い瞳、口角のつり上がった三日月の口とその
中に並ぶ乱杭歯。

あ……

自分の全てを奪った、病的に白い膚と拳。
そして、人外に対する圧倒的な恐怖と本能の叫び。

ずる……

断続的に、あの時の記憶がフラッシュバックする。
氾濫する記憶の波に、身体がガタガタと震えだした。

「わ、わたし……は……」

喉が収縮して言葉が出せない。意味ない単語だけが漏れる口。

過去に刻み付けられた恐怖に、身体が、心が震える。

わたしは両手で自分の両肩を掻き抱いた。

それでも震えは治まらない。

目の前に黒い死神がいるのに、わたしの頭の中は白と赤の悪魔のことで一杯になっている。

「なるほど」

不意に、死神がわたしの胸倉をつかんだ。

嫌、と声を上げる間もなく、彼女の胸に引きつけられる。

「やはり腐臭はない。それに、」

今度は無慈悲な冷たい指が、ぼろぼろになった皮膚を擦る。

「もう傷が塞がりかけている。

復元呪も尋常ではないか　危険、だな。貴様は」

騎士はそう呟いて指を離すと、眼を覆っていたバイザーを外す。

その向こうから現れたのは、身が竦むほどの畏怖を湛えた、黄金の瞳。

彼女の瞳は悦びに満ちていて、わたしの瞳からはつう、と雫が筋を引いて流れ落ちる。

どうしようもなく、悟ってしまった。

ああ、わたし、死ぬんだ

もう頭には『絶望』の二文字しか浮かばない。

楽しかった思いでが次々と現れては消え、どす黒い血で汚される。

そんな私を見て、騎士はくくく、と肩を震わせた。

「まさかこの国に、これほどの才能が眠っていたとは思わなかったぞ」

あと少して唇が触れそうな距離に、騎士のカタチをした

“死”が在る。

それは、笑って、いた。

「貴様が『成った』のは、多く見積もっても数日前だろう。その僅かな期間で第三段階“ヴァンパイア”まで駆け登るとは……」

嬉しくてしょうがないといった表情の騎士が、わたしを覗き込む。

「……気に入った。貴様、名は？」

そして、わたしにとって予想外の一言が、騎士の口から

放たれた。

道標

「散れ」

アルトリアは止めの剣を振りかぶり、総力を持って殺意をさつきに叩きつける。

彼女にとって、これで死ぬようならそれでも構わない。

四年ほど前にアメリカで捉えた魔術師がそろそろ現界に達しようとしているが、そう無茶をしなければまだ保つだろう。

確かに、目の前の死徒は信じられないほど未熟で

『この才能を、潰しても良いのか？』

その瞬間、アルトリアの殺意に雑念が混じった。
ある仮説が、彼女の頭に閃いた為だ。

「!?」

だが、もう剣は止められない。

腰は既に捻転から開放に移行し、刃先が半円を描き始めている。
彼女は咄嗟にそれを捻じ曲げ、軌道をさつきの肩から腹へと変更。
いつもなら断つ為に引き抜くそれを、少女の腹に当て、押し込んだ。

「ッ!!」

確信どころか、なぜそれを閃いたかすら解らない。
だが確かに、彼女は感じた。直感が告げた。
目の前の少女は、とんでもないバケモノの卵だと。

「うん？」

ふと、アルトリアの視界が地面に散った少女の血液を捉える。
その色に違和感を覚えて指で救い上げ、鎧を外した手の甲に擦り
付ける。

白い手の甲を彩る、瑞々しい

「赤、だと……」

この鮮やかな赤い血液は、死徒よりも人間に近い。

ありえない事だ。鮮やかな血液は生きる者の特権である。

細胞が死んだ死者やグールの血液は半日でチヨコレート色に濁り、
リビングデッドの血など語るまでもない。

身体の再生を終えたヴァンパイアの血もまた鮮やかに赤いが、そ
もそもヴァンパイアとなるためには数十年の月日を要する。
故に、ありえない事なのだ。

「なるほど。」

さつきからおかしいとは思っていたが、そういう事が「

だがしかし、数多の事例の果てに、その常識を覆す存在が生まれ

る。

それはギフト。神の悪戯。“死徒の才”という、実にくだらないものを与えられた存在。

弓塚さつきは、そんな者のひとりだった。

第九話 道標

「クク……」

予想外の拾い物に、わたしの口角が吊り上がる。

鮮やかに赤い血液。顔を近づけて匂いを嗅いでも、彼女の身体から腐臭はしない。

最後の斬撃で引き摺られるように大きく裂けた腹の傷も、強力な復元呪詛によって既に塞がっている。

それらは、本来ならば共存するモノでは断じてない。

この少女が、並外れた逸材でない限り。

「……気に入った。貴様、名は？」

どうやら私は、とんでもない思い違いをしていたらしい。

あの瞬間、脳内でスパークした仮説は正しかった。

少女の着る服装は、感慨や未練から着用しているのではなく、『成った』瞬間に来ていた服なのだ。

ならば、その非常に未熟な戦いぶりにも説明ができる。

「え？」

絶望に染まっていた少女の瞳が、呆気に取られたかのように見開かれる。

そうだろうな、そうだろうとも。

自覚などあるわけが無い。なにせ、このヴァンパイアはほんの数日前まで『人間』だったのだ。

「え？ ではない、名前だ。」

お前にも名前くらいあるだろう？」

ゆつくりと言葉を紡ぐ。この言葉は、一言一句聞かせなければならぬ。

名前とは、生まれて初めて両親より与えられる宝物。人間を、有象無象が蔓延る『世界』定義する言霊である。

故に、軽々しく問うてはならない。名乗ってはならない。

私は心底、目の前の少女のことが知りたいのだから。

/
/
/

「あ さ、さつき。『塚さつきです』」

反射的に、言葉が出た。

予測とは180度違う質問に呆気に取られる。

何で、名前？

だって貴女は、もうすぐわたしを狩るんでしょう？ 殺すんじゃないの??

「さつき、か。」

よし、お前を我が従者として迎える。これからは私の傍らに立ち、私に仕える」

だが騎士はそんなわたしの困惑など無視して、ひときわ強い意志の籠った瞳で、そう宣言した。

「え？ え!？」

本当に、訳がわからない。

それってなんだか、王様が騎士にかける言葉みたいで、

騎士は目の前に居て、えっと、なんだっけ……

「くく、わからぬか？」

反応を愉しむように、騎士はにやりと唇の端を吊り上げて立ち上がる。

わたしの顎から手が離れ、ゆっくりと彼女の身体が起きる。

右手を覆っていた籠手が外され、細くて真っ白な手があらわになる。

「私はお前が欲しい。」

だから、私と共に来いと言っているのだ」

そして月を背に、右手が目の前に差し伸べられた。

その姿は神々しくも妖しく、そして、おとぎ話から抜け出してきた英雄のように、本当に美しかった。

「あ……」

い。
今のわたしの思考を言葉で表すなら、ぐちゃぐちゃとしか言えない。

目の前の黒い鎧姿の女の人、間違いなく怖い人だ。

わたしの身体が真っ赤なのはこの人に斬られたから。

わたしの力なんてこの人にはぜんぜん通用しなくて、それどころ

かたつた一撃で死にそうになった。

間違いなく、この人はわたしを殺そうとした

怖い、怖い、怖い怖い怖い……けど、今までわたしは、誰かに本気で必要とされた事はあつただろうか。

頼みごとをされた事ならいくらでもある。でも、それはわたしじやなきゃダメな事じゃない。

必要なのはわたしじゃなくて、それが出来る誰かだった。

この人は、わたしが“弓塚さつき”だから「欲しい」って言うてくれた

自惚れかもしれない。実は誰でも良かったのかもしれない。

こんな事を言つて、手をとつた次の瞬間に殺すつもりなのかもしれない。

だってこの人が言った言葉を、わたしは全然理解できなかったんだから。

けど、でも、解る。

この人は、絶対に嘘なんか言つてない。

だから、決めた>

目の前に差し出した右手に、まだ震える右手を伸ばす。

わたしの右手が、黒い騎士の右手と重なる。

冷たい手。でも、熱い手。

女の子らしいすべすべの手なのに、ものすごく力強い、矛盾した印象の右手だった。

「あの……よろしく、お願いします」

実は……本当はもうひとつ、この手をとろうって思った理由があるんだ。

月明かりに照らされて輝く白金の髪と、吸い込まれそうな黄金の瞳。魂を震え上がらせるような漆黒の鎧。

その姿は天国を追い出された堕天使みたいで　　凄く怖いけど、それ以上に、凄く綺麗だったから。

わたしは自分の全部を預けるつもりで、重ねた手を強く握った。

「よし。では立てさつき。まずはその服を何とかしよう。

私の従者になったのだから、そんな無様な格好をさせておくわけにはいかない」

ぐい、と手を引かれ、わたしはそれを頼りに立ち上がる。
その時には既に、身体の痛みはほとんど引いていた。

「いくぞ」

その声に反応して顔を上げると、黒い騎士はその身に纏っていた黒い鎧は消えていた。

代わりにあったのは、たくさんの白いフリルで飾られた、黒いワンピース。

確か、ゴスロリ、だっけ？

「っ！？ あ、あははは！！」

さっきまでと余りの落差に、思わず弾ける様に笑ってしまった。
身体にまだまだ残留していた疑念と死の幻想が、笑い声と成って吐き出されるのが解る

「……なにを笑っている？」

その態度に彼女は振り返り、むう、と眉を寄せた。

「だ、だって、あんまりにも可愛いから。」

あ、あはははは！ い、痛い、傷に響く！！」

腹を抱えて笑い続けるながらふと見ると、彼女はなぜわたしが笑っているか解らないみたい。

そのせいでどんどん眉間に皺が増えていくけど、怒ってるようには見えなかった。

なぜなら寄って行く眉と同時に傾けられた首は、怒気とは無縁の可愛らしさを醸し出していたのだから。

「まあいい、まずは服だな。

良し。ならばさっきの服は、私と同じようなのを選んでやるっ」

「ええっ、いい、いいよ。」

勘弁してと本気で手を振るわたしに、彼女は遠慮するなど食いだがる。

おかしいなあ、本当にこの少女とさっきの騎士は同じ人物なんだろうか？

そんな事を思ったけど、次の瞬間に同じだと納得する。

ああ、そっか。どっちかじゃなくて、どっちも。

裏表があるから、人間なんだ

だからこの人は、わたしよりもずっと小柄なのに、こんなにも頼もしくて、強いんだ。

この人の強さの秘密が、少しだけ解った気がした。

「それよりも、これからよろしくお願いします。え〜っ……」

「アルトリア・セイバーだ。先程そう名乗ったはずだが？」

「あ、はい。アルトリアさん！」

わたしはこれからお世話になるのだからと思い、ペコ、とお辞儀をした。

その肩に、ポンとアルトリアさんの小さな手が乗せられる。

「ああ、ここに契約は完了した」

アルトリアさんはまた訳の解らない言葉を言って、わたしの肩から手を離す。

「では、行くか」

「はい！」

アルトリアさんが、血に塗れた路地裏から歩き出す。その彼女に付き従って、わたしもそこを後にした。

聖なる蒼弓 / エクスキューター

1999年、某日

ヨーロッパ、ヴァチカン市国

カトリックが法王庁を置き、その異端審問部門である聖堂教会もまた本部を置く世界一小さな国。

その国の、世界中でもほんの一部の者しか知らない廊下をひとりのシスターが歩いていった。

「まったく、これから出発という時に。

いったい何の用でしょうか、あの殺人機関長様は」

聖堂教会本部の暗部に、『埋葬機関』とよばれる部署がある。

それは法王庁ヴァチカンの直属機関である聖堂教会十三課と双壁を成す、

イスカリオテ

ある貴人の直属特務機関として、大司教すらも審問し得る権力を与えられた、聖堂教会のもうひとつの切り札である。

「機関長、入ります」

ノックを四回し、シスターは重厚な造りの扉を開けた。

その先にある大型の執務机には、両肘を突いて両手を口の前で重ねた妙齡の女性が座っている。

年の頃は、三十路に差し掛かったばかりといったところだろうか。長い髪を顔にたらし、左目を隠した彼女のもうひとつの眼が気だるそうにシスターの方を向いた。

「来たか、シエル。」

メレムから聞いたのだが、お前、この休暇に日本へ行くんだって

「？」

あのアホジャリ……

シエルと呼ばれたシスターは小さく呟き、舌を打つ。

彼女にとって、目の前の埋葬機関長は心底“嫌なヤツ”だった。

それこそ、隙あらば事故に見せかけて殺してやるうと思っくらしいに。

だがそんな女でも、シエルが埋葬機関に属す以上、紛れもなく上司である。

もし局長である彼女が『否』と言えば、彼女は目的を遂げるのが難しくなってしまう。

「はい、『アカシャの蛇』の次の転生先があ国ですので。機関長も、あの死徒の滅却はわたしに任されたはずです」

シエルにとって、この日本行きは仇敵の討伐の為に絶対に必要なものだ。

故にたとえ機関長命令だったとしても、止める気は無い。

「ああ、全くもってその通りだ。

だから、これをもって行くといい」

だがシエルの決意に対して投げかけられたのはいつもの様な嫌がらせではなく、一枚の書類。

それを開いたシエルの目が、信じられないものを見たように固まった。

「これって

ええ、当然持つて行くつもりではありませんが……」

「既に第八課には話を付けておいた。^{マタイン}
本日この瞬間より、第七聖典は正式に貴女専用の礼装となる。好
きに使い」

そう告げ、彼女は用は済んだとばかりにヒラヒラと手を振ると手
元の書類に視線を落とす。

相手はひとつの問いに十の嫌味を返す、埋葬機関長である。
シエルもよほどの事がない限り、問い返したりはしない。

「機関長、ひとつだけよろしいですか。
何故こんならしくもないことを？ 普段の局長からは考えられな
いのですが」

だがいつもとは180度違う彼女の態度に、シエルは溜まらず疑
問を投げた。

すると彼女は口元を歪め、再び視線をシエルに向ける。

「必要だから、だ。
日本には“あの女”がいる。貴女でも、戦えば『死ぬ』かもしれ
ないぞ？」

壮絶な笑みを浮かべ、さも楽しげに嗤う。

そしてそれつきり、彼女はシエルの疑問の全てを黙殺した。

唐突な招待状

嵩張る大きな紙袋を玄関先に居たボーイに押し付けて、ホテルのロビーを横切る。

ふと視線を巡らせると、ソファアームに腰掛けた黒髪の若い女性がティーカップを片手に新聞を読んでいる。

その向こうでは、品のある香りの煙草を燻らせながら、ゆったりと読書に勤しむ中年の男性。

そんな彼らの気分を害さない程度にスピーカーから流れるオルゴール調べが、穏やかな午後の空気を流れている。

「気のせいかな」

漠然とした“何か”を感じて見回してみても、そこに怪訝なものなど何も無い。

慌しい感じのあった朝とは違い、午後五時をまわったロビーにはゆったりとした時間が流れていた。

私の勤もたまには外れるのだなと思いながら、さっきの待つ部屋へと向かう。

「お帰りなさいませ、アルトリア様」

エレベーターの傍に居たホテルスタッフからの挨拶。

私の行動を先読みし、予めエレベーターのスイッチを押しているあたりは、流星はプロといったところか。

「すみません、アルトリア様。」

少し、お時間を頂けますでしょうか？」

チン、と鳴って到着を知らせるエレベーターと同時に、フロントの女性に呼び止められた。

第十一話

唐突な招待状

「何だ？」

振り返ると、フロントの女性は小走りにかけて来て一通の封筒を差し出す。

「先ほど……そうですね、一時間ほど前に女性が尋ねて参られました。

生憎とアルトリア様はご不在であると告げると、代わりに手紙をフロントに預けられました」

「ふむ、ご苦労。それでその者の名前は？」

「申し訳ありません、聞きそびれてしまいました。ただ、その女性が『キヨウカイの者だといえば解る』とおっしゃっておられました」

その一言で、私は先程の違和感の正体を知る。恐らく、残留しているのだ。教会特有の、清浄過ぎる気配が。

「礼を言う。」

「ここで開封したいのだがナイフは？」

「こちらに」

アルトリアは手早く差し出されたナイフで封筒を開封し、中に入っていた一枚の便箋に眼を通す。

『はじめまして、アルトリア・セイバー様。

唐突で申し訳ないのですが本日24時、三咲第三ビルの屋上にて待ちます。

お連れの方と2人で来て頂きますよう、お願い申し上げます

聖堂教会埋葬機関

シエル』

それは、教会の死神からの果たし状だった。

グシャリと音を立てて、彼女がその手紙を握り潰す。

私の鬼気に当てられたのだろう、隣の女の肩がびくりと震えた。

「ひとつ聞く。」

この手紙を持ってきた者がどんな女だったか、覚えているか？」

「え、っと……」

申し訳ありません。記憶にありません」

当然だ、と小さく頷いた。

この『シエル』は、『弓』のふたつ名を持つ超一流の代行者。

自身の痕跡を残すようなへまはまずしないだろう。

クシャクシャになった手紙を便箋ごとバックに放り込み、女性に
辛い言葉をかけると私は足早に部屋へと戻って行った。

- - - - -

Interlude…

その様子を、黒髪の女性が少し離れたソファから英字新聞ごとに眺めていた女性がいる。

彼女の片目にはカラーコンタクトを加工した弱い望遠レンズが嵌めてあり、もう片方にも同色のカラーコンタクト。

空を写した自慢の髪も、この空間に馴染むように真っ黒く染めて
いる。

「大当たり、ですか。」

しかしこれは当たった事を喜ぶべきかどうか……」

彼女は思惑が当たったにも関わらず、ハアとため息をついた。

この女性こそがあの手紙を出した張本人であり、裏の世界
とりわけ吸血鬼たちに『弓』のふたつ名で恐れられる神罰の代行
者。

埋葬機関第七位、シエルその人であった。

彼女はその卓越した魔術技能で己の魔力を隠しきり、変装までし
たうえで彼女の様子を伺っていた。

かの『魔術師殺し』がそうであったように。

彼女もまた、魔術を知るものが総じて科学技術など、魔力を伴わ
ない方法による干渉に疎いことを経験的に知っていたのだ。

「とはいえ、一度顔を見られているからといって、ここまで凝る必
要はなかったですね」

そう言っただけ彼女は、頭に乘せたカツラの髪を指で遊ばせる。

シエルが昼食の帰りにふと見つけた、金と黒の少女。

まるで吹き上げるかのように彼女の身体から発せられる魔力の奔
流は、明らかに人間が許容できるものではなかった。

反射的に身構えてしまい、彼女に魔力を感知されるという失態を
犯したのもそのためである。

その魔力が昨夜発見した戦闘の跡に残留していたものと一致する
ことに驚き、痕跡を追ってたどり着いたこのホテルで、彼女の名前
を聞いたときは驚愕した。

五年ほど前から突如として姿を見せ始め、幾つかの死都を滅ぼし、二十七祖に届こうかという死徒まで屠ったフリーのヴァンパイア・ハンター。

その騎士のような外見と、吸血鬼を狩る代行者じみた行動から教会の概念武装の銘をもじって『黒剣』^{こっけん}と呼ばれる黒い剣士。

まだごく一部の人間しか彼女の存在を掴んでおらず、彼女も聖務の途中で出会ったという知人から聞いた程度だった。

「あのサド機関長が言っていたのは彼女の事なのでしょね」

ハア、と再びため息が漏れた。

その彼女曰く、その剣技は凄まじく、とつくにヒトの概念から外れた強大な異端と切り結び、これを圧倒したというのだ。

また黒剣は闇色の剣を用いて、ある強大な異端を黒い極光で消し去ったという。

それほどの威力をもつ概念武装ならば、あるいは現存する宝具の類かもしれない、と彼女は締めくくっていた。

それを聞いた時はまだ半信半疑だったが、今ならば理解できる。

彼女は紛れもなく真実のみを告げており、あの黒剣は、とてつもない力をもつ化け物のひとりなのだ。

そんな厄介なフリーランスが、この三咲町を訪れている。

理由はおそらく、この街に巣くう吸血鬼　　つまり『ロア』。

ならばロアを魂ごと葬り去ることを目的とする自分にとって、あの真祖と同様この上なく厄介な存在となる。

だが一方で、解せないこともあった。

昨夜発見したの戦闘の跡。

そこに残されていたのは、吸血鬼が食い散らかしたと思われる数人分の死体と、壁に空いた大穴。

破壊されたビル内に飛散した、僅かな吸血鬼のものとされる血痕だった。

とても人外同士が、その異能を以って殺しあつたとは思えないほど軽微な損害。

てつきり証拠を隠滅したのだと思い念入りに調べたが、その痕跡もなし。

まるで誰かが、そこにいた吸血鬼を説き伏せて連れ去つたかのような　　そこまで考え、ふと思ひ至る。

もしあの場所で戦っていたのが黒剣で、

彼女の目的が吸血鬼を『狩る』ことではなく有能な吸血鬼を『集める』ことだとしたら

そんな推測が、シエルの頭を過ぎつた。

もしそうだとしたら、教会の代行者として見過ごすわけにはいかない。

それを確かめるために彼女が仕込んだのがあの手紙である。
端的な、知らない者ならば人違いだと切って捨てそうな文面。だ
がそれをみた黒剣の反応は、予想以上に解り易かった。

「彼女の目的はともかく、彼女が吸血鬼を匿っているのは確定のよ
うですね」

シエルはそう呟いて、ホテルの自動ドアを潜った。

Interlude Out

.....

ガチャン、と音がするほどの高速でドアノブを廻す。
引きちぎるようにドアを開き、そのままの勢いで、ベッドの膨ら
みに平手を一発。
眠っているさつきを、文字通り叩き起こした。

「わっぷい！」

あ、アルトリアさん、お帰りなさい。」

「ああ、今帰った。」

さつき、話がある。まずはこれを読め」

そう言って、さつきに先程の手紙を渡す。

当然さつきに理解できるはずはなく

「シエル先輩？」

「何？」

文面を読み、困惑するさつき。

「お前、シエルと知り合いなのか？」

「え？ あ、そうじゃなくて、わたしの学校と同じ名前の先輩がいるんです。」

ひとつ年上の三年生なんですけど、すぐく頼りになるひとなんですよ」

「なんだ、驚かせるな」

そうは言ったが、もしも、という事はある。

わざわざ高校に潜むメリットなど思いつかないが、一応気に留めておこう。

「そうだな、まずはそのシエルという代行者について説明しようか」

そうしてシエルの情報を告げていくと、見る見るさつきの顔色が変わっていく。

ようやく、手紙の持つ意味に気がついたらしい。

「……えっと、うそ、ですよね？」

さつきがうるたえるのは必然。

新米吸血鬼が、彼らにとっての『死神』に狙われていると告げられれば、そうならないほうがどうかしている。

「嘘に聞こえたのか？」

そこにある通り、明日の午前0時にシエル……いや『弓』と決闘する。」

「え、ええっ！ まさか行くんですか!？」

「そつだ。こつちでは知らぬ者のいない猛者からの挑戦だ。応えねば失礼だろう?」

これまで、吸血鬼や魔術師を幾度と無く狩り、果ては二十七祖の一角に座す死徒とも渡り合った。

だが、まだ聖堂教会の上位クラスと死合った事はない。

その初めてが、埋葬機関の『弓』であるならば、これ以上は臨むべくも無いだろう。

にやり嗤うのが自分でも解る。

身体は疼き、心臓はやがて来る戦いの興奮に駆ける。

だからだろう。代行者の手法を、異端抹消のためには手段を選ばない、狂信者のやり口を失念していたのは。

「長くなってしまったが、そういう訳だ。準備をしてお

それは、話を切り上げ、腰を浮かした瞬間だった。
ぞくりとした悪寒が背中を走り抜け、カーテンの向こう側に今ま
でなかった影を捉える。

直感が、あれは危険だと警鐘を打ち鳴らす。

「さつきー!!」

ナニカが盛大な音を立てて窓ガラスを突き破るのと、私がさつき
を突き飛ばすのは完全に同時だった。

「くあつ……」

そのナニカが、左腕を貫通する。
腕がちぎれ飛びそうなほどの衝撃。

同時に床を蹴って勢いを逃がしたために私の身体が派手にベッド
へと叩きつけられる。

タイミングは間一髪。

僅かでも狂えば、左腕を失っていた。それほどの投擲

そう“投擲”なのだ。

以前、魔術師から奪った魔力遮断の魔術具が優秀だっただけに、
飛来するそれを感じできなかったのは皮肉以外の何でもない。

「これは、黒鍵か……」

別名『摂理の鍵』

代行者のシンボリックな武器で、緋色の柄と、十字架を模した形状
が特徴的な諸刃の投擲剣である。

反面、使いづらく愛用者は少ないと聞くが。

「チ、流星は『弓』」

突然、視界が炎に包まれた。衣服が燃え、肌が焼ける。即座に炎を払う為に魔力をバーストさせるも、効果は薄い。瞬間的な記憶を辿れば、さつきと自分の場所に飛来した四本の他に、あと四本の黒鍵が自分たちを囲むように突き刺さっていたことに思い至った。

おそらくアレは、周囲への延焼を防ぐとともに、炎を一箇所に集中させるための工夫なのだろう。

「風王結界！（インビジブル・エア）」

神秘はより強い神秘によって打倒される。

ならば、と。私は宝具という最高峰の神秘を以って、炎を霧散させた。

晴れた視界の向こうで、周囲に突き刺さっていた黒鍵の刃が全て折れているのを確認する。

そのまま視界を窓の外に向け、向かいのビルの屋上に犯人の姿を発見した。

手に持つ剣の刃に月光を反射させた代行者の姿が、そこに在る。

「竜炉開城（ヴォルティゲルン）」

断じて、赦さん。

沸き上がる激怒と共に、消し墨になった衣服を払い落とし、鎧を纏う。

ここ一年は廻すことのなかった竜炉を開放し、右手にエクスカリバーを握る。

最早、手加減などする気は無い。

「アルトリアさん、血が！！」

「騒ぐな、問題ない。」

さつき、私はこれから戦に赴く。幸い結界は無事のようだから、お前はこの部屋で待機しろ」

黒鍵という概念武装で貫かれた腕の傷は重い。だが、それは戦闘を回避する理由にはならない。

次いで放たれた第二射を全て外へ弾き返し、窓枠に脚をかけた。

「さつき、ついでにこの部屋の片付けを任す。」

帰ったら、勝利の美酒を飲むための場所を造って置け」

そい言い残し、魔力を全開にして跳んだ。

目標は、ビルの屋上でカソツクの裾を翻す女代行者、『弓』の、
首。

覚悟せよ。

貴様は、黒竜の逆鱗に触れたのだ。

月の光と、街の明かりに照らされたビルの屋上。

紺のカソックを身に纏い、清んだ空色の眼を鋭く細めた狩人の姿があった。

埋葬機関第七位、代行者、シエル。

未だ若輩ながら、聖堂教会の切り札ともいえる異端審問機関に名を連ねる猛者である。

「よいしょつと。」

じゃあ、さつさと準備しちやいましょうか。」

彼女は肩にかけていた皮製の鞆をコンクリートの上に降ろすと、その中から異形のスコープを取り出す。

元々それは、彼女のお気に入り狙撃銃に取り付けられていた物だった。

だがその大きさが災いして、世界でも殆ど唯一と言っているほどに厳しい銃規制を布くこの日本に本体は持ち込めない。

その代わりせめて 否、彼女にとっては、こちらこそが切り札足りえる武装である。

「さて、感度はどうですか？」

独り言を呟きながら、シエルは“両目で”スコープを覗き込んだ。そう、このスコープは銃のオプションとしては少々奇抜な姿をしている。

望遠スコープの隣に、まるで双眼鏡のように高感度のサーモカメラを併設した、彼女自慢のカスタム品である。

「良好ですね」

良好、といっても常人には写っているか解らないような感度。そもそも、現代の町は熱の塊といって差し支えない。その中から目的とする熱源を感知するなど、よほどの機器を使わない限り不可能なのだ。

「さて」

そこでシエルは、スコープを覗き込んだまま両目とスコープに魔力を通し、解像度と感知能を強化する。するとそれまで雑多だけだったスコープ越しの画像が見違えるほど鮮明になり、彼女は対象をハッキリと捉えた。

あくまで傾向としてだが、魔術師という者たちは近代文明を嫌う。故に、彼らの使う魔術も近代兵器の性能を大きく見誤った……場合によっては全く加味しない作りの事が多い。

どうやら今回もその通例に漏れなかったらしい。魔術による性能の底上げを受けたスコープは、対象の施した隠匿と魔力遮断の結界をすり抜けた。

「いきましようか」

魔術と近代兵器。そのどちらもが聖堂教会に身を置くものにとつて共に縁遠いモノ。

魔術にいたっては唾棄すべき技能であるに関わらず、その深部に住まう埋葬機関員であるシエルがこれらの技能併せ持つ。

だからこそ彼女は“切り札”なのだ。

『蛇』の苗床となったが故に身に宿ってしまった魔術の業。

興味が高じて終には礼装にまでしてしまった重火器とその周辺機

器の数々。

そして、

「すう……」

大きく息を吸い込み、両の手に挟みこんだ四対の黒鍵を翼の様に広げる。

キリキリと、己の骨格を弓に、筋肉を弦に見立てて矢を引き絞る。

そして、憎んでも憎み足りない『蛇』を滅するために刻み込んだ、教会の秘伝。

三つの技法は彼女の中で混ざり合い、昇華し、今の彼女を形作つた。

「ハアツ！」

埋葬機関の秘伝投法、鉄甲作用。その一投は、鉄骨すらも易々と貫く。

弾き出された八本の聖なる弾丸は真っ直ぐに、二人の少女に向けて放たれた。

第十二話

L·A·r·c·d·e·C·i·e·l

着弾を確認。

わたしの腕から放たれた四対八本の黒鍵は夜を裂き、ホテルの
室へと殺到した。

強化した目に映るのは、腕に刺さる黒剣の刃と燃え上がる少女の
身体。

空間限定結界と火葬式典の相乗。

炎を結界内のみで展開し、周囲への延焼を防ぎつつ対象を撃滅す
る。

魔力、熱がともに拡散しないために、周囲の空間は一瞬にして超
高温の焔に包まれる。

それに、耐えられる者はいない。

黒剣のとつさの判断で異端は被害を免れたが、それもこの次弾で
消え去る。

吸血鬼、弓塚さつき。貴女の魂に安らぎを。

「A !?」

Amen。そう言葉を紡ごうとして、絶句した。

室内で恐るべき密度を誇る風が突然に巻き起こり、火葬式典の炎を掻き散らしたのだ。

「バカな……」

「なんですか、あの馬鹿げた概念武装は まさか!?」

目の前の不可思議な事象に、ロアから植えつけられた知識が即座に解を返す。

多量の魔力を込めた炎を掻き消すことの出来る嵐。

それをシングルアクションで発動させる程の概念武装ならば、もうそれは宝具の領域だ。

「く、黒剣の保有する宝具はひとつだけではなかったのですか」

炎の中から現れた裸身の彼女は、一切の武装を纏っていないかった。ならば、その身にこそ宝具を内包しているのだろう。

宝具を保有する家系は、ゴッズホルダー魔術協会にて執行者を務める伝説保菌者が有名。

本人に会ったことはもちろん無いが、どう考えても目の前の黒剣がその者だとは思えない。

「厄介なことになりましたね」

両手に装填した黒鍵にさらに魔力を込める。
魔力が迸る。

膨張した黒鍵八本の一点集中ならば、あの風の鎧を貫けるはず。

「~~~~ツツ、ハアアッ!!」

乾坤一擲。打ち放つ。

黒剣の眼前、風が巻いていると思われる位置にて収束するよう調整した。

これで、終わり……

「な　　嘘でしょう。」

「いったい何者ですか、彼女は」

だが、わたしの予測は覆された。

射出した黒鍵はただの一本も彼女を捉えられず、赫黒の、巨大な刃によって全て弾かれた。

「　　っ」

ガリ、と唇を噛む。

間違いない。あれは着色され、物質界に影響を及ぼすまでになった超高密度の魔力。

発熱によって刃を赫く染めた黒い大剣だ。

「なんて、出鱈目……」

その出鱈目が、窓枠から身を乗り出し跳んだ。

いつの間にか魔力を秘めた黒い鎧を身に纏い、彼女は黒い剣を肩に構えて飛翔する。

魔力をアフターバーナーのように足下から噴出して、わたしに迫った。

「ハアッ！」

「　　っ、あっ………！」

激痛が肩を奔った。

盾代わりに展開した四本の黒鍵を意図も容易く蹴散らし、それを支えていた肩を砕かれる。

恐るべき、剣の技量。

新たな黒鍵に半端な魔力しか注がず、わざと砕かせて緩衝材代わりにした。

全身の力を全て抜いて力を逃がし、同時に後ろに跳びまですた。さらに、相手の左腕は初撃で破壊した筈。

それなのに、右腕一本で放たれた袈裟斬りは途轍もない貫通力をもって右肩の骨を砕いたのだ。

「バケモノですか……」

屋上に降り立った黒い騎士と対峙し、戦慄に震える。

対峙して、彼女が人間ではないのはすぐに解った。だが、それにしては途轍もない威圧感は一切何なのか。

目を覆う黒いバイザーのせいで彼女の視線を伺うことは出来ないが、それがかえって彼女の不気味さを際立たせる。

「一応訊いておく。貴様が『弓』で相違ないな？」

「ええ、そうですよ。」

「ついでに自己紹介もしましょうか？ アルトリア・セイバーさん。」

肩を押さえていた左手を放し、再び両手に黒鍵を挟む。

負傷は、世界修正による秩序回復によって、既に再生した。戦闘に支障はない。

「すぐに殺すのだ、その必要はない。
それよりも　　ほう、肩を砕いたと思ったが、もう回復したの
か」

「生憎と、死神さんに嫌われてちゃってますからね」

「そうか。」

ならばその身体を二つに別けても死神が訪れないか、検分しよう

黒剣もまた、黒い剣を下段に構える。

刀身に紅で刻まれた円環の紋様と、寒気のするような刃の冴え。
恐らく、あれもまた何らかの概念武装だろう。

「その前に、こちらもひとつ問います。

アルトリア・セイバー！。

貴女の確保した吸血鬼を、大人しく聖堂教会に引き渡す気はあり
ませんか？」

「その吸血鬼は我が従者としたのだ。

よって、それを易々と売り渡す主人はいない」

問いに、黒剣は事の他低い声で答えた。

そしてこれ以上の問答は無用と、駆け出す。

「そうですか、解りました。

やはり、交渉は決裂ですね」

同時に、己が描いた最悪のシナリオが脳裏を過ぎる。

やはりわたしの予測は当たっていた。

目の前の彼女は、吸血鬼を狩るのではなく己の手下にしていたの

だ。

そんな危険因子は異端と同義。よって、此処で抹消すべきである。

「では、」

とはいえ、まともに戦ったのでは勝ち目はないだろう。

もちろん、既に策は立ててある。

あとは相手が乗ってくるかどうか、ですね。

「まずは異端の抹消を優先させて頂きます」

わたしは偽りの言葉とともに、後方へ思い切り跳躍した。

「は？」

「待て！」

一瞬、呆気にとられたように口を開いた黒剣の姿を捉える。

まあ、驚くのも無理はありません。

わたしの落下地点と思われる場所は既に屋上ではなく、ビルとビルの間なのだから。

「チィ、舐めるな！」

焦る声が聞こえる。

夜風を背中で感じながら、適当な足場に両足の踵から着地した。

さて　　策は、成った。

ヒュウと風を切り、黒剣の身体が上方に出現する。

ここは四階の窓枠。

六階建ての屋上から身を投げた彼女との距離は、ベスト。

「 Amen! 」

左手で身体を支え、右手から少数に全力を傾けた三本の黒鍵を放つ。

だが、それでも黒剣を捕らえられない。

彼女は落下中の不安定な姿勢のまま三本の黒鍵を纏めて薙ぎ払い、さらに縦に一回転して斬りかかってくる。

その、ビルの壁ごと窓枠を粉碎する黒竜の爪を、窓ガラスを突き破って退くことで回避。

なるほど、あの高い威力は瞬間的な魔力放出によって齎されたものですか。

「まあ、解ったところでどうにかなるものではないですね」

ガラスの破片など無視。鳴り響く警報音は黙殺。

わたしは即座に床を蹴って外へと躍り出た。

「成功、です」

眼下に見える路地に黒剣を誘い込んだことを確認し、安堵する。

さあこれで、上方というアドバンテージを獲得しました。

真上は、万人共通の死角。天から降り注ぐ刃の恐ろしさを味あわせてあげます！

「蜂の巣に、なりなさい!!」

地面に着地した黒剣目掛けて、刃の雨を降らせる。
不利を悟って路地を駆け抜け抜けようとする彼女を追って、剣を撃つ。
それは鉄甲作用を以って放つ剣の絨毯爆撃。

魔力をもって編んだ刃は着弾の瞬間に弾ける様に設定した。
その中に高い硬度を保つようにしたものも混ぜる。
吸血鬼を相手取るときは、摂理による崩壊を優先するために決して行わない技法。

反面、彼女のような存在を相手にするならこの方が効果がある。

「おっと、させません！」

換気扇の吹き出し口を蹴り、黒剣の斜め上に飛ぶ。
右手から撃ち出した黒鍵が彼女が足場にしようとしたエアコンの
室外機を砕き、足場を奪った。

この位置を保持し続ける限り、彼女の剣撃は届かない。
だから、彼女がわたしと同じ位相に身を置くことを赦さなければ、
わたしの勝利は揺るがない。

まだまだ、カソックの内に仕込んだ黒鍵の数には余裕があるのだ
から。

「それっ！」

一方的な攻防は尚も続く。
数本を一組にして、脳内に描くロジックをトレースするように黒
鍵を放つ。

第一、第二

弾け、乱回転する黒鍵。

第三

鋭く地面を抉る鋭利な刃。

第四、第五、第六

立て続けに牽制を放ち、周囲の足場を悉く砕く。
第七

「おっと！」

投擲を止め、回避する。

刹那前にわたしが居た場所を両断する、赫い魔力の刃。
だが、わたしの黒鍵を躲しながらでは狙いが粗い。

「喰らいなさい

埋葬・大終節！」

赫黒の刃にカウンターを取る形で、上空から八本の剣を落とす。
そのうち、中央の三本には、

「主よ、この不浄を清めたまえ！」

「なっ……く、あぁっ!？」

火葬式典が付加してある。

他に比べて数が少ない虎の子の大盤振る舞い。
剣で弾いた彼女の身体を、炎が翳る。

「ッ、く！」

だが、その炎のど真ん中を黒剣は貫いてきた。
なんとという不覚。

自分で巻き起こした炎で相手を見失うとは。
逆風に切り上げられた黒い刃が左の鎖骨を断ち、一時的に上方のアドバンテージを失う。

「逃がさん……」

跳躍の最高点から、剣の振り下ろしによる加速を加えた唐竹。鉄兜ごと叩き斬るように振るわれるその一閃は、真に兜割り（ヘルムブレイカー）。喰らえば、終わる。

「こ、のおお〜っ！！」

緊急手段として、黒鍵に目一杯の魔力を叩き込んで爆散させた。その際の衝撃波で、バランスの崩れた身体をズラす。当然、砕けた刃によって右腕がズタズタになるが、構っては居られない。

『準備は、いいですね？』

前髪数センチのところを通過した黒い刃がそのまま路面に激突し、コンクリートが縦横にヒビ割れる。改めて、その威力に戦慄を覚えた。やはり黒鍵だけでは仕留めきれない。ならば、アレを使つての正面突破こそが唯一の突破口だろう。

『まったく。』

あの殺人狂の思惑通りなのが気に入りませんが、しょうがないです
ね』

カソツクの中に、黒鍵とは違い霊体として所持している武装に意識を飛ばす。

あとは、タイミングだけ。

「く」

窓枠に指をかけ、辛うじて上方をキープしたわたしに、黒剣の赫刃が再び襲い掛かる。

もちろんわたしは躲して、代わりに黒鍵を返す。

どうやら、黒剣もお互いに手詰まりという事を理解したらしい。

今までとは明らかに違う動きで、一気に駆け抜け出す。

「何を考えているのかは知りませんが、逃がしませんよ」

それを、わたしも黒鍵を放ちながら追う。

上方のこちらからは、彼女の動きは丸見えなのだ。

程なくして前方に別のビルが出現し、壁となった。路地はそこで左右に分かれているが……

「やはり、仕掛けて来ますね」

黒剣の左手が、腰鎧の裏に滑り込む。同時に彼女は反転し、刹那遅れて発砲。

螺旋を描いた音速の弾丸が、銀の軌跡を残して夜闇を穿つ。

「銀の弾丸？」

確かに吸血鬼には有効ですが、わたしにはただの銃弾です。

そんなものでわたしを倒せるとでも？」

彼女の左手には、バレルの下にレーザーサイトを装着した、銀色

の銃が握られていた。

特徴的なデザインと、高い弾速。間違いない。あの銃はベルギー、FN社製の自動拳銃『Five-seven』

人体破壊性が高い、弾頭が円錐状の特殊な弾丸『5・7mm x 28弾』を発射するモデルだ。

しかも……

「弾丸だけでなく、銃身までも祝福儀礼済み　　そんなもの、
一体何処で」

FN社には法王庁の資金が入っている。あそこの研究チームは、主に騎士団に拳銃を卸していたはず。

ならばそこから、か？

聖務に失敗した騎士や代行者の武器が、ブラックマーケットに流れることは珍しくない。

「くっ、」

一発、二発、三発……。断続的に引き金が引かれる。
流石に、早い。初速でマッハ2を超える弾速。

慣れていないのか、黒剣の甘い狙いに助けられていると言っている。

「しまっ

だからこそ、気付かなかった。

発砲は全て囷。本命は、反転と同時に取り出され、銃とは逆の手に握られた円筒。

バイザーで視界を覆っている段階で、ソレを使用する可能性に気付くべきだった。

「目を……」

わたしと黒剣の間に、煤けた様な色の円筒が放り投げられる。すでにその頭部にあったはずのピンは外され、先程の発砲で時間も稼がれた。

打ち落とすのは、もう不可能

「~~~~ツツ」

路地を真っ白に染め上げる光の奔流。

閃光弾の放つ光が、夜の闇もろともに視界を蹂躪する。

腕が辛うじて間に合い、直撃こそ避けたものの、黒鍵による牽制など到底行えなかった。

だから、黒剣は数秒の猶予を得ることになる。

「捉えたぞ……」

光に染まった視界の先で、剣の切っ先をわたしに向けた黒剣の姿があった。

「くう、」

その剣先に、風が収束するのが解る。

直感で解った。あれは、全てをなぎ払う大砲だ。

もはやどんなに高速で動いても、彼女はその照準を違えることはないだろう。

なら、一か八かに賭ける。

『準備はいいですね、セブン』

足場から向かいの壁へ。

そこからさらに向かいのビルの出っ張った部分に飛び移り、全身のバネを総動員し、黒剣目掛けて思い切り飛ぶ。

呼びかけに答え、わたしの両腕と背中に刻んだ聖痕が光を放ち、腕の中に巨大な武器が出現する。

それは、一角馬の角を本体とする白いパイルバンカー。

「第七聖典……」

「風よ、轆き碎け……」

その無機質な金属の手応えを確認し、全身の魔力を叩き込みと同時、ハンマーを引いて杭を挽き絞る。

黒剣が剣を下段に引き、わたしに狙いを定めた。

甲高い音を鳴らし、わたしと黒剣、双方の武装に魔力が装填されていく。

衝突まで、あと数瞬

「コード・スクエア！！」

「風王鉄槌（ストライク・エア）！！」

それは教会より貸し出された、一角獣の角に改造に改造を重ねた
転生批判の概念武装。

もとより霊的な存在に対し多大な威力を誇る聖典を、物理的威
力を持つまでに昇華した聖杭。

それが、荒れ狂う嵐と衝突し削りあう。

強力な神秘同士の殺し合いの余波は周囲のビルにまで及び、鋭
利な刃となって全てを切り刻む。

「く……あ……」

状態は拮抗している。

黒剣の放った狂風は未だ霧散せず、腕の中にある第七聖典は未だ
杭を放出し切れずにミシミシと音を立てる。

その激突の範疇に身を置くわたしの身体は、至る所を魔力によ
つて翳られ、風によって切裂かれる。

だがそれでも、眼は見開いたままぶつかり合い静止している杭を
睨む。

「　　っ、っ」

突然、聖杭の先がわずかにぶれた。
このままでは、押し負ける。

「ああああー！ー！ー！ー！ー！」

負けるわけにはいかない。決意を固め、賭けに出た。

第七聖典を左手一本で支えながら、右手を懐に潜らせる。

ただの黒鍵では足りない。

虎の子をその手に持てるだけ掴み、魔力を叩き込んでその全てを拮抗点に投げ込む。

「　　火葬式典・断頭！」

「なっ！？」

四本の黒鍵に宿した火葬式典の強制発動。拮抗点の嵐は一瞬にして炎の竜巻へと変わり、闇を照らし上げる。

紅蓮に染まった視界の中で、パイルバンカーのハンマーを、再度引いた。

「　　あああああああー！ー！ー！ー！」

刹那、炎と風が遂にその猛威をわたしに向けた。

炎風の先兵が彼女を飲み込み、巻き込まれた先ほどの黒鍵の欠片が肉を裂く。

切られた肉が焼ける。

傷から蒸気のように噴出した血液が風を紅く染め上げる。

「この……さつさと、貫きなさい!!」

気が触れそうな激痛を訴える痛覚神経を遮断し、意識を炎の先へ。人間など一瞬で轢殺する狂風の主軍。

それがわたしを蹂躪するよりも一瞬早く、再びパイルバンカーの銃爪が弾く。

「第七聖典、カルヴァリア・デスピアー!!」

宝具と、宝具級の概念武装が削りあつ拮抗点にて、解放を留めて再度撃ち直す。

それは僅かでもタイミングを測り損なえば間違えば、身体が千の破片になって飛び散りかねない愚行中の愚行。

「正気か!？」

その賭けに、わたしは勝った。

黒剣の口から漏れる驚愕の声。それすらも貫く輝き。

再び解放される聖典。

先に放たれたものの残滓と合わせ、単純に計算すれば二倍の威力となった流星は、嵐のど真ん中をぶち抜いた。

聖典を握るわたしの身体は黒剣の放った風の宝具を貫き、聖杭が彼女の左胸を狙う。

「ッ！」

だが、不発。人の域に無い反応速度が、彼女を救った。プレートメイルなど易々と貫く切っ先は対象を捉えそこね、その鎧を紙の様に引き裂いてビルの壁に突き刺さる。

「逃がしません！」

毛細血管が断ち切れ、視界が朱に染まる。感覚などとうにない。

沸騰する頭。それでも信仰心が身体を支える。戦意が、膝を振り上げる。

「せつ、やあつー！！」

ごきん、と鈍い感触が身体を奔る。ばきり、とナニかが割れる音が響く。

第七聖典を支点にして身体を回転。

手首が砕け、それを代償としてわたしの膝がついに黒剣の顔面を捉えた。

彼女が顔面に装備したバイザーを叩き割り、金属板で補強された膝が顎に突き刺さる。

「ぐ、がつ」

渾身の力で繰り出した打ち下ろしの膝蹴りを黒剣はまともに浴び、壁に後頭部を強かに打ちつけた。

その衝撃で、第七聖典によって縦横に裂け目の刻まれた廃ビルの壁が崩壊。

支えを失った彼女の身体はビル内に溜まった埃を巻き上げながら、内部深くまで転がり込んだ。

「やつ、た……」

激痛が、身体を貫く。

だがそれよりも早く、それよりも強烈に、わたしの身体を歓喜が突き抜けた。

凄絶なる英雄

「ゼツ、ゼツ、ゼツ……」

心臓は早鐘のように鳴り響き、全身の細胞が酸素を寄せせと急ぎ立てる。

あまりにもギリギリの攻防に、わたしは思わず膝をついた。

「ぜえ、ぜえ……」

不死と成ったこの身体も、全身に蓄積した乳酸による筋肉の疲労感と、酸素欠乏による脳の機能停止だけは逃れ得ることは出来ない。長時間の無呼吸に喘ぐ身体を宥めながら、それでも眼はビル内の闇を睨みつける。

「はっ、はあーっ」

もしあと数分でも戦闘が長引いていたら、そう思うとゾッとする。間断の無い移動と投擲。

そのどちらかを止めるということは、あのバケモノを相手にする上では致命的な隙になる。

現に、彼女が最後が閃光弾によって、わたしは途轍もなく危険な賭けに挑まされたのだ。

「ふう」

長く息を吐き、ひと息に大きく吸う事を繰り返す。

意識の半分を暗闇の中にいる筈の敵に向けながら、もう半分を身

体の中に深く染み込ませ、隅々まで行き渡らせる。

過剰な吸気を繰り返す肺を鎮め、狂ったように唸り続ける鼓動を
トップギアに調整した。

「よし」

「

戦闘続行準備、完了。

カソツクの中に忍ばせた黒鍵の本数を確認し、両手で第七聖典を
持ち上げ、構える。

黒剣がこれくらいで倒せるような相手ならば、ここまで苦労はし
ない。

目の前の暗闇の中で彼女もまた息を整え、殺意に眼をギラつかせ
ているはず。

最も警戒すべきは、いまだ見せぬ黒い極光宝具。

対軍レベルにあると思われるそれを使わせないために、わたしは
闇の中に飛び込もうとして、

ぞく……

唐突に、氷竜の吐息が背中に突き刺さり足を止めた。

第十三話
凄絶なる英雄

「よくも、やってくれたな。もう、赦さんぞ、」

眼前の闇に、黄金の瞳を憤怒で満たした貌が浮かび上がる。

膝に強打された貌を押さえ、その指の隙間から除く眼は、これまでとは比べることも馬鹿馬鹿しいほどの殺意で輝く。

黒剣の身体では、正視することを躊躇わせるほどの狂気を孕んだ、紅い凶脈が拍動していた。

死ぬぞ

背筋を、汗が伝う。
アレは、まずい。

死ぬぞ

喉が、渴く。

本能に設置される警戒警報がそれを敏感に感じ取り、最大音量でアラームを掻き鳴らす。

死ぬぞ死ぬぞ死ヌゾ死ぬぞ死ヌゾ死ぬゾ逃ゲるニゲロニゲる逃げ
るアレとはあれとは

あの黒い騎士とは黒い悪魔とは戦うな対峙するな正面に立つな即
座に迅速に最

速で退避せよ撤退せよ回避せよ離脱せよ拒否拒絶破棄後退撤収否
無理無謀無策

命あるものに等しく訪れる死の安寧など生温い。
その者の遺した痕跡、偉業、生きた意味、その全てを滅し、殺し
尽くす。

全ての願いを駆逐し、全ての望みを蹂躪し、全ての希望を滅却す
る。

破壊を是とし、災害を是とし、病魔を是とし、死を高らかに肯定
する。

黒剣の身を内側から喰い破り、終に顕在を果たした凶気の源泉。
紅い凶脈が、もう、逃がさぬと静かに告げていた

「アアあああああー！ーッ！ーッ！」

心の咆哮とともに、足下のコンクリートが爆ぜた。

床に打ちつけた両脚から全身に奔る痺れが、戦う意志を叩き起こ
す。

震える身体を、萎えそうになる精神を、神の使徒として誇りで捻
じ伏せる。

負ければ死滅するなど、解り切った事を言うな。

全能なる神の行いを代行する者であるわたしに、そんな余計な事
を考える余裕はない。

異端を滅却する事以外を、考える権限は与えられていない。

「せあつ！」

纏わり付く闇を打ち抜くように、黒鍵を打ち放つ。

ゴウと音を立てて空気を切り裂く摂理の鍵。

しかしそれらが対象を捉えることは無く、黒剣が地面と水平に振るった黒い刃によって“切断”された。

「　　ッ!？」

その異常に、息を飲む。

石壁を易々と貫く黒鍵を、空中で切断するのにどれほどの刃の冴えと神秘が必要かなど、考えるだけ馬鹿馬鹿しい。

だがその馬鹿馬鹿しい出来事が、今、目の前で展開された。

「なるほど……」

湧き上がる動揺を噛み殺す。いまだ恐怖と震えは身体に残る。

だがそれでも、神の使徒に撤退は無い。

異端に敗北することは死と同義。一度でも膝を屈した戦士は、決して純血を保てない。

「それが、貴女の剣の真の姿ですか」

黒い刃、黒い鍔、黒い柄。その全体に浮かぶ赤い文様。

なにも変わっていない。

しいて言えば、紅の文様から放たれる光量が増しているくらいか。

だがその刀身が、いや、剣そのものの在り方がまるで違う。

刃の漆黒は人々の絶望を束ねたか様に闇が満ち、それ故に美しい。

わたしは直感した。彼女の繰る風も、まとう黒霧も宝具には違いない。

だが彼女が最も頼りとし、わたしが最も恐れるべきはそれらではない。あの、剣だ。

はたして、その銘は

「エクスカリバー、と言えば教会に属す貴様が知らぬ道理はあるまい。

これはいわばその影。かの聖剣と同一にして異種。

救世を謳う神の子の教えに汚された怒りを以って、此処に顕在した死滅の聖剣である」

彼女の口から告げられた魔剣の真名に、わたしは驚愕した。

それは主の死と共に泉に還された物であるが故に、その主は過去現在未来に於いて唯一人。

尊き聖剣の主は、かつてのブリテンの王以外に在り得ない。

「エクスカリバー……」

アーサー王、アルトリウス・ペンドラゴンの宝具。星の創りし神造兵器……」

馬鹿な、と否定できない。

その威容。その存在感。

あの剣が伝説の聖剣で無いとするには、あの剣は余りにも現実か

ら逸脱しすぎていた。

だが、ならばあの禍々しさは何だ？

「馬鹿な。その剣がエクスカリバーだとするならば、余りにも穢れすぎています。」

ヒトの夢を束ねたのなら、それほど汚れる筈は無い」

精一杯の虚勢を張る。震えそうになる脚を必死に御す。

認めない。認められない。

だがそんなちっぽけな理性など蹴飛ばして、本能はアレは本物だと告げている。

「同一にして異種、と言ったはずだ。」

この剣は、私と同じ。

伝説に在る尊き存在の、隠されたもうひとつの面を描き出したものの

黒剣が、その目に深遠を称えて魔剣をわたしに突きつける。

「さあ、刮目せよ。そして思い出せ。」

ヒトの夢とは、何か。ヒトの欲とは、何か。ヒトの業とは、何か
「！」

その一言一言が、わたしの理性を打ちのめす。

ああそうだ。ヒトの夢は、即ちこうしたい、こう成りたいという欲望に他ならない。

その持ち主が例え底無し善人だったとしても、その願いは紛れも無く本人のエゴなのだ。

願いの色は、十人十色。千差万別。

希望、願望、欲望、絶望。
宿願、本懐、本意、切望。

それらを束ねれば、剣の色は決まってくる。光を束ね黄金と成すか、

「ヒトの闇を、さながら絵の具のように塗り重ね暗黒と成すか、ですか」

「ふん。やはり解っているではないか、弓。」

故にこの剣もまた、ヒトの夢を束ねし聖剣なのだ」

わたしの返答に満足したのか、黒剣は静かに剣を下す。
そして僅かに腕を上げた無形の構えを取り、

「遊びは終わりだ。」

貴様を、我が好敵手と認めよう」

第二幕の、開演を告げた。

/
/
/

青白い憤怒が、魂を焼く。咆哮する竜炉は猛り廻り、私の身体を

黒い霧で包み隠す。

ランスロットの狂気が、アンリマユの悪性が、凶脈となって拍動する。

「遊びは終わりだ。

貴様を、我が好敵手と認めよう」

だが、その全てを歓喜が支配した。

この者は、紛れも無い強者。奇襲しかできぬ蛮夫では断じてない。故に、全力を以って打倒すると決めた。

「喜べ、一時戯れてやる」

弓が構えたのを確認し、地面を蹴り飛ばした。

「ハアアッ！」

魔剣の刃は弓の展開した黒鍵の盾と衝突し、一撃で粉碎する。無駄だ。

その程度の神秘では、この剣は防ぐことなど出来はしない。

「セツ、」

背で、魔力が滾る。

腰で、魔力が渦を巻く。

腕を、魔力が突き抜ける。

竜炉から溢れた魔力が絶えず身体を満たし、暴れる。

アドレナリンが暴走し、私は脳内麻薬に犯される。

「このっ

」

瞬間的に魔力を脚に集め、弓が後方へと跳躍すした。

同時に放たれる四本の黒鍵。そのどれもが必殺を秘め、私の急所へと狙いを定めている。

だが、温い。

「卑王鉄槌（ヴォーティガン）」

瞬時に剣を逆手に持ち代え、黒霧を巻きつけて一息に振り抜いた。長大な刃が赫熱し、熱した鋼の如き光芒を描き出す。だが赫い横薙ぎは弓を捕らえることが出来ず、ビルの壁を削るのみ。

弓め、慣れてきたか？ だがな……

「そこか

」

この宝具による斬撃の最大の利点は、連射性にこそある。

消費魔力量の割に、威力で魔剣に大きく劣る卑王の刃。

だが魔力源を黒霧という形で常に身体に纏わり付かせるが故に、魔剣よりも遥かに早く再装填が可能。

「散れ！」

即座に剣を順手に持ち直し、赫刃を以って横に広い左右の切り上げを断続的に放射する。

だがやはり弓は紛れも無い強者。歴戦の猛者。
放たれた二筋の赫刃が中空で交錯したその交点の真上へと彼女は
飛び込み、躲した。

「だが、チエツクだ。捉えたぞ……」

赫刃によって描かれた、横に長い斬線。
その左右に逃げ場は無く、バックステップで身体が浮いていたた
めに沈み込む事も不可能。
完全に、詰んだ。

スパークス・ライナー

両足に魔力を集め、剣を構えて踏み切る。
赫刃の三連撃によって空間を悉く削られ、他の逃げ場を失った弓
が、私の望む位置に身体を曝す。
その一点を狙って突き出された片手突きは、黒い穿光と成って彼
女へと到達する。

「ぐ、あああーっ！！」

絶叫が、ビル内に木霊する。

己の危機を察知して展開された黒鍵の陣を貫き、僅かに軌道がそ
れた刃は弓の右の二の腕を直撃。

そのままの勢いで、右腕の肘から先を彼女から引き千切った。

「いぐ……うううーッッ！」

しかしその痛覚神経を劈く猛痛を、弓は意志の力で噛み堪え、彼女の右腕と共に着地した私へと肉薄。

聖杭の先が床のコンクリートを削り、火花が散った。

弓が、無くなった右腕の代わりに左腕と膝でパイルバンカーを固定し、私の胸骨の中央をポイントする。

マズイと思った瞬間。彼女の指が、引き金を、引いた。

「く、ああーッ」

刹那の攻防は、僅かな差で私の左腕が勝り、横殴りに殴られた聖杭は空しく空を裂く。

間近で訊いた聖典の轟きに身が震え、確かに、この武器は私にとっても必殺だと認識した。

確か、第七聖典の本質は魂砕き。それは私とて例外ではない。

「ハアッ」

ならば、殺される前に殺すまで。

払う手に連携して弓の鳩尾を蹴り上げ、その身体を浮かす。

もともと不安定な固定しか出来ていなかったパイルバンカーは蹴りの衝撃で彼女の手から離れ、その身体が飛ぶ。

落下の最中にもかかわらず彼女は、気配のみで剣閃を捉え、左手を床に叩きつけて剣の軌道から脱出。

さらに受身の要領で身体を浮かし、同足で円を描きくことで勢いつけて上半身を起こす。

まさに強者。まさに英雄。

古よりこの時代に呼ばれ、この時代に生きる英雄と刃を交える幸運に魂が猛り狂う。

「だが、甘い！」

斬撃の際に前足に移した体重を瞬時に後ろ足に乗せ代え、大股で歩くように跳ぶ。

「がつー！」

股関節を番にして開かれた竜の等。その上顎が、起き上がるうとするシエルの顔面を捉えた。

彼女の後ろ頭部が、踏みつけられた衝撃で床に埋まる。頭蓋に浮く脳が盛大に振られ、容赦なく骨壁に叩きつけられる。

踵での踏み付けは脳震盪を通り越し、脳出血を誘発する殺し技。それでも彼女は意識を手放さず、無事な左手を具足に叩きつけた。

「人の身でありながらこの私と渡り合ったその技量、その意思、見事としか言い様なし。」

だがこれも一騎打ちの作法なれば、ここで朽ちよ。貴様の名は、終生まで記憶に留め置く」

その折れぬ戦意を評し、止めの口上に、最高の賞賛を贈る。

そして私は、エクスカリバーの刃で彼女の心臓を、刺し貫いた。

不死者へ贈るコトバ

シン、と辺りが静まり返る。

彼女と、血の泉に伏したもうひとりの女性から湯気のように立ち上る魔力がそこで超絶の戦闘があった事を告げる。

死闘……ここで行われた戦闘は、そう呼ぶには少し足りない。

戦闘は殆ど一方的だった。

英霊、その中でも特段の強さを誇る騎士の王、アルトリア。

黒き願いに身を浸し、闘争において更なる特化を果たした彼女を相手取るのには、たとえ埋葬機関の『弓』といえども荷が重い。

シエルはアルトリアとの闘争に敗れ、自らより流れ出た血潮の海に伏していた。

「は　　ふう……」

いまだ鳴り響く己の鼓動をそのままに、アルトリアは剣を抜きシエルに背を向けた。

彼女を胸を満たすのは、空虚。騒がしかった祭りの後のような、虚ろな感情。

高鳴り、唸った感情が急に沈静化する。

シエルという、己が殺した強者の名をその心に刻み込みながら、彼女は己の従者が待つ部屋へと歩き出す。

争いは終わった。この心地よい余韻を穢す、無粋な狩りを、今更行う必要などない。

今宵は上等なワインでも傾けながら勝利に酔い、眠るとしよう。

そう思い、彼女は背を向けた。

「ぐ…、がつ……」

だから、傷を負ったのだ。慢心の代償として。
彼女は見誤ったのだ。シエルから噴出すそれを、死骸より立ち昇る魔力の『残滓』であると。

第十四話

不死者へ贈るコトバ

黒鍵が肉を裂く。
振り向く動作すら、遅い。

「馬鹿な、何故……」

飛来した黒鍵は三本。

風切り音は無し。一切の無音、一切の無気配、一切の無殺意。

「何故生きている、シエル!!」

私の感知の悉くをすり抜けた聖なる刃は耳を霞め、頸椎を護る黒鎧に弾かれ、肩当てをすり抜けて肩甲骨へと突き刺さる。

シエルの投擲は的確に延髄、心臓、肝臓の三点を狙っていた。致命傷を避けられたのは、直感に従い無意識に動いた左足の功績でしかない。

「言ったはずです。わたしは死神に嫌われていると」

肩甲骨を抉った刃を投げ捨て、剣を構え直す。私の視線の先には、渾身の投擲を終えて残心するシエルの姿があった。

彼女には私が奪ったはずの右腕が在り、穿ったはずの胸の穴は無く、全身に刻んだはずの無数の傷も無い。

彼女は完全なる姿で、そこに在った。

「わたしは死なないんじゃない、死ねないんですよ。

何度殺されようと、『世界』は決してわたしの死を認めない。

気が狂いそうな痛みと引き換えに、『世界』は矛盾を修正するためにわたしを再生する。

忌まわしき『蛇』の魂が、輪廻する限り!!」

ゴウ、と気風が舞った。

どこまでも澄み切ったシエルの魔力が、嵐のように荒れ狂う。

「そちらこそ、何処へ行く気ですか。
決着はまだの筈でしょう？ さあ、さっさと剣を構えたらどうで
すか、異端！」

彼女のボロ布同然の修道服を剥ぎ捨てる。露になった肩口で、彼
女の意味に呼応するかのように白い翼の刻印が輝いた。

彼女は意思を持つかのように飛来したパイルバンカーを回収する
と、再び黒鍵を万全に構える。

「さあ、戦闘再開です」

『世界』とは、この星に生きる全人類の無意識の総和だという。
冬木の聖杯がそうであるように、強大な魔力は万能の釜足りえる
ならば、全人類の余剰魔力の総和もまた莫大な魔力を充填する万能
の存在。

一切の矛盾を許容せぬ『世界』に“矛盾”と判断させる事自体が
容易なことではない。

だがもしそれを成せば、『世界』を形作る人類が滅びぬ限り、
その矛盾を晴らさぬ限り、彼女は生き続ける。彼女の意思とは無関
係に。

世界修正による不死。それは、なんという悲劇か。

「……よかろう」

生は、死によって定義される。

死を奪われることは、生きる意味を奪われるということ。
死なき生は、もはや生ではないのだ。

「来い、シエル」

彼女の悲壮な心の叫びに応じ、再び剣を構えた。

望まぬままにそれを手に入れた彼女。あの若い心はどれほどの屈辱を味わい、あの清んだ眼はどれほどの地獄を眼にしたのか。

彼女の明かした異能のあり方には、同情の余地は十分にある。

「我が全身全霊を以って、貴様を打倒しよう！！」

だが、己が強者と認める者に挑まれた以上、手加減という選択は存在しない。

一騎打ちにおいては、手を抜くことこそ不義。相手を殺さぬは、最大の侮辱。

「ゼロ！ ドウロア！ セット！ キャトル！！」

「竜 炉 開 城（ヴォルティゲルン）、 卑 王 鉄 槌
（ヴォーティガン）」

飛来する十数本の聖なる弾丸を、赫刃の逆胴をもって薙ぎ払う。
一騎打ちに勝ち逃げはない。敗者は血の海に沈み、勝者は誉れを胸に敗者の命を背負う。

相手に情けという侮辱を与えれば、それに見合った責任を要求される。

「風よ、猛り狂え」

シエルが次弾を放つよりも早く、魔力を以って飛ぶ。
彼女の上空に身を曝し、ようやく収束した風王を再び撃ち放つ。

「風王鉄槌（ストライク・エア）」

一騎打ちの敗者は既に死人。その時計は、勝者を殺めるまで動かない。

だからこそ、殺す。

最大の敬意と最大の殺意を以って、徹頭徹尾殺し尽くすのが、一騎打ちの作法である。

「く、あああー！」

私と、シエルの戦力差は歴然。
実力。経験。武装。全てにおいて私はシエルを上回っている。
幾度戦おうとも、彼女が私に勝つ見込みなどない。

だが、彼女は死なない。

彼女は『不死』である限り勝機がある。

そして彼女には戦う意思がある。

「うん？　ハ、ユニテリウスめ、逝ったか」

不意にプツンという小さな音が心中に響き、私が魔力を吸い上げていたラインの一本が切れたことを告げる。

どうやら私の過剰な搾取に耐え切れぬ者が出始めたらしい。これは由々しき事態だが……

「　　主よ、この不浄を清めたまえ！」

生憎と、出し惜しみをしていい相手ではない。

狂風の中心で、左腕を失った狩人が炎の式典を撃ち放った。

着地と同時にそれを回避し、一息に前へ。

選んだ方法は、共に刺突。シエルが指に挟んだ三本の黒鍵と、私の魔剣の切っ先が交錯する。

「く　　」

「覆え」

勝負は痛み分け。シエルの黒鍵は砕けたが、私の進撃も止まった。ならば次。私は自身を覆う黒霧をそのまま彼女に叩きつける。

物質化するまでに密度を高めた魔力が彼女の眼前を覆い、視界を塞ぐ。

「ぐ、あ……」

その霧のど真ん中を左手でぶち抜いた。

ようやく回復した腕でシエルの首を掴み、右腕で魔剣を振り上げ

「墮ちろ！」

叩き斬る、だけでは温い。刃を心臓まで食い込ませ、そこで止める。

蘇生を待ち、その瞬間に再び殺す。

手首の捻りによって魔剣の切っ先が回転し、シエルの心臓を抉る。

狙いは断続的な死傷による精神の崩壊。

魂を壊し、ただ生きているだけの人形に変える……いや、無理だ。この者に限って、精神を止めることなどありえない。

「はぁッ！！」

腕の再生を待たず、胸から鮮血を噴出しながらもシエルは黒鍵を構え、撃ち放つ。

それを打ち落とした時は既に、シエルの姿はそこに無い。

一瞬の踏み込み、一瞬の武装。やっと回復の始まり、筋肉が剥き出しになった腕で彼女は第七聖典を支える。

「コード……」

「遅い！」

聖典に刃を立て、叩き落す。

杭の先は地面に突き立ち、魔剣に押えられる形で両者が膠着する。

「ひとつ、訊こうか。シエル」

「ッー」

「なぜ、貴様は戦う？」

「」

「その不死性を教会の上層部が知らぬはずは無いし、かといって協会が知れば即座に封印指定ものだ。

どちらの追跡は周到にして執拗。なのに貴様の名は世界に轟いている。

何故だ、シエル。何故貴様は、望まぬ異能を駆使してまで、教会に従い吸血鬼を狩る？」

「」

「答えぬか、まあいい。

ならば続けようか。そろそろ、宴もたけなわだ」

「……………黙れ！」

私が剣を外した瞬間、シエルが一気に間合いを切った。そして再び始まる円舞曲。

「串刺しに、成りなさい！」

高く跳躍したシエルからの、聖矢の大量放射。四度の連投で射出された三十二の黒鍵が私の回避路を悉く潰し、確実な死を唄う。

どう剣を振ろうとも黒鍵は確実に私の急所を捉え、刃に込められた概念がこの身に致命傷を刻むだろう。

「ここに来てこの気迫、見事だ。だが、一手遅いな」

血肉が剥がれ落ち、蘇り、果てに辿り着こうとも、この者は諦めない。

ならば、襲い来る黒鍵ごと、この一手をもって幕を引く。

「活目せよ、これが我が魔剣の輝きだ。

その目にしかと灼き付け、逝け、シエル！」

神秘はより強い神秘に打倒される。

はたしてその異能は、『世界修正』は、絶望を束ねた魔剣の旭光に、耐え切れるか？

「約束された（エクス）」

真名の開放と共に、魔剣が一際強く輝く。

圧倒的な黒の奔流。

魔剣に注がれた私の魔力が黒い極光へと変換され、創り出される空間の断層が、決着を告げる。

「アルトリアさん！！！」

だがそれよりも早く、その只中に第三者の声^が割り込んだ。

契約と誓い、明日への灯火

走った。ただひたすらに走った。

既に変わってしまった身体。その全力でもって風のように夜と走る。

その速度はオリンピック選手だって楽々追い抜けるから、歩道なんて使えない。使わない。

暗い路地裏を駆けながら、月光に同調して高まった感覚を研ぎ澄まして、必死に痕跡を追う。

無事で、いて下さい

脳裏に浮かぶ最悪の幻想を振り払い、祈るように呟く。

はじめの数分こそ部屋に居たけれど、やっぱり居てもたっても居られなくなつて、アルトリアさんが飛び去った隣のビルの屋上に向かった。

だがそこには誰も居ない。ただ血の匂いだけが下の、暗い路地裏に続いている。

そしておっかなびっくりその路地裏に辿り着いてみて、絶句する。各所に刻まれた破壊痕は、どれも爆弾でも使ったかのように壮絶だった。

無事で、いて下さい！

それを辿って走る走る走る。

遠くで銃声と破裂音を聞いたときに、アルトリアさんが撃たれた場面が鮮明に浮かんだ。

震えるのだ協力的な魔力が、私の身体を打った時なんか、もうどうしようもないくらい不安になった。

アルトリアさんは、こんな風に成ってしまって、遂に一人ぼっちになっちゃったと諦めた矢先に出会ったひと。

ちよつと変わってて、しかもすごく怖いけど、結局何だかんだいっても優しいひと……だと、思う。

「……………」

いけないいけない。

優しいひと！

そうに決まってる。うん、決定！

ぶん、と首をふって変な考えを一掃して、正面を見据えた。

コンクリートの壁に空いた大きい穴。その先から聞こえる音。

たぶん、この先にいる。

崩れた壁に身を隠しながら、そ〜と覗く。

今だけは、暗くてもよく見えるこの身体にちよつとだけ感謝。

そして、除闇の中にアルトリアさんの黒い鎧姿を見つけたときには、いけないと思いつつも既に叫んでいた。

「アルトリアさん……！」

よかった、無事だったかな？

ってえーっと、もしかしてマズか

第十五話

契約と誓い、明日への灯火

一騎打ちに、無粋な少女の声が割り込む。

その声に気を逸らし、宝具展開のための集中を途切らせてしまったが致命的だった。

「ク　　、散れ！」

私の身体に迫る、十六対三十二本の閃光群。

咄嗟に真名の会報による極光を放棄し、切っ先を床に擦りながら垂直に斬り上げる。

同時に魔力をもって黒い炎柱を立ち上らせた。

バースト・エア。こう成ってから得た、魔力の一斉放射による黒焔で黒鍵を打ち上げる。

黒鍵は四散し、矢を打ち落とした私も、打ち落とされたシエルも互いに無傷。

振りぬかれた魔剣と、未だ中空にあるシエルの身体。それらが戻され、再び攻勢に出る体勢が整うのは全くの同時だった。

「さつき、何をしに来た！」

突然現れた己の従者に、私は大声を上げる。

そしてやはり同時に、シエルは室内の闇に溶け込むようにビルの奥へと滑り込んだ。

マズい！

そう直感した私は、咄嗟に彼女とシエルの間に割り込む。

「だ、だって きゃあ!？」

「チッ！」

直後に飛来する八本の黒鍵を全てを叩き落す。

「ずいぶんと姑息な手を使うな。」

「貴様の敵は私の筈だろうが、シエル!！」

その切っ先は、寸分の互いも無くさつきの眉間、喉、そして心臓を狙っていた。

そのことに、激怒した。

「貴様は私が認めた強者だ。その貴様が、私ではなく私の従者を狙うのは何事か、と。」

「何を莫迦な。」

弱いものから削っていくのは、戦の常道でしょう。違いますか？」
眼前の暗闇から、油断無く黒鍵を構えたシエルの姿が浮かび上がる。

姿は無いが、あのパイルバンカーも発射可能な状態で隠し持っているのだろう。

「シエル……先輩？」

殺気を交し合い、緊迫する二人の間。そこにさつきの、戸惑いを孕んだ声が静かに響いた。

可能性が低すぎると一度は棄却した可能性だが、事実は小説より奇なりということが。

「うそ……なんで??」

「こんばんは、弓塚さん」

困惑して硬直したさつきに、柔らかい笑顔を向けるシエル。

なるほど確かに、あの表情ならばさつきの話した『シエル先輩』のイメージと重なった。

優しげで、頼れる先駆者の顔。同時に、どこかに悲しさを含む貌。常世の条理から外れたものは、総じて“普通”に憧れる。

吸血鬼に『死神』と恐れられ、『弓』と呼ばれるシエルも、案外そのクチなのかもしれない。

「知り合いか？」

「え、あ、はい。」

あの人は、シエル先輩はわたしの学校の先輩です」

「いえ、それは違いますよ。弓塚さん。」

わたしは、この街にいる死徒を狩るためにこの街に来た教会の代行者。こつちが本当なんです。

学校の先輩つていう設定も、それが便利だから魔術で成りすましていただけなんですよ」

さつきの言葉を、少し哀しそうな笑顔でシエルは否定する。

「うそです!!」

「うそじゃありません。」

わたしの本当の経歴は、聖堂教会 埋葬機関第七位『弓』のシエルです」

必死で否定するさつきの目尻に、涙が浮かんだ。

シエルの口から語られる真実を認めたくない、叫ぶ。

「うそです！ 先輩は、シエル先輩は間違いなくわたしの先輩です!!」

だって、いっぱいお話したじゃないですか！ 遠野さんと、有彦くんと四人で！

たとえ、先輩が本当は三年生じゃなくても、その事は事実じゃないですか！ だから先輩は先輩です!!」

「うーん、困ったひとですね……」

さつきの、涙を浮かべた必死の訴えに、シエルは苦笑いを浮かべ

る。

それで確信した。

「 ヤツも、そのクチか」

理由など知らないが、必要有り判断したシエルはさつきの学校に潜入した。

そしてそこで“普通”の学生として生活し、暖かさに触れ、絡み取られた。

なら、

「それでも、わたしは」 解った」

そこから、突き崩す。

「さつき。確認するが、あの代行者はお前の友なのだな？」

「え？ は、はい。そうです！」

思わぬところから飛び出した肯定意見に、反射的に大きく頷くさつき。

ああそうだ、これからはこの頼りない従者の面倒も見なければ。

そう思った瞬間に、私の口は用意していた獲物を追いつめるための文言を全て忘れていた。

「そうか。なら……アルトリア・ペンドラゴンが、その真名を以つて聖堂教会の代行者シエルに問う。

この街に巢食い、貴女が狙う死徒とはこの弓塚さつきの事か？」

剣を下げて、相手を真正面に見据える。

私の口は真実を紡ぐために自身の真名を告げていた。

/
/
/

剣を下げ、代わりに突きつけられたのは真摯な問い。

その口上に載せられた『アルトリア・ペンドラゴン』という名前に、わたしの総身が震えた。

先のやりとりで、彼女がもつあの黒い魔剣こそ、聖剣エクスカリバーであることは半ば確信している。

そしてそれを十全に使いこなす彼女が、かのアーサー王であることも。

「
っ」

だがそれはまだ仮説の段階。いや、到底容認できるわけがないのだ。

アーサー王は女性であり、こんなにも禍々しく歪んだ存在であることなど。

認められる訳が無いのだ。

目の前の黒い騎士が、並外れた功績を遺し輪廻の輪から外された

『英霊』であることなど。

だが、わたしはそうでない場合の言い訳がどうしても思い付けな

かった。

そもそも、嘘ならもう少しまともな嘘をつく。女性の英雄も、多くはないが確かに存在するのだから。

アーサー王の名前が『アルトリウス』でなく『アルトリア』であるなど、悪い冗談だ。妄想にもほどがある。

だがそれ故に。

もし黒剣の言葉に、一切の偽りがなければなら、これは英霊にとつて最も重要な『真名』を以つての問いという事になる。

ならば、答えないわけにはいかない。目の前の彼女は、そのリスクを承知で問うているのだから。

「いいえ。違います」

「では貴女が狙う標的はこの弓塚さつきの『親』ないし、そのねずみ講の頂点にいる死徒か？

もしそうであるなら、その死徒の名を聞かせて頂きたい。」

先ほどまでの殺気や剣気など、一切捨て去つた真剣な問いに、わたしもまた誠意をもって答える。

教会に属し、教義に順ずる以上、わたしは迷い問う者に嘘をつくことは赦されない。

「はい。吸血鬼・弓塚さつきの『親』または、そのねずみ講の頂点に座し、わたしが狙う死徒の名は、ミハエル・ロア・バンダムヨオン。

別名『アカシヤの蛇』『無限転生者』と呼ばれ、我が聖堂教会が死徒二十七祖の番外位と認定する死徒です」

わたしの言葉に黒剣は僅かに表情を動かし、すぐに消した。

「成る程。ではもうひとつ、訊く。
貴公は、その死徒を仕留め滅却し得るか？」

「無論。そのためにわたしは此処にいます」

僅かな間も置かず、わたしはそれに答える。

それは誓い。それは宿命。それは悲願。

わたしはわたしであるために。

不死の化け物ではなく、人間として生きるために、それを成さねば先に進めないのだから。

「いい答えだ。胸が踊る」

鋭く、清んだ視線が交わされる。

彼女のうちから僅かに息が漏れ、そして深く息を吸った。

否応なしに高まる緊張感。黒剣は、いや英霊アルトリア・ペンドラゴンは、魔力を以って言葉を紡ぐ。

「では、頼みがある。

これより後、このアルトリア・ペンドラゴンに、代行者シエルの聖務の妨害をしない事を条件として、弓塚さつきの身柄を預けて頂きたい。

無論、弓塚さつきには人間からの吸血行為の一切を禁止させ、また彼女によって引き起こされる損害の全ての責任は私が負う」

アルトリアの口から出た言葉。

それはただの会話の言葉ではなく、魔術的な意味をもつ『契約』だった。

最上級の神秘である彼女が、その魔力を以つて『契約』の文言を発する以上、言葉は明文化されずとも確かな効力を宿す。

その『契約』の内容は自己の行動の制限 セルフギアス つまり『自己強
制証文』ニスクロール

自らの魔力を以て自らを縛るために、事実上逃れることの出来ないとされる最上の拘束証文。

もしわたしこれをが了承すれば、その瞬間に契約は履行され、以後その条項に違反しない限りアルトリアの行動を縛り続けるだろう。

「返答は如何に？」

だが、わたしは教会の教義に反する者をすべて滅却する立場にある。

故に吸血鬼の生存を認めろ、というのは簡単に飲める条件ではなかった。

キリ、と奥歯を噛んで俯く

代行者としての自分と、楽しかった学園の日々。

その構成要素だったモノを滅却しなければならぬという事実などが、複雑に絡み合い心を締めつける。

さまざまな映像が脳内に乱れ飛び、様々な言葉が脳内で渦を巻く。

「シエル先輩、わたしからもお願いします。

どうか、わたしを見逃して下さい。お願いします！」

そんな思考の海から彼女を引き上げたのは、何も解っていない弓塚さつきの声。

解っていないなりに深く頭を垂れる、偽りの後輩の声だった。

おそらく、彼女は今日の前で起こっている事象の重要性など欠片

ほども解っていない。

だがその事がかえって、シエルの気持ちを揺らす。

「それは……」

彼女はわたしを信じているのだ。

わたしがかけた魔術など。すでに解けている。

だがそんなものとは関係なく、自分をだまし続けたはずのわたしを。シエル、という偽りの先輩を。

「……解りました。ですが、そのままではその条件を飲むことは出来ません。」

追加の条件として、吸血鬼である弓塚さつきの行動を束縛し得るだけの能力があるか検分するため、

アルトリア・ペンドラゴンに、その能力と素性などの情報を開示する事を求めます」

天秤が、傾いた。決して選んではいけない選択肢をわたしは選んだ。

そのせめてもの抵抗として、黒剣の情報を求める。

彼女が真に何者であるかを知ることが、異端を一匹見逃すだけの価値があると判断した。

「いいだろう、その条件を飲む。」

では秘密の漏洩を防ぐ為に遮音と魔力遮断の結界を張って貰いたい」

アルトリアは至極あっさりとその条件を飲み、まずは剣を消した。そしてわたしが遮音の結界を展開させるのを待って、敵意の無い事を示すために鎧も消し去る。

鎧の下から現れたのは、銀と紅の糸で刺繍されたドレス。

「ではまず、私という存在から語っていきうか」

その裾を僅かに揺らしながら、彼女は語りは始めた。

自身が英霊であり、紆余曲折の果てに受肉した顛末から、現在は冬木市に派遣された言峰綺礼の元に身を寄せていることまで、全て。それらの事実には、わたしは驚愕を隠せない。

彼女を倒す？ 不可能だ。少なくとも今のわたしには。

紛れもない英雄が集った第四次聖杯戦争に勝利し、生き残った彼女に死角など無い。

彼女は、わたしの手に負える存在ではない　　そう決断するのに、それらは十分な情報だった。

「全く。貴女という人はなんて規格外なんですか」

これほどの怪物が立ちはだかるならば『遺憾ながら認めざるを得えない』という大義名分が立つ。

なにせ、そんな前例は教会内にはいくらでもあるのだから。

「驚いて貰って光栄だ、シエル」

「ええ、十分に驚きました。

しかもそんな貴女が教会に属す者の下にいるなら、一応ながら貴女は教会の人間という事になります。

それじゃあ、認めざるを得ないじゃないですか。

だから、わたしはその契約を呑みます。

以後、埋葬機関第七位『弓』のシエルは英霊アルトリア・ペンド

ラゴンによってその聖務が妨害されない限り、
吸血鬼である弓塚さつきに対して、一切の危害を加えない事を承認します」

何事にも、建前というものは必要。

わたしはさも仕方がない、という風に言葉を繋ぎ、次いで契約の承認を言葉にした。

「それで、貴女はこれからどうするのです？」

魔術がらみの会話は此処まで、とわたしは活性化した魔術回路を閉じる。

契約締結に対して軽く頭を下げた彼女もまた、最後まで纏っていた厚手のドレスを消し去った。

「
」

突っ込みません。ええ突っ込みませんとも！

たとえその下から出てきたのが、あの少女趣味全開の黒いフリル付きワンピースだったとしてもです！

というか、昼に見たときも思ったのですが、その服で街中を歩いて恥ずかしくないんですか！？

「問題ない。他人の目など気にするようでは、王など務まらぬ。

それに、これは少々おとなしめなのだぞ？ 今日の主役はこの純白のストールだ」

人の思考を読まないで下さい、アルトリアさん。

「じほん。

じゃあ改めて訊きますが、これからどうするのです？」

「妙な事を。何もせず帰るだけだ。

そういう約束のはずだろう？」

わたしの質問に、アルトリアはさも当然とばかりに服の襟を整えながら答える。

「いえ、そうではなくて、これから、ですよ。

弓塚さんの事もありますし、何よりこれからも貴女は吸血鬼を狩り続けるのですか？」

「ああ、そういうことか。

そうだな、とりあえずはさつきの状態が安定してからになるが、そうするだろう。どうかしたか？」

「そうですね。じゃあこうしませんか？

とりあえず弓塚さんは急な病気で他県……貴女の居る冬木市の病院に入院した、というのはどうです？

たしかあの街にはそのスジの病院があったはずですから。そこなら御両親との面会も可能ですし」

「ほ、本当ですか！」

につこりと笑顔で告げた言葉に、さつきは飛び跳ねんばかりに喜んだ。

その様子だと、おそらく両親の事を諦めていたのだろう。わたしのように自分の手で殺めてはいないらしい。

「あ、もつとも。その病院は教会ではなく魔術師協会の所管です。なので、入るためには冬木のセカンドオーナーの許可が必要ですよ?」

異端を赦さない我ら聖堂教会と違い、魔術師協会は概ね死徒に寛容である。

だからこそ可能な措置なのだが、その分教会に属すわたしやアルトリアの頼みを承認するかどうかは微妙なところ。

そういう意味で言ったのだが……

「ああ、それなら問題ない。

遠坂家の頭首である凜も、私の身内みたいなものだ」

「……どこまで規格外なんですか、貴女は」

その一言で、げんなりと肩を落とした。

聖堂教会と魔術師協会。

相反する二つの組織との強力なコネクションを持ちながら、そのどちらにも属さないフリーランス。

正直、厄介極まりない。色々な意味で。

「まあいいです。

もうこうなったら、もうひとつくらい規格外が増えてもどつって事ありませんね」

だから、こんなことを提案してみよう。

白翼公や最後の大隊の件もあるし、正直、戦力は多いほうがいい。背筋に奔る嫌な予感、ひとまず無視ということ。

「もし差し支えなければ、わたしのいる埋葬機関に来ませんか？
そうすればより効率よく死徒の情報が集まりますし、貴女の力も存分に発揮できると思いますけど」

大変遺憾だが、思うにあの陰険サド機関長はこの結果を望んでいたのではないだろうか。

だからこそ、わたしに第七聖典を持たせた。

他の銃砲火気と違い、これは霊体化すれば携行が可能なのだから。

「ほう、悪くないな。考えておこう」

少し思案したアルトリアは満更ではないといった風に応える。

結果は良好。だがその表情があつた陰険サド機関長に重なって見えた事で、嫌な予感が加速する。

もしかして、地雷を踏みました？

「とはいえ、まずはさつきの事が先だな。任せたぞ。」

「もちろん。」

学校や御両親への説明もちゃんとしておきますから、どんと任せちゃって下さい。

報告は後日、冬木市の教会宛でいいですか？」

「はいっ、よろしく願います。」

もはや、先程までの死合いの気配は微塵もない。

契約が成された今、争う理由などもうないのだ。

「問題ない。が、それはロアとの決戦前に行っておけよ?」

アルトリアが、ニヤリと笑って嫌味を飛ばし、

「負けませんよ。」

なにせ死神さんに（以下略）ですから

さらりと、受け流す。

そういえば、こんな会話など何時以来だろうか。

「確かに。ではまたな。いくぞ、さつき。」

「はいつ。じゃあ先輩、また今度!」

「ええ。それでは」

まあ、いいです。

今は新たな友人を得たことを神に感謝しましょう。
帰ったらお祝いのカレーですね。

- - - - -

こうして、歴史の影で行われた本来在り得ない戦闘は幕を閉じた。この一件によりアルトリアは埋葬機関との、シエルは最強のサーヴァントとの、さつきは両親との縁をそれぞれ獲得した。

一方、聖堂教会が新たな戦力を得たという情報はたちまちのうちに世界を巡ることになる。

それは同時に起こった『混沌』、『アカシャの蛇』の消滅の報とともに伝えられ、それを聞いた全ての者たちに影響を与えた。

『真祖の姫君』アルクエイド・ブリュンスタッド、『弓』シエルとともに、この事件の当事者として『黒剣』アルトリア・セイバーの名が世界に轟いた瞬間だった。

「そうですね、あのアーサー王が」

「はい、我が埋葬機関に迎えてみようと思います」

朝日の差し込む部屋。その窓際に置かれた豪華なベッドの上で、恰幅の良い男が身体を起こしている。

埋葬機関長という重責を担う当代のナルバレックは、そのベッドの前で片膝を付いていた。

この穏やかそうな老人こそが、教会内で唯一、埋葬機関に直接の命令を下せる人物であり、ナルバレックが唯一認める聖職者でもあった。

「ふふ。シエルに次いで、またも面白い方を選んだものです。

解りました、全て思うようになさりなさい。その為に、貴女がたはいるのですから」

「ありがとうございます、陛下」

そして埋葬機関長であるナルバレックは、窓から差し込む朝日の中で、やうやうしく一礼する。

一方の男は彼女に頷きを返し、厳しい表情で空を見上げた。

「嵐が、来ますね……」

歴史を描くペンはいよいよ正史より外れ、新しい物語を紡ぎ始めることになる。

その結末を知る者は、いない。

蒼黒対話

まどろむ意識を振り払うように眼を開く。

そこは謁見の間。

玉座から真つ直ぐに伸びる絨毯はこの国で最高の品であり、居並ぶ彫像は職人達の渾身の作品だった。

天井は高く、見上げれば光取りの窓には素晴らしい装飾の施されたステンドグラスがはまっている。

その向こうの空は黒。ならば、いまは夜なのだろうか。

否、この世界に色はない。

真つ白い壁と玉座、真つ黒い絨毯と空。全てがモノトーンの、希薄な世界。

「また、か……」

この世界こそ、私の心象風景。

眠りに落ちた時、稀にだが私はこの色の無い城に招かれる。

「さて、ここに来たということは」

呟きながら、玉座の傍らに置かれた小さなサイドテーブルに目をやった。

そこにあるのはこの世界で唯一の、色の有るモノたち。

赤い柄を持ち、銀色の刃に魔術を施された黒鍵と、若草色の台座を持つ、壊れて砂が落ちなくなった貝砂の砂時計だった。

「……なるほど。これがさつきと、そしてシエルか。」

やはりシエルも私にとって大きい存在となったのだな」

彼女はそのふたつのアイテムを手に取り、玉座から立ち上がった。すると即座に謁見の間の中央に真っ白い円卓が出現し、まるで初めからそこに在ったかのように存在を主張する。

その椅子の数は十二。

卓に設けられた椅子の幾つかにはアルトリアの掌にあるアイテムと同様に、色のないこの世界で鮮やかな色を湛えている。

「ふむ……」

私は玉座に立てかけられていた黒いエクスカリバーを取り上げると、十二に等分された真っ白い卓の一面に置いた。

するとその場所に設けられた椅子が艶のある漆黒に変わり、エクスカリバーに刻まれたものと同じ、赤い刻印が浮かび上がる。

さらに卓に置かれた燭台にも、黒い炎が灯った。

この円卓は私のキャンバスなのだ。

それぞれの席に私に影響を与えた人物を象徴するアイテムを置くことで、椅子がその人物が座るに相応しい色に変化し、燭台にその人物を象徴する色の炎が灯る。

これは私がその人物の在り方を認めた証であり、同時にその人物をどのように思っているかを示すものでもあるらしい。

余談ではあるが、この十二という数も常に変化する。受肉した当初はこの卓自体が存在しなかった。

だが徐々に、現代を生きて色々なモノに感化されるうち、私の中には十二席の“他人を受け入れる余裕”が出来ていったともいえる。少しずつ、変わっていく。それをここでは実感させられる。

「よし、ここにするか」

しばしの思案の末にわたしの席を12時として11時の位置に砂時計を、9時の位置に黒鍵を置いた。

これで円卓の席は十二のうち半分が埋まったことになる。

「ずいぶんと増えたものだ」

改めて、私は円卓を見る。12時の位置に私を現す黒いエクスカリバーと黒い炎。

そこから反時計回りに11時の位置にさつきを現す砂時計と小麦色の炎、9時の位置にシエルを現す黒鍵と青い炎。

以下、二人の間である10時の位置に、シャトヤンシーの入ったアレキサンドライト・キャッツアイと赤い炎。

3時の位置に、ピアノの黒鍵と白鍵の名を冠した大型拳銃と真紅の炎。

そして彼女の席の左、つまり相手から見てアルトリアの席が右に見える1時の位置。

そこに在るのは、銀狐のファーをあしらった雪色のカジユアルコート……彼女の亡き主アイリスフィールの象徴と、白銀の炎が灯っていた。

「だが、妙だな」

自分の席と同様に変じたさつきの椅子を見て、小さく呟く。

もうひとつの、シエルの方には納得がいった。

鮮やかな青い背もたれを斜めに奔る、血色の疵跡。それを封じるように押し掛かる銀色の十字架の装飾。

紅い疵が何かは気になるものの、実に彼女らしいデザインだった。この世界の椅子のデザインは実際に私の知る知識だけでなく、魂

で感じた相手の本質をカタチにする。

その魂で感じたままの『弓塚さつき』を示すデザインは、今にも崩れそうなほど乾いた学生が使うごく普通の椅子。

綺麗な小麦色の炎や、少女らしい貝砂の砂時計に比べて明らかに異質だった。

「さつきの中には、何かが在る、か。ふふ、愉しみだ」

こうして見てみれば、止まった砂時計というのも可愛らしさの中に歪さが混じっている。

わたしはそこに、さつきの秘め持つモノ。

あるいは本人すら知らないモノが有る事を嗅ぎ取った。

それが自分にとって有益なら才能として伸ばす。

意味が無いならさっさと棄てさせよう。

己の従者となった若き死徒の育て方を考えながら、私は円卓の向こうにある大鏡に向かった。

その鏡は姿見と言うにしても大きい。

謁見の間を仕切るように、玉座に座る私に挑戦するように通路にはめ込まれた大鏡。

鏡面は部屋全体を写していた。

「さて、本題だな。

いつたい何の用だ、セイバー？」

第十六話
蒼黒対話

/
/
/
/
/

アルトリアの手が鏡に触れる。

すると鏡面がまるで水面のようにうねり、その向こう側に夕陽に赤く染められた丘と、蒼いドレスを纏った“彼女”が姿を現した。

少女の纏うドレスはアルトリアと全く同じ形状であるが、彼女が黒い布を使っているのに対して、少女の物は蒼い布。

白い布の部分は共通だが、彼女のものが紅色の糸をもちいている箇所には金糸をもちいた刺繍が施されている。

色と心象風景以外の全てが、服装、容姿、身体つきが、全く同じ。少女は、正しくアルトリアの鏡あわせの存在。もうひとりのアルトリア。

世界に刻まれた、いと気高き騎士王。アーサーその人である。

「なっ、貴女がここに呼んだのでしょっ！？」

わたしを、何も出来ないまどろむ意識のみの存在に貶めたのは、貴女ではないか！

要求は常にひとつ。その身体を速やかに返還しなさい！！」

「ああ、そうだったなセイバー。」

堅物の貴様に、私を呼べるような気の効いた用件を用意できるとも思えない」

少女の吼える声を他所に、アルトリアは口元に指を当てて思考の海に沈んだ。

その様を見て、少女の顔がどんどん怒りに染まっていく。

「ふむ。やはりさつきか？」

何度かこの世界に来ていれば嫌でも傾向が解ってくる。

“アルトリア”の生き筋に対して多大な影響のある出来事が起こった時、ここに導かれ易くなるらしい。

同じようにシンボルが出現した人物に出会った後でも、ここに導かれなかった事もある。

「何をぶつぶつ言っているのですか。」

それに、貴女に『セイバー』と呼ばれる筋合いはないっ！」

思考世界に入ってしまったアルトリアが気に入らないのか、セイバーは一層声を荒げる。

「そう怒鳴るな。私がこの世界に来てしまった理由に思い至っただけだ。」

そうだな、聞けセイバー。私に、新たな従者ができたぞ」

「そんなこと、どうでもいいのです。」

『セイバー』と呼ぶのも止めなさいッ！」

さつきの事を話そうとしたアルトリアの言葉を、少女の怒声が遮る。

「無粋だなセイバー。」

少しは柔軟性を持たないと、ボキリと折れることになるぞ?」

だがアルトリアはそれに対し憤るのではなく、再びうんざりした表情で対応する。

この“わたし”はいつもそうだ。興、というものをまるで解さない。

まあ、仕方が無いことかもしれないが、そう彼女は思い、息を吐く。

「わかった。」

貴様がそんなに言うなら『セイバー』ではなく『アーサー』と呼んでやろう。

その方が、らしくていいではないか?」

「貴様、まだわたしを侮辱するか!」

皮肉げに唇を歪ませるアルトリア。

それを見て、アーサー（セイバー）は鏡の向こうから、齒軋りの音が聞こえてきそうなほどの表情で彼女を睨みつける。

「なんだ、『アルトリア』と呼んで欲しかったか?」

生憎だが、これは私の名だ。それに、この名を棄てたのは貴様だろ。

あの剣を抜いたとき、貴様は『アルトリア』という少女は、『アーサー』という王に成った。

そう、自分で自分に誓ったのではないか」

「　　ッー!!」

その言葉に、セイバーは愕然として言葉に詰まる。

「　　わたし、はっ……」

「アルトリアだ、か？」

そうだな、確かに貴様という人間を指す名は、『アルトリア』だろう。それは、私も同じことだ。

しかし貴様という存在は孤独な王『アーサー』だ。『アルトリア』では決してない」

「く……、ならば、ならば貴女は何だというのだ。

貴女という人間は、貴女という存在は、なんという名なのだ！」

その一言で、彼女のスイッチがカチリと切り替わる。

それすらも、悟っていないのか。

呆れと怒りで、加虐の恍惚でくつくつと嗤っていたアルトリアの感情が、一気に冷淡なものに変わる。

唐突に向けられた、底冷えのするような視線。

アルトリアのあまりの変わり様に、セイバーは鏡の向こうで息を呑んだ。

「『アルトリア』だ。

私は人間でありながら、王でもある。
故に、どちらも同じ名だ」

一秒と間をおかず、絶対の自信を以って、言い放つ。
そのことに、終にセイバーは絶句した。

「セイバー、貴様も私の眼を通して見たはずだ。
かつて続べた、ブリテンの姿を」

「違う、あれは……違う。

もう、わたしの国は滅んでいる。

だから、わたしは、聖杯を

」

「騎士王！」

改めて突きつけられた事実には、セイバーが打ちのめされ、俯く。

その事がさらにアルトリアの逆鱗を削り上げ、彼女は噛み付か
んばかりの勢いで少女に迫った。

「ならば問うぞ、セイバー。

国とは、国家とは、何を指してそう呼ぶ！

何をもって、国を定義する！？」

「ッ！」

国とは、国土と法と民、秩序と安定だ！
それが揃って初めて、国は国足りえるのだ！」

心を絞られ、呼吸が上手く出来ない苦しさに喉元を掴みながら、
少女は叫ぶ。

だが、それは違うと彼女は否定する。

その答えは断じて違うと、アルトリアは激昂する。

「馬鹿め！」

そんなことだから、貴様は国に見限られたのだ！」

「き、聞き捨てなり」

「私は悟ったぞ、己の失策を。なのに貴様は、まだ解っていないのか？」

国とは人だ。まず人があり、そして国がある。

法？ 国土？ 確かに必要だ。だが、しょせんそれらは二次的な要素に過ぎない。

国の名が滅びようと、国土が海に沈もうと、そこに生きた人々が
いれば国は生き続けるのだ」

セイバーの意見を叩き潰すように、叫んだ。

彼女の意見は、許容出来ない。

そう刷り込まれ続けたあの時代ならともかく、この時代で生き、
この時代の世界を見てまわってなお貴様はそんな言葉を吐くのか！

「二年前、私はイングランドを訪れ、そこで生きる人々とその表情
を見て愕然とした。

心は震え、涙は止め処なく頬を流れ落ちた！

私の思想が、矜持が、ガラガラと崩れ去った！

その時は貴様の眠りも覚めたはずだ。
なのに貴様は、何も感じなかったのか。

我らが治めたブリテンの民の子孫たちは、現代のイングランドで
確かに生きている。

ならばブリテンは、我らの国は滅んでなどいない。
にも関わらず、貴様は未だにあの選定を無かった事にしようとし
ている。

何故、それが無意味と気付かない！！」

「ふざけるな！

無意味だと、ならばこれにも意味があるというのか。

見る、わたしの後ろに広がる、この、丘を！」

セイバーの後ろに広がる、無数の剣の突き立った夕焼けの丘。

存在する全ての剣は主を喪い、主達は剣の下で骸となっていた。

そこは、心に深く焼きついた戦場。

己の統べた国を己の力で攻め落とし、己の統べた国土を己の軍で
蹂躪した、罪の証。

カムランの、丘

「わたしは、常に最善の選択肢を選んだ。その結果がこれだ。わたしは、わたしの出来る全てを行った。それでも国は滅んだのだ。」

ならば、間違いはわたしが選ばれた事。

選ばれたことこそが、間違い、だったのだ……」

「戯け。戦争をすれば、戦士は死ぬものだ。何故それを悔やむ？ただ貴様が無能だっただけだろう。」

選択の要素に、自分という『人間』の意思を介在さない貴様ならば、当然の結果だな。

貴様は、『王』であつて『人間』ではないのだから」

セイバーの必死の叫び。

しかしアルトリアは真つ直ぐに彼女を見据え、鋭く、刺し殺すように鋭利な刃を言い放つ。

貴様の生は、無意味であつたと言いつつ。

そこに在るのは、明確な嫌悪。終に、彼女の怒りが、臨界点を突破した。

「貴様の最大の無能は、人々を『王』として統べようとした事だ。臣下の騎士達の笑顔すら見たことがない王に心から従った臣など、数えるほどだろうな。」

生物は己が同種族の者以外に統べられるのを本能的に嫌う。まして、理性をもつ人間なら尚更だ。

その丘は当然の結果だろう。」

『人間』ではない『王』が自分達を統べて、我慢できると思うか？」

どこまでも冷たく、抑揚のない声。
アルトリアの中で、青い炎が煌々と燃える。

「『王』という駒？ 笑わせる。」

王道とは、臣民の持つ千の願いを束ね、敵の抱く万の願いを駆逐する事。人間の業を背負い、それを具現化する事。

だから王は、誰よりも人間を知らなければならない。
誰よりも正邪清濁を併せ持つ人間でなければならない。

それを成した上で、法という非道を敷くことこそが、王の生業。

安定、蜂起、信認、革命、独立。

その結果など何でもいいのだ。民が己で考えさえすれば。

悟れ。

ただ護る事ばかりを考え、民から自立を奪った貴様は、王などではない」

アルトリアの持つ王の定義は、まさに暴君のそれ。

才覚のない者が王となれば、たちどころに即座に国を瓦解させる危険思想。

しかしそれを彼女が、暴虐の中でなお真に民の事を想える者が運用するなら、あるいはあの戦乱を完全終結させたかも知れない。

ランスロットに厳罰を科し、蠢く策謀の悉くを叩き潰し、モルドレットの絶望を総身で受け止めたかもしれない。

最後の戦は、起こらなかつたかもしれない。

ifが、セイバーを打ちのめす。

目の前に居るのは、間違いなく自分。答えは自分の中にこそあったかもしれないのだ。

自分は最善を選んだつもりで、その判断基準こそが間違っていたのではないか。

セイバーは唇に紅が浮かぶほど、奥歯を軋ませた。

しかし、いや、だからこそ。

だからこそ、わたしはやり直しを願う。この目の前の黒き王に、国を渡すため

「それでもなお、貴様はその選定を無かった事にするか？

貴様は確かに失敗しただろう。だが、人はそれすらも糧として、

“今”を築き上げた。

かく言う私とて、この結論に達したのは貴様の失敗を目にしたからだ。

その失敗を無かった事にするとは、あの国より連なる全ての命を否定することに他ならない!！」

ポタリ、と丘に紅が落ちた。

「やめる、やめてくれ。それ以上、言うな……」

目を伏せたセイバーは、噛み締めた奥歯の付け根から血を滴らせ、消え入りそうな声でそう呟く。

「眼を伏せるな、セイバー。」

何をしても貴様の心に渦巻く後悔、懺悔、自責の念は消えはしない。

ならば、それを呑み込んでしまえ。全てを受け入れろ。受け入れて、前に進めばいいのだ」

アルトリアの声に促されてセイバーが顔を上げ、鏡の向こうにいるアルトリアに視線を戻す。

そこに佇む彼女はドレス姿のまま、その右手に黒いエクスカリバーを握っていた。

「最後に、教えてくれ。」

なぜ貴女はわたしであるはずなのに、そんなにも強い。

答えてくれ、なぜ……」

「別に強い訳ではない、ただあの泥と呪いを取り込んだだけだ。

あの泥は、悪を成す根源だが

そもそも悪の定義自体が

人それぞれだろう？

貴様が“悪”として否定するものは、『人間』の自分や願望。肯定するものはやり直し。

あの泥と呪いのせいでそれらが反転した。

だが私を定義づける根源的ものだけは反転のしようがなく、結果として今の私が在る。それだけだ」

これこそが、この黒い騎士王の起源。

前述した故に子細は省くが、要するに、絶望の渦中にあった鏡の向こうの少女が呪いに染まって擬似的に黒化した時、

追い討ちをかけるように泥によって胸に渦巻く否定の感情をも反転させ、さらに黒化した彼女をさらに現世に固着するまでに強化した。

それが、英雄の在り方を持つ反英雄が誕生した理由だった。

「所詮、私は貴様の分身。虚構の存在だ。

この世界を去れば、私という存在は跡形もなく消え去るだろう。

だからそれまでの間、貴様はその丘で考えるがいい。

答えが見つかったなら剣で語れ。

全てを受け入れてアルトリアを納得させるその日まで、この身体は預かっておくぞ」

彼女は聖剣を高く掲げ、ふたつの世界を繋いでいた鏡を砕く。

鏡は乖離した心象風景に出来た、向こうを覗けるディスプレイではない。

故に例え砕くともそれぞれの心象風景に影響はなく、次に彼女がここに招かれた時には変わらずまたそこに在るだろう。

「ふ、らしくない」

鏡の欠片が消え去るのを眺め、アルトリアは円卓の黒い椅子に腰掛ける。

「己の心の傷を自ら抉り、さらには己の消滅すらも助長する……か」

口元が自嘲のカタチに歪む。

視線は、6時の方向に用意された席を凝視する。

「だが悪くない気分だ。

分身の私がいくら答えを得ても、本体である“わたし”が立ち止まっている限り、前には進めない」

顔には、確かに愉悦の色が浮かんでいた。

6時の方向。彼女から見て真正面に位置するその席は、彼女と真つ向から対峙する席。

その位置に彼女はシエルのシンボルも、生涯の好敵手と認め合う水魔のシンボルも、赤い悪魔狩人のシンボルも置かなかった。

そこは彼女の、もうひとりの自分の席であるが故に

「憎いだらう、セイバー。この私が。
だからいつか必ず、私を殺し、私を越えてみせよ」

彼女の声は誰もいないモノクロの城に響き、同時にその世界は消
失した。

夢での邂逅を終え、アルトリアは現実で眼を覚ました。

蒼黒対話（後書き）

月姫 〱三咲町の片隅で〱
終章

欠けた月姫

「ハッ、ハッ、ハッ、」

荒い息遣いで、夜の街を少女が奔っていた。

その顔は恐怖に歪み、振り返る顔には焦りがありありと浮かんでいた。

結局のところ、彼女が巻き込まれたのは不運以外の何者でもなかったのだろう。

予想外に遅くなってしまった、カラオケからの帰り道。

新都のバス乗り場から最終のバスに飛び乗って、深山町にある家に帰ろうとしたのが悪かった。

全力疾走で駆け込み、ほっとして居眠りをしたのは最悪だった。

結果、彼女は深夜の新都の奥深くに連れ去られてしまい、折り返そうにも既にバスは無い。

ならばタクシーと考えるが、残念ながら財布の中身に余裕がない。結局、運動部に所属し体力には自信のある彼女は、タツ、タツ、タツ、と軽快なリズムを刻みながら家に向けて走る事にした。

その途上で、人気の無い道にあるコンビニの前で彼女は声をかけられた。

「なあアンタ、こんな夜中に何してんの？」

相手は髪を金色に染めた、いわゆる不良だった。

たぶん暇だったのだろう。

アルコールの入った頭で、たまたま目に付いた異性に声をかけた。

「ごめんなさい。急いでますから」

こんな時間、こんな男に声をかけられて、恐がらない女性はいない。立ち去ろうとするのは当然で、拒絶を声に出来ただけ彼女は強かった。

小学生の頃から続けてきた武術の成果かもしれない。

しかしこの場合に限れば、意味は無かった。

酒で理性のタガを緩められた男は、彼女の一言に苛立ち、店から出てきた四人の仲間と共に彼女を追う。

ヘラヘラと顔に嫌な嗤いを貼り付けて、彼女を殴りつけ、路地裏に連れ込んだ。

「嫌、ちょっと、やめて！」

少女の抗議も、悲鳴も、誰にも聞かれることはなかった。

M o o n D r i p

… 01 : 欠けた月姫

すべてを包み込むような、しっとりとした夜だった。

紺色の夜空に、白金の月が燦然と輝いている。

夕方上がった雨で空気が洗われ、邪魔するもの無い月の光が夜の町を照らし上げる。

本当に、気持ちのいい夜だった。

こんな夜に、大人しく出来る吸血鬼などいるものか。

今夜のリハビリプログラムをすべてこなした病室への帰り道、廊下の窓から注ぐ月明かりに魅せられた新米の吸血鬼、弓塚さつきはジャージ姿のまま病院を飛び出す。

彼女は今、冬木市の新都の外れに作られた病院を脱出し、鼻歌交じりに夜の散歩を楽しんでいた。

「~~~~」

実は病院を抜け出すのはそう難しくは無い。

正面玄関は閉まっけていても、勝手口のどこかは開いているものだし、整形外科の患者などは基本的に患部以外は健康体なのだ。

禁煙の病院内に嫌気がさし、煙草を吸いに外に出るのもよくあること。

それを看護師たちも苦笑いしながら黙認している。

しかも、彼女は吸血鬼。

看護師と警備員たちが眼を光らせている地上の勝手口ではなく、

窓や屋上から抜け出す事も可能である。

それに夜の弓塚さつきは別段、何か問題があるという訳でもないのだ。

普段から精神は安定しているし、定期的に血液も摂取している。操り手の“親”もいない。

今夜は満月。万に一つもある筈がない。

完全なヴァンパイアと成った彼女ならば、吸血衝動をみずからの意思で押さえ込むだろう。

彼女のことをちゃんと把握している彼女専属の看護師はそう判断して、弓塚さつきの脱走を見逃した。

「ハグ…モグ……」

通りがかったコンビニでジュースとフライドチキンを買った彼女は、そのまま店の前の花壇に座ってそれを食べる。

人間だった頃でも買い食いにはしたが、こんな遅い時間ではなかった。

無音の街で、店の真ん前で買ったものを食べるという行為に、さつきは少しドキドキする。

「なんだかわたし、不良かもしれない。むふふ」

不良もなにも、彼女は人間社会に紛れ込んだ不良品（生ける屍）である。

そのあたりの自覚がイマイチ無いさつきだった。

「さてとー！」

当て所のない散歩だけれど、こんな綺麗な月夜なのだ。時間を浪

費するなんてもつたいない。

コンビニの入り口横に設けられたゴミ箱にフライドチキンの包装を捨て、ペットボトルのキャップを閉めるとさつきは歩き出した。ひとまずあの、川に掛かる大きな橋まで行ってみようと思う。

「ねえ」

そんな時だ、弓塚さつきが 出遭ったのは。

透き通った声だが、決して音量は大きくなかった。けれどたった一言で、弓塚さつきは絡め取られた。

「えっと、私？」

透き通るようなソプラノの声の持ち主は、黒いワンピースを着た女の子だった。

カラスの濡れ尾羽のような黒髪を膝まで流して花壇に座る彼女は、傍らの白い大型犬の背中を撫でながらさつきを見上げる。

少女が夜の街にいる異様も、人間離れた美貌も、薔薇のように赤い瞳も、この時のさつきには全く気にならなかった。

「こんばんは、いい夜ね」

「あの、えっと……」

少女は、あまりにも蠱惑的だった。

ワンピースの袖から除く白い肌も、桃色の柔らかい唇も、大人と子供の狭間にあるような肢体も、全てが魅力的過ぎる。

もしさつきが男性だったならば、言葉を返すことすらできなかったかもしれない。

「ふふつ。」

「ごめんね、突然声をかけたりして」

「あつ……」

少女は細い指を膝の上で絡め、男慣れした娼婦の口調で、さつきの意識を拘束した。

もはやさつきに少女の声以外は聞こえず、両脚は一切動く事はない。

そしてその事に、さつき自身が気付いていないのである。

「こんな月の綺麗な夜は、外に出てみるものね。貴女に逢えた。ねえ、聞こえない？ 耳はいいんでしょう、貴女」

少女に促されたことで、やっとさつきは路地裏の異変に気づけた。

「これって！？」

何かがコンクリートにぶつかる音。

女の子の悲鳴。下卑た男たちの嗤い声。

男が、女を襲う音。

「たぶん女の子の方は高校生かな。」

さつき男が5人がかりであの奥に引っ張って行ったわ」

少女は、何でもないかのようにそう告げた。

戯れるかのような言葉使いにムツとしたさつきの頭を、女の言葉は即座に冷却する。

「ねえ、どう？ 気にならない？ それとも自分もやったコトがあ

るから止めない？

どうかしら、弓塚さつき。

元人間で、今は吸血鬼の貴女は、どうするのかしら？」

その一言で、路地の奥に向いていたさつきの意識が冷や水を浴びせられたように固まった。

なぜ知っている？

なぜこの少女は、私の名前を、私の過去を知っている。

心臓が、ひとつ鳴った。この子は危ないと鳴った。

「ほら、早く選ばないと。

服を破く音まで聞こえたし、もうすぐ手遅れになるんじゃないかな」

「ッ！！」

激情は弾け、一気に感情が沸騰する。

今夜は満月。吸血鬼が最も活性化する夜である。

タガを外せば、獣は容易く彼女を支配する。

「そこで待っていて下さい。

色々、聞きたいことがあります！」

だからさつきは、獣が暴走する前に路地裏に走った。

彼女の言うとおり、時間が無いのだ。感情に身を任せている暇は無い。

コンクリートを砕く勢いで地面を蹴飛ばし、増大した身体能力で路地裏へと滑り込む。

闇を昼同然に見通せる彼女の眼が捉えたのは、シャツを引き裂かれ、今まさに下着を引き千切られようとする少女の姿だった。

「やめなさい！！」

言うが速いか、さつきは壁を蹴って、いや走って少女を襲っている男の頭を張り倒した。

咄嗟の行動にも関わらず力をセーブし、男の頭蓋を砕かずに住んだのは日頃のリハビリの成果だろう。

「やめなさい！ 嫌がってるじゃない！！」

突然、目の前に現れたジャージ姿の少女に男たちは困惑する。

どこから現れたのか、そもそもこのジャージ女は何者なのか？

正義感が強い身の程知らず、ともとれるが、一撃で仲間を気絶させたということは、何か格闘技でもやっているのだろうか？

そんな意味のない思考がアルコールに犯された頭の中をグルグル回る。

「なんだテメエは？」

まあそんな事、彼らには一切関係ない。

大事なのは、仲間が気絶させられるほど殴られたこと。しかもその相手が高校生くらいの小娘だということ。

ここで退いたら自分たちは同じテリトリーで遊んでいる者たちの中で笑いものになってしまう。

見たところ容姿は悪くないし、むしろここは獲物が増えたと喜ぶところだ。

だがそんなちっぽけな自尊心と劣情の対価は余りにも大きかった。

「いい度胸だな、アン」

「

「触らないで！」

殴られる前に殺れ、というのはさつき専属看護師の言である。異論は認めない。

「げふ……」

にやけた顔で上から被さるように髪をつかもうとした男の胸に、拳を一発。もちろん力はセーブしている。

せいぜいプロボクサーの右ストレートくらいの一撃である。

幸いなことに急所には入らなかったが、男はそのまま蛙が潰れるような声を残して崩れ落ちた。

その様に、男たちが啞然となっている隙に、さつきは襲われていた女の子のへ走り寄る。

いくら路地裏とはいえども、彼女にとって硬直する男たちの横をすり抜けるのは容易かった。

「もう大丈夫。貴方たち、すぐに何処かに行って！
今ならこれ以上何もしないから！！」

それは紛れも無いさつきの本心である。

今の一打はちゃんと制御できたけれど、次も上手くいくとは限らない。

だがその言い方は逆効果だ。

仲間を傷付けられ、さらにプライドまで傷付けられて、彼らがおずおずと引き下がる訳が無い。

「おいテメエ、自分の立場わかってんだろっな！」

ずいっと前に出てきた男は右手を固く握り、威嚇する。ケンカ慣れしたその男は、まず大喝で相手の動きを一瞬止め、次の一手でポケットに隠した護身用の警棒で殴りつける心算だった。そして相手が怯んだところを、

「何の格闘技をやっつてんだか知らないけど、そんなのケンカじゃクソの役にも立たないから」

後ろに居るこの男が素早く接近し、身体に電流を流すのだ。男は静かに大型の改造スタンガンを構え、さつき狙っている。

日頃の経験から、一発くらいじゃあ人が死なないのも知っている。むしろ大人しくなって色々都合がいい。

普通は男に使う戦術だが、相手は一発で仲間を昏倒させたバケモノ女。

手加減はいらないだろうと判断してタイミングをはかる。

「じゃ、カクゴはいいな？」

女に生まれたことを後悔させてやるよ」

「いいや、むしろ感謝するかもな！」

武器を確認し、人数を確かめて自分の優位を確信した男たちはゲラゲラと嗤いだした。

さつきの背中には壁、人数はこっちが4人で相手は二人。しかも女あとの二人に壁になって逃げないようにしろと言いつつ、グループの中核である二人はさつきに襲い掛かった。

「オラア！」

「や、ちょっと、来ないで！」

恐らく、彼らも何かの武術の経験があったのだろう。素早く引き出されて振るわれる警防とスタンガンは思いのほか速くさつきに迫る。

対してさつきは、素人感まるだしなファイティングポーズ。もはや勝敗は明らかだった。

「は？ え！？ ギャツ！！」

さつきの圧勝である。

そもそも、吸血鬼と人間では根本的に『違う』。

ましてさつきほど膂力を持つとなれば、全力を出せばデコピン一発で頭蓋を割れるのだ。

目一杯手加減して放たれた左は、不良たちから見れば悪夢のような速さを持って迫り、胸骨を強打する。

さらにスタンガンを持って突進してきた男は、そのスタンガンごと返しの右手にふっ飛ばされ、コンクリートの地面に叩きつけられて意識を失った。

死なないだけ運がいいと言えるかもしれない。

「えっと、ごめんなさい」

共に一撃で気絶させられた仲間の姿に、残るふたりの表情が固まる。

さつきの口から思わず零れた謝罪など、彼女の背に庇われている少女にすら届かなかった。

「バ、バケモノだ！！」

ヒィ、と喉を引きつらせて背中を向け、まだ無事だった二人は一斉に逃げだした。

そのうちひとり気絶した仲間を躓いて顔面からコンクリートにダイブし、もうひとは硬い雨どいのパイプに膝をぶつけて悶絶しながらも逃げだす。

路地の出口はすぐそこ。人ごみにまぎれてしまえば、もう追っつてはこれないはずだ！

「このボケ、どきやがれ！！」

その出口に、人影があった。

大型犬を連れた少女とおぼしき輪郭。恐慌を起こした彼の頭は、その異常に気付けない。

邪魔だと声を荒らげた瞬間、彼はその場に固定された。

「本当に醜悪。」

ルールを踏み越える者の矜持すら無いのね」

黄金の瞳が、彼をその場に縫い止めた。

「あ、う……」

それは、先ほの白い大型犬を従えた少女だった。
薔薇の赤だった眼が黄金に輝き、路地に居る7人を縛っている。
最上位の吸血鬼の持つ『黄金』の魔眼の前には、ヴァンパイアで
あるさつきですら、刹那の対抗も赦されなかった。

「いいかしら？ 法っていうのはね、貴方たちが社会と交わした契
約なの。」

それを破ったものは群れから追い出される。

群れてこそ人間が、そこからはぐれて いったい何が出
来るの？」

そう言つて薄く笑つた少女は、一番前にいた男の下に歩み寄る。
背中を向けられてるさつきから男の顔は見えないが、小刻みに
震える肩が、彼の感情を余すことなく伝えている。

あまりにも異常。喉が痙攣して声も出せない。

「ヒ あ？」

不意に、その拘束が緩んだ。

緊張した筋肉が一瞬で弛緩した事で、男は膝をつく。

その彼の目の前には、少女白い指と桃色の爪。

彼女はそれを男の首筋に当て、

「餌になる事、くらいでしょう？」

何気ない仕草で、引き裂いた。

本当に何気なく抓んで捻るだけで、男の筋肉に覆われた首筋を抉
り、大動脈を引きちぎったのだ。

爪や牙といった人体の硬い部分など、使う必要も無いとでも言うかのように。

太い血管が裂けた事で圧力から開放された血液が冗談のような勢いで一気に吹き出し、ビルの壁を染める。

服が濡れるのを嫌った少女は、少し身体を動かす事で血液を避け、僅かに手に着いた血を舐めると、顔をしかめてそれを吐きだした。

「不味いわね、やっぱり。」

プライミッツ。女は残して、男は処分してくれる？」

なおもさつきを含む7人、いや6人に自由はない。

最も後方で、さつきに庇われる少女は最も幸運だった。

少女のもつ絶対的な恐怖に未熟な精神が耐えきれず、男が首を裂かれる前に意識を落としていたからだ。

男たちは仲間の死を眼にしても、悲鳴を上げる事も赦されず少女を凝視している。

一方のさつきは、少女ではなく、彼女の傍らで、現れてから微動だにしない白い犬を見ていた。

純白でふさふさな体毛とピンとたった耳、透き通った泉の様な青い眼。

毛の内側にある筋肉の群れは毛皮越しでも解るほどで、体格は3メートルを超えるだろう

伏せているにも関わらず、犬の肩は少女の腰のあたりにある。

そのプライミッツと呼ばれた白い犬が、少女の声に応えて、のっそりと立ち上がる。

あ、死んだ

威嚇もしていなければ唸りもしていない白い犬と目が合った瞬間に、さつきは犬にあらゆる手段で殺される自分を何度も何度も繰り返して幻視した。

犬の持つ、人間に対する絶対的殺害権。これを以って彼は、最強の一角に数えられる。

ガイアの怪物、プライミッツ・マードー。使徒二十七祖の第一位に列する正真正銘の怪物である。

『ワウ

』

一瞬だった。止める間もない。少女の束縛の中で、さつきが“動こうとした”瞬間には終わっていた。

白い塊がさつきに視界で拡大し、渦を巻いて路地を駆けつけた時、路地に居たはずの4人の男とひとつの死体は消えていた。

口から僅かに零れる鮮血だけが彼らがこの犬の体内へ消えた事を

証明している。

『 『

さつきの眼前に迫ったプライミッツは、深い海のように青い瞳にさつきを写す。

獣のように唸る訳でもなく、ヒトのように殺意を迸らせる訳でもない。

何の感情も浮かんでいない純色の青から感じる、圧倒的な戦力差。プライミッツ・マードーという存在は、ただそこにあるだけで、生きているだけで全ての生命を威圧するに足る。

「あ、ああ……」

時間にして数秒間。

さつきを観察したプライミッツは興味を無くしたように背を向けると、少女の隣へと戻り地面に伏せた。

少女はその頭に労いの掌をのせ、労いの言葉と共に数度なでると一歩前に歩み出る。

「さて、まずひとつ質問をしましょう。私が誰か、解るかしら？」

さらに一步。少女は5秒に1歩のペースで近づいて来る。

対するさつきはただ啞然とするのみで、意味のない音を口から吐き出す以外に何もできない。

彼女は少女の質問に心える事も出来ないが、その態度が「知らない」と語っていた。

「あきれたわ。この程度の束縛も破れない。私が誰かも解らない。おまけに、目の前で人間が死んだくらいで動揺する。貴女、本当

に吸血鬼なの？」

「さつきと少女の距離が3メートルにまで縮まった時、歩みが止まる。」

少女の白い繊細な手が、ゆっくりと持ち上げられる。

彼女が上げた手を右に動かすと、さつきにかかっていた束縛が解け、身体に自由が戻りその場にへたり込んだ。

「ねえ、質問に答えてくれないかしら。さつきと同じように、今度も行動で現してくれると嬉しいわ。」

ほら、はやくその女の血を啜りなさい。

喉に喰らいついて牙を突き立て、肌を引き裂いて自分が吸血鬼である事を証明するの。」

ソレは、貴女のために残してあげたんだから。喜びなさい、処女の血よ？」

一瞬の呆我の後、少女の言葉で自分の背中に女の子を庇っている事を思い出したさつきは、いつでも立ち上がった動けるように四肢に力を込める。

たとえ空元気でも、ハッキリとした意思を瞳に乗せる。

そんな事は出来ない。

私と同じように、理不尽に命を奪われるヒトなど、もう見たくない。

私は、まだそこまで堕ちてはいない！

意思是交わった視線に乗って、少女に届いた。

「そう、よく解ったわ。」

貴女はまだ“人間”なのね。弓塚さつき」

みるみるうちに、少女の雰囲気を変質する。

先ほどの、プライミッツ・マードーとは違う、明確な敵意がさつきを襲う。

少女の黄金の瞳に映るのは、強烈な嫌悪感。

まるで命よりも大切な物を壊した仇を見る様な眼で、さつきを見下している。

「プライミッツ、食べていいわ」

「　　っ、ダメ!!」

少女の口から出たのは、主語のない言葉だったが、それが何を指すかは即座に解った。

先ほどまで、路地の出口にあつた白い塊が消える。

咄嗟に身体を反転し、手を伸ばすが、

「そんな……」

全く持って、間に合わなかった。

少女がいたはずの場所には、食べた者を租借する白い犬が座っていた。

「か、返して！」

私は、あの子を守るって約束したんだから!!」

悲鳴にも似た叫びと共に、渾身の一撃をプライミッツの頬に打ち込む。

しかし思いのほか弾力のある感触が手に返っただけで、当のプライミッツはびくともしない。表情ひとつ変えない。

青い瞳もさつきを見る事はなく、ただ少女だけを見つめている。一方、自分が庇っていた女の子を喰われた事に恐慌を起こしたさつきは少女の事など忘れ、一発で足りないならと再び腕を振り上げる。しかしその腕は、中空で固定された。

唐突に振り上げた手を掴まれた事に驚いたさつきがその右手に視線をやり、さらに驚く。

掴まれている感覚は確かにあるのに、そこには何も無い。ただ、小さな手で掴まれているかのような皮膚の凹みだけがある。

恐る恐る少女に視線を向けると、彼女は軽く手を上げて、何かを掴む動作をしていた。

「ありがとう。」

もういいわ、下がりなさい」

まず、己の意思を代行してくれた友人へ労いの言葉。

「貴女は、あの子の孫なのよ。たとえあの“蛇”の娘だとしても、それは純然たる事実なの。」

それなのに、その様は何？ 吸血鬼としての意識も、超越者としての理解もない。

私とプライミッツの力は解っているはずなのに、そんな安っぽい正義感で人間を護ろうとするなんて。

恥を知りなさい、弓塚さつき！」

次いで、凄まじいまでの怒気を孕んだ声が少女から放たれる。

同時に鋭い痛みがさつきの意識を犯した。

「あつぐ……」

ビキツ、と乾いた木が割れる音が体内に響き、掴まれていた右手首がだらりと下がる。

前腕を支えるところ骨と尺骨は共に碎かれ、潰され、油性マジックくらいまで細くなつて激痛を脳に伝えてくる。

蹲りたいほど痛いのに、少しでも動けば襲ってくる激痛で身動きが取れない。

ようやく理解した。彼女は、何か魔法か超能力のような力で自分の手首を掴んでいるのだと。

「は、はなして」

「ええ、いいわ」

この地獄から逃れたい一心での懇願は、存外にあっさりと受け入れられた。

ばい、とまるで空き缶を放るような気軽さで少女はさつきの手首の念縛を解き、開放されたさつきの手首を注視する。

質量化した呪いによって絞られていたさつきの手首は、直接的な縛りから開放された瞬間に残肢をレジストし、並みはずれた復元呪詛が時間を巻き戻す。

生物としては有り得ない再生方法。

骨と血管と神経と皮膚その他の並行再生によって、さつきの右手は徐々にその形を取り戻す。

「ふうん、やっぱり吸血鬼としてのポテンシャルは高いのね。けれどそれだけ。

いくらハードが優秀でも、ソフトがお粗末なら話にならないわ。

貴女はここで死になさい」

ヒュ、と少女の手が宙を薙いだ。

「うつ、ぐ

」

上から下へ。

風を送るように一度だけ振られた掌は先ほどよりもさらに強く広い力を具現化し、さつきに襲いかかる。

手首を抑えて蹲るさつきの背中にかかったのは、まるで大きな布団を何十枚も重ねられたかのような重圧だった。

柔らかく形を変えながら押しつぶしてくるそれは、押し返そうともがけばもがくほど、より念入りに重量を駆けてくる。

「ぐ、ああ

」

まず肺の中にあつた空気が押し出される。

次いで先ほど食べたチキンとジュースが、胃酸の熱を伴って口から逆流した。

更に鼻の奥から感じる熱。

まずは出やすい鼻から血が外に飛び出し、さらにブシツ、と音をたてて眼の周りの毛細血管が破裂した。

「アア……」

ギシギシと肋骨は音を立て、折れた。

生身の掌が血を噴き出しながら、コンクリートにめり込んでいく。

「アアア……」

硬い地面に押し付けられる顎が割れるのも時間の問題だろう。

その次は、肩と腰。いや、背骨が折れるのが速いかもしれない。

刻々と重量を上げていく中で、さつきはアルトリアの他にも、世

界には絶対に適わないと解る力があるのだと思った。
それに勝つ方法など、退ける方法など、無い

乾く(どくん)

いや、ひとつだけ、あった。
不意に響く声に耳を傾ける。

乾く(どくん)

そつだ、委ねてしまえばいい。

乾く(ドクン)

この衝動に、全てを

M o o n
D r i p

… 02 黄金の月光

「 ツ、痛いわね」

ふと感じた痛みに少女が腕に眼をやれば、柔らかい産毛の生える皮膚がカサカサに乾き、ささくれだっている。

少し魔力を入れてレジストをかければたちまちに修復されてしまう程度のそれだが、彼女にとってみれば十分驚くべき事態だった。だれかに傷つけられて痛みを感じたのは、はたして何十年ぶりだろうか。

「驚いたわ。私を傷つけられるほど強力な固有結界を持っているなんて。

ソフトは不良品のくせに、ハードは超のつく一級品だなんて。

つくづく貴女は持っている宝を腐れさせているのね」

「う、うう……」

ひとしきり叫んだ後、未だにズキンズキンと痛み続ける胸を抑えて、さつきは少女の声に顔を向ける。

喉が渴く。

限られた吸血鬼のみがもつ異能は、さつきにもまた備わっていた。さつきの持つ究極の一。固有結界『枯渴庭園』
結界内に呑みこんだ生命から、水分と魔力を奪い、霧散させる砂の力の具現であり、命と未来を奪われたさつきの負の情念そのものでもある。

この世界においては術者のさつきですら枯渴の対象であり、実は己と相手の双方を破滅に向かって突っ走らせる歪な代物だった。

「うわああーっ！！」

さつきが、半狂乱に成りながらも拳を握る。

地面を蹴飛ばし、拳を振り上げて少女に迫る。

この世界で、この拳が届けば相手は先ほどのように平気な顔は出来まい。

さつきは理性では無く魂でこの世界を理解し、そう確信していた。
『固有結界』

心象風景の具現化した世界において、術者であるさつきには、世界の支配という圧倒的なアドバンテージがある。

「それで？ この程度で私に届くとでも」

ある、筈だった。

「そんな！」

さつきの身体は、あと一度踏み込めば拳が届くという位置で、少女の掲げた手によって静止させられていた。

見れば、乾いて唇から血を流すさつきとは異なり、ふっくらと瑞々しい唇は未だ健在で、何処にも枯渴の影響は見られない。

しかしそれは間違いである。

固有結界内において、定められたルールに反する事態はよほどの事が無い限り起こらない。

少女の身体から魔力と水分が奪われ続けている事は事実である。

結界内においては、さつきが圧倒的に有利である事も事実である。現に少女は、さつきを束縛するために、先ほどの数十倍の魔力を消費している。

けれど、それだけだ

現実として、さつきは少女に指一本触れることが出来ずに彫像のように固められている。

少女とさつきの間にある、生物としての絶対的な差。

如何に過酷な日射しでも、海を干上がらせることなど出来る筈がない。

「今度は私の番かしら。せっかくだから魅せてあげる。
貴女からの痛み（プレゼント）、中々ステキだったわ」

ふわり。

そんな形容詞が似合う動作で、少女は腕を虚空に掲げる。

これから始まる彼女の舞台の邪魔にならぬ様に、プライミッツは静かに庭園を後にする。

直後、少女の喉が高らかに詩を謳い上げ、細く白い指が天空を指差した。

「
仰ぎなさい、赤い月を」

それは、紛れもない死の宣告だった。

「
欠けた月（Moon Drip）」

赤い空一面に亀裂が奔る。

まるで球体を押し付けたかのように、空の頂点に丸い凹みが生まれ、生まれた罅から空気が吸い出される。

「う、そ
」

そこから現れたのは赤い赤い、血のように真っ赤な月だった。

枯渴庭園の空を突き破り、割り込んだのはよく見慣れた満月の姿。地球という邪魔者によって真円を描く事を赦されない、しかし地球が無くては存在できない月の姿。

少女の根源、欠けた月そのものだった。

「ううう……」

胸に穴を空けられた様な痛みがさつきを襲う。

当たり前だ。

彼女の精神は今、欠けた月によって蹂躪されているのだ。これで傷まない方がどうかしている。

まして今の彼女は、彼女自身がどう思っているように、れっきとした吸血鬼である。

神秘の住人にとって、精神の傷は時に肉体を滅ぼす。

「くすくすくす、痛い？」

そうよね、心象世界を具現化するということは、即ち己の心を誰かに晒すという事だもの。

もちろんそれは圧倒的優位を得る事と同意だけれど、それを返されれば、後には何も残らないわ」

舞台は既に、赤い月が照らす大地の上で、少女は艶やかに笑った。地面は、さながら月面のように無数のクレーターが刻まれた大地。

さつきのもつ礫砂漠の大地すら生温い。

少女の心は、水を失い、空気を亡くし、命を使い果たした無の地平だった。

全てが失われた地球ほしの上で、少女だけが嗤っている。

「さあ、もう終わりにしましょう。

けれど楽に死ねるとは思わないで、貴女はあの子から真円（純血）を奪った蛇の娘よ。

散々に髑つたあとで、世界との縁を断ち切ってあげる」

そう言っつて、少女が指を横に動かすと、さつきまで在ったはずの赤い月と不毛の大地は唐突に消え失せた。

さつきの『枯渴庭園』も、少女の『欠けた月』も解除され、景色は元のビルの谷間に戻る。

少女の隣には、異界が出現する前と同じく、白い犬の姿。

彼女の手前に、全身を奔る痛みに悶えるさつきの姿。

そして中空には、

「消え去れ」

黒い二筋の刃と、剣を構える黒き騎士王の姿。

「ゲアウ!!!」

「姫様!!!」

黒き騎士王、アルトリアは、着地するや否や、三撃目の黒刃を胸の高さで振り抜いた。

半円を描く卑王鉄槌の刃は、ビル壁を砕いて少女に迫る。

しかしそれは少女に届く事はなく、少女の隣から飛び出したプライミッツ・マーダーによって噛み砕かれた。

さらに己の友を守ったガイアの怪物に刹那遅れて、主を護る事を己の存在意義とする黒と白の騎士が彼女の隣に降り立つ。

卑王鉄槌の刃の一撃目は白騎士に、二撃目は黒騎士にそれぞれ直撃させた筈だ。

盾で防いだとしても、大抵は命を落とす。

にもかかわらず、白騎士も黒騎士も全く危なげも無い姿で、ゼロコンマ数秒の硬直の後には主の窮地に駆け付けていた。

「ちっ、可愛げの無い。」

二十七祖でも上位はまた違うか」

「まあね。けどアンタも中々だよ。リイゾの血を見るなんて、本当にひざびさだった」

「貴様の血もな、フィナ。」

我らの使命は、姫様の守護だ。姫様さえ無事ならば、他の事はどうでもいい。」

さつきの真後ろに降り立った彼女の主、アルトリアは己の黒刃が悉く無効化された事に悪態をついた。

少女の目の前に降り立った二人の騎士の名は、リイゾ＝パール・シュトラウトとフィナ＝ラウド・スヴェルテンという。

それぞれが死徒二十七祖に席を持ち、黒騎士と白騎士の異名を持

つ『死徒の姫君』の守人だった。

彼らは造形も色も正反対の鎧を纏いながらも、鏡に写したような一対の雰囲気纏い、姫君の左右に立つ。

「まあいい。それで、いつたい私の従者に何の用だ。アルトルージュ・ブリュンスタッド」

「あら、その子は私の妹の孫よ。
血縁の私が逢いに来るのに理由が必要かしら？」

「戯け。貴様とさつきの縁は“蛇”が消滅した時点で断絶したと見るべきだ。

もう一度訊くぞ、何をしに来た。答え次第ではここでその首を叩き落とす」

アルトリアの発した殺気に、二人の騎士は僅かに腰を落とし、プライミッツも低く唸った。

彼らがその気になれば、1秒とかがからずに彼女の飛びかかれる。だがアルトリアとて、これくらいで怯むような女ではない。

「へえ、勇敢なのね。流石はアーサー王。けれどいいの？」

死徒27祖の上位者4名を相手にして、僅かも気負われた様子の無いアルトリアを見て、アルトルーシュは自身が絶対の信頼を置く騎士のうち、白騎士の方に視線を送った。

その彼が主の意を受けて腰のマスクットをビルに切り取られた夜空に向けて、そのビルを淵に沿うようにして100名以上の人影が出現する。

「百や二百なら、この地でも展開できるのよ？」

影のみで構成される彼らは、一様に手に古めかしい武器を持っている。

カットオフされたマスキット。片刃で分厚いナイフ。柄に布が巻かれた片手斧。

それらはすべて、かつて大航海時代に名をはせた海賊たちが持つ武器だった。

「幽霊船団パレード。なるほど、これがそうか。

だが足りないな。私の名前を知っているならば、この剣の真名も知っているのだろうか？

二百人の兵士と、姫を守護する騎士が二人に守護獣が一匹。城ひとつを相手にすると思えば、足りない」

もちろんこの言葉は強がりでは無い。紛れもない本心である。

海賊の群れ？ 笑わせるな。

彼女はかつて一国を率いて戦場を駆け抜けた騎士王であり、かつての聖杯戦争では千の英霊と共にあるマケドニアの王を相手に戦った剣の英雄なのだ。

アルトリアはひとしきり周囲を見回した後、己の持つ黒い聖剣に魔力を籠める。

周囲への被害は……まあいいだろう。この冬木の街ならば、多少の無茶は通る。いざとなったら凜も言峰もいる。

いよいよ黒い聖剣に特有の円環文様が出現し、呼応するようにもう一人の騎士、レイゾのもつ魔剣がこれを迎え撃つ為に現生へと出現しようとしたその時。

「やめた、割に合わないもの」

騒動の中心に居るはずのアルトルーシュはつまらなそうにそう言い捨てると、座った目でアルトリアを睨みつける。

「もともと、ここに居るのはただのウサ晴らしよ。

貴女の言う通りだわ。

“蛇”が　　ロアが消えた時点でそのさつきとの縁は切れている。あの子の魔力はその子の力を励起はしてもその後の残留はない。

けどまあ、あまりにも不快だったから、見かけたついでに殺そうと思っただけだし」

彼女は別になにか目的があつて日本に来たわけではない。遊興でふらりとこの日本を訪れただけであり、プライミッツとふたり騎士は常に彼女の傍に在るだけだ。

戦力的にはもはや世界最強レベルだが、別に何かを攻めるつもりもない。

いつも城に籠ってばかりでは面白くないので京都で遊んで、富士山を見て、秋葉原で買い物でも楽しめればいいかというつもりだった。

そのついでに最愛の妹と、その孫の様子を見に來ただけなのだ。

「負けるとは思えないけど、こんなくだらない理由で自分の騎士を傷つけるなんて馬鹿馬鹿しいわ。

契約しましょう。

私は貴女と弓塚さつきに手を出さない。その代わり、貴女も私たち四人に手を出さない。それでどう？」

「……いいだろう。」

死徒の言葉など信じるに値しないが、契約と成れば別だ。
貴様は決して、他者との契約を裏切るまい」

「それが私の役目だもの。

そうだ。もうひとつ、貴女に私からもうひとつ契約（呪い）をかけてあげる。

いずれ必ず、貴女は私たちが殺す。弓塚さつき諸共ね。だからそれまで死ぬんじゃないわよ？」

「条件定義された不死の呪いか？

断る。そんなもの無くとも、貴様を含め、私は誰にも殺されるつもりはない」

私を殺してよいのは、私だけだ。

アルトリアが口内で付け加えたひと言は、誰にも届く事無く消える。

「そう、残念だわ。

じゃあまたね。次はこんなところでは無く、私たちに相応しい舞台で逢いましょう」

そう、冷めた笑顔では言い残し、アルトルージュは路地裏を去った。

姫につき従うプライミッツと両騎士もまた、アルトリアに対する警戒を解く事無くこの場を去る。

後に残されたのはアルトリアと茫然とするさつき、そして哀れな犠牲者の血痕だけだった。

「なんで……」

その、さつきの口がようやく動く。

彼女は間一髪でアルトリアに助けられて以降、一切口を開けなかった。

もちろんそれは、目の前で展開され規格外の力を持つ者たちに気負われていたというのもあるだろう。

しかし彼女を意識を縛っていた理由の大半は、守りたいと願った少女を救えなかった事への自責の念である。

「なんで、もっと早く来てくれなかったんですか！

もっと早く来てくれてたら、あの子は死ななかったのに！！」

だからそんな、心にも無い言葉が口をついた。

もちろんさつきも解っているつもりだった。

アルトリアは全速力で駆け付けてくれたが、それでも間に合わなかったのだ。

彼女を死なせてしまったのは、アルトリアが駆け付けるまで護りきれなかった自分のせいだと、そう思った。

「……よく、解らんが」

そう、思いたかった。

「それはあの不良どもと女のことか？　なら私に言う意味はないな。

私に彼らを助ける意思が無い以上、彼らの命数はアルトルージュと出合った段階で尽きていた。

食事をする時ならば隙を見せるかと思い上から伺っていたのだが、甘かったな」

まあ過ぎた事は仕方がない。とでも言うかのように、アルトリアはひとつ息を吐く。

「そんな……」

「さつき、貴様は私を都合のいい正義のヒーローとでも思っていたか？」

生憎だが、私は私の為にしか動かない。貴様を助けたのは、役に立ちそうな才能を秘めていたからだ。

私にとって奴らは罔以上の価値を持たなかった」

そう言って、無駄話は終わりだと彼女は背を向けた。

一方で魂の抜け殻のように放心したさつきは、へたりこんだ姿勢のままビルに切り取られた空を仰ぐ。

「どうして

」

アルトリアがさつきに齎した絶望は、ある意味では目の前で少女を喰い殺された以上のものだった。

信じていた。

さつきにとって、自分をあの路地裏から引っぱり出してくれたアルトリアは、正にヒーローだったのだ。

普段は憎まれ口を言っているも、誰かの危機と成れば颯爽とかけつける英雄だとどこかで思っていた。

しかし現実是非常で。

このアルトリアは、どこまでも利己的で自己中心的な存在でしかなかった。

それ故に彼女は“黒き騎士王”であるのだが、そんなことはさつきには解らない。

打ちのめされた彼女に在るものは、理想を裏切られた事への怒りのみだった。

「信じて、いたのに!!」

さつきの下のコンクリートが弾けた。

彼女の動向は緋色に染まり、獣のように縦に割れる。

鋭く硬質化した爪を、ヴァンパイアとして最高クラスの膂力が支える。

獲物に襲い掛かる猛獣の如く、小さく弧を描いた右腕は、獣すらも及び付かぬ速度と剛力をもってアルトリアの首筋を狙った。

「ハッ、甘えるな!」

ビキッ、と、本日二度目の、腕の骨が折れる音がさつきの体内に響く。

自分の背後で膨れ上がる敵意に反応したアルトリアは、持ち前の直感でさつきの攻撃の軌道を読み切り、聖剣の柄頭をさつきの腕に叩きこんだ。

その衝撃で、さつきの腕はアルトリアに届く前にへし折られたのだ。

さらに彼女の攻撃は止まらず、返す刃でさつきの身体を左肩から右脇腹まで斜め一直線に斬り裂いた。

その傷が浅く表層のみを斬り裂くにとどまったのは、敵意には敵意を以って応えると決めているアルトリアの精一杯の妥協だった。

「が

」

斬られた。

その事実には驚愕する前に、まずさつきが感じたのは熱さだった。

次いで眼前に舞う血飛沫とともに、痛みが猛烈な勢いで襲ってくる

る。

熱、痛み、怒り、哀しみ、混乱……

あらゆる感覚と感情が彼女の中でスパークし、彼女は自らの肩を抱いて蹲る。

その頭上に、声が降った。

「顔を上げろ、さつき」

「……」

アルトリアの声に、初めてさつきは応えなかった。

しかし彼女はそれを怒ることもなく再び顔を上げるように命じる。都合3度それを繰り返し、4度目にさつきが顔を上げた時、そこには切りとられた空に浮かぶ満月を背に、深く輝く黄金の瞳を向けるアルトリアの姿があった。

その様子は、あの夜と似ている。

けれどアルトリアのもつ雰囲気のみで、あの夜とは全く違うものと成っていた。

これから与えられるのは、救いではなく道標なのだ。

「さつき、先ほどの一撃はなんだ。

自分で勝手に描いた理想像の私に、絶望し、それを消そうとでもしたか？

戯け、理想とは己をキャンバスにして描くものだ」

す、とアルトリアはさつきの胸を指差す。

王の責務は、その声で、その背中で、民を導く事。

たとえ黒く墮ちようとも、アルトリア・ペンドラゴンはあくまで
も王なのだ。

「理想を他人に求めるくらいなら、貴様はその理想になればよい。
幸い、貴様には力も才能もある。固有結界という異能もある。理
想を叶えるのに不足はなかるう」

以前彼女は、目の前のさつきに救いを与え従者とした。
ならば今度は、彼女に志を与え戦士としよう。

長く険しい戦士の道を歩くならば、確固たる目標と己を持たなけ
れば、容易く摩耗する。

誰よりもそれを知っている彼女は、さつきを戦士とするか従者の
ままとするかをずっと考えていた。

そしてさつきは今夜、言葉よりも雄弁な行動によってそれを示し
た。

「少し早いが、問おう。弓塚さつき。

従者として私の背中に着いて来るか、戦士として並び立つか、選
べ？

貴様が望むなら、私は貴様を導いてやる」

「
真っ直ぐに視線を向けるアルトリアに、さつきは何も答えられな
い。」

彼女の言葉は、あまりにも衝撃的だったからだ。

自分が戦うなど考えた事もなかった。

日本に生まれ、日本で育った彼女にとって、戦いとは遠い世界の

ものだった。

私の居場所は、ここにはない。

しかし引きずり込まれた世界は、死と血の臭いに溢れていて。

自分はこれから目の前の騎士の従者としてその影に隠れて生き、いずれは元の世界に戻りたいと思っていた。

けれど今日、改めて思い知らされた。

こちら側の世界の理不尽に、ある日唐突に囚われるのは私だけではない。

私はたまたま、目の前の騎士に救われた。

あの子はたまたま、自分に会ったが為に巻き添えになって死んだ。

それに、目を背けていいのか？

能力を持つが故に救われた自分が、何もせずに蹲っていていいのか？

いや、それも違う。

私にあるのは義務感だけじゃなく、想いだ。

私は、もう二度とこちら側の世界の理不尽に囚われて不幸になる人を見たくない。

できるならば、自分の様な悲劇はもう怒って欲しくない。そう想っているんだ。

だから選ぶ道は、決まった。

「戦う。戦士として、隣に立ちます。アルトリアさん」

「いいだろう。」

いずれ真の戦士と成った時は、隣に立つ事を赦そう」

立て、と、アルトリアは従者ではなく戦士見習いとなったさつきを促した。

王であるアルトリアにとって、さつきが隣に待る臣下であることは変わらない。

しかし今夜この瞬間から、アルトリアが騎士として戦場に赴くならば、さつきはその後ろでは無く隣に並ぶ権利を得た。

遠くない将来、さつきが一人前の戦士となったときにそれは達成されるだろう。

「帰るぞ、さつき」

「……はい」

立ち上がり服についた埃を払ったさつきは、一度だけ後ろを振り返って瞑目する。

護りたくて、護れなかった少女。

彼女のような人を一人でも少なくともするためにならば、さつきは頑張れる。

もう何処にも居ない彼女に、さつきは瞼の裏から謝罪と祈りを送り、アルトリアの後を追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9556v/>

黒き騎士王 - Alternative Edge -

2011年9月15日14時37分発行